



Sun Java™ System
Instant Messaging 7
管理ガイド

2005Q1

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-1487

Copyright © 2005 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

このソフトウェアは SUN MICROSYSTEMS, INC. の機密情報と企業秘密を含んでいます。SUN MICROSYSTEMS, INC. の書面による許諾を受けることなく、このソフトウェアを使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者が開発したソフトウェアが含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Solaris、JDK、Java Naming and Directory Interface、JavaMail、JavaHelp、J2SE、iPlanet、Duke のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴ、Solaris のロゴ、SunTone 認定ロゴマークおよび Sun ONE ロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Legato および Legato のロゴマークは Legato Systems, Inc. の商標であり、Legato NetWorker は同社の商標または登録商標です。

Netscape Communications Corp のロゴマークは Netscape Communications Corporation の商標または登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

目次

はじめに	9
対象読者	9
お読みになる前に	10
マニュアルの構成	10
表記規則	11
表記上の規則	11
記号	12
シェルプロンプト	13
関連マニュアル	13
Java Enterprise System マニュアル	13
その他のサーバーマニュアル	14
Sun リソースへのオンラインアクセス	14
Sun テクニカルサポートへの問い合わせ	15
関連するサードパーティの Web サイトの参照	15
コメントの送付先	15
第 I 部 インストール後の設定	17
第 1 章 インストール後の Instant Messaging の設定	19
設定チェックリストの確認	19
UNIX システムユーザーおよびグループの作成	25
インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定	26
サイレント設定の実行	28
第 2 章 Instant Messenger のセットアップと起動	29

Java™ Web Start の有効化	29
Sun Java System Web Server Enterprise Edition の設定	30
Apache Web コンテナの設定	30
クライアントシステムの設定	31
Instant Messenger の起動	31
Web ブラウザからの Instant Messenger の実行	31
スタンドアロンアプリケーションとしての Instant Messenger の実行	32

第 II 部 Instant Messaging の管理 33

第 3 章 設定ファイルとディレクトリ構造の概要	35
Instant Messaging Server のディレクトリ構造	35
Instant Messaging サーバーの設定ファイル	37
Instant Messaging のデータ	37

第 4 章 Instant Messaging コンポーネントの管理	39
エンドユーザーの管理	40
新規ユーザーの登録	41
Instant Messenger で新規ユーザーの登録を許可するためのカスタマイズ	41
新規ユーザーの登録	42
Instant Messaging コンポーネントの停止、起動、更新	43
Instant Messaging コンポーネントを起動する	43
Instant Messaging コンポーネントを停止する	44
コンポーネントの設定を更新する	45
Instant Messaging コンポーネントのステータスを確認する	46
Instant Messaging Server およびマルチプレクサの設定パラメータの変更	46
ロギングの管理	47
ロギングの概要	48
ロギングレベル	49
ログのレベルを設定する	51
クライアントのロギングの管理	51
複数の Instant Messaging Server の連携配備	52
Instant Messaging Server 間の通信を設定する	53
Instant Messaging における SSL の使用	55
証明書発行局への証明書の要求	56
証明書のインストール	56
マルチプレクサと Instant Messenger 間の SSL の有効化	58
セキュリティ保護されたバージョンの Instant Messenger の起動	61
サーバー間通信の SSL を有効にする	61
2 つのサーバー間の SSL の有効化	62
Instant Messaging の LDAP アクセス設定の管理	64

匿名ユーザーとしてのディレクトリ検索	65
動的 LDAP サーバグループの設定	66
Instant Messaging データのバックアップ	67
バックアップすべき情報	67
バックアップの実行	68
バックアップ情報の復元	68
第 5 章 Instant Messenger の管理	71
Instant Messenger の設定	71
Instant Messenger の起動	72
Instant Messenger を起動する	72
コードベースの変更	74
Web コンテナのポートの変更	74
Instant Messenger のカスタマイズ	75
Instant Messenger のリソースファイル	75
index.html ファイルと im.html ファイルのカスタマイズ (LDAP 単独配備)	78
Sun Java System Access Manager SSO による Instant Messenger の起動	79
アプリケーションのカスタマイズ (Java Web Start)	79
imbrand.jar の内容一覧	81
Instant Messenger の外観のカスタマイズ	86
ユーザー名表示のカスタマイズ	87
検索結果におけるユーザー名表示のカスタマイズ	87
ツールヒントにおけるユーザー名表示のカスタマイズ	88
クライアントユーザーによる連絡先の検索方法の変更	89
会議室とニュースチャンネルの管理	89
会議室およびニュースチャンネルの作成権限のエンドユーザーへの付与	90
Instant Messenger のプロキシ設定の変更	90
Instant Messenger のプロキシ設定を変更する	90
Instant Messenger 公開機能セットの制御	91
エンドユーザーのシステム上に格納される Instant Messenger データ	92
カレンダーのポップアップリマインダーの使用	94
ポップアップリマインダーの概要	94
ポップアップリマインダーの操作	94
ポップアップリマインダーのアーキテクチャフロー	94
Instant Messaging ポップアップの設定	95
カレンダーエージェントの管理	98
リソースファイルの再配備	99
第 6 章 Instant Messaging ポリシーおよび Presence ポリシーの管理	101
プライバシー、セキュリティ、およびサイトポリシーの概要	101
サイトポリシー	101
会議室とニュースチャンネルのアクセス制御	102

ユーザーのプライバシー	103
エンドユーザーと管理者の権限を制御する方法	103
アクセス制御ファイルによるポリシー管理の概要	104
Sun Java System Access Manager によるポリシー管理の概要	104
ポリシー管理：使用する方法の選択	104
ポリシー設定パラメータ	105
アクセス制御ファイルによるポリシー管理	106
アクセス制御ファイルの形式	107
アクセス制御ファイルのサンプル	108
sysTopicsAdd.acl ファイル	108
エンドユーザーの権限の変更	109
Sun Java System Access Manager によるポリシー管理	109
Instant Messaging サービス属性	110
属性の直接変更	113
Instant Messaging ポリシーと Presence ポリシーの事前定義サンプル	115
新しい Instant Messaging ポリシーの作成	117
ロール、グループ、組織、ユーザーへのポリシーの割り当て	118
Access Manager による新しいサブ組織の作成	120
新しいサブ組織へのエンドユーザーの追加	122
第 7 章 Instant Messaging アーカイブの管理	123
Instant Messaging アーカイブの概要	123
インスタントメッセージのアーカイブ	126
アーカイブプロバイダの有効化	126
アーカイブプロバイダの設定	127
アーカイブプロバイダ設定パラメータ	129
デフォルト以外の Portal Server 検索データベースへのアーカイブメッセージの格納	133
Portal Server 検索データベース内のアーカイブデータの管理	134
rdmgr コマンド	135
リソース記述子の検索	135
リソース記述子の削除	135
Instant Messenger アーカイブ制御の有効化	136
アーカイブデータの表示の変更	138
アーカイブプロバイダの配備シナリオ例	139
第 8 章 Instant Messaging の障害追跡と監視	141
Instant Messenger の実行時情報の取得	141
Instant Messenger ログの取得	142
問題と解決方法	142
シングルサインオンが動作しない	142
メッセンジャクライアントが読み込まれないか、起動されない	143
接続が拒否され、タイムアウトが発生した	143

認証エラー	144
IM チャンネルの表示エラー	144
Instant Messaging のコンテンツがアーカイブされない	145
サーバー間通信の開始に失敗した	145
致命的なインストールの障害によってサーバーが不整合な状態に陥った	145
Instant Messaging と LDAP の障害追跡	146
Instant Messaging の監視	148
mfwk エージェントの管理	149
監視データの表示	150
mfwk エージェントの障害追跡	151
JConsole の障害追跡	152
ウォッチドッグプロセスの管理	152
ウォッチドッグのステータスの確認	153
ウォッチドッグの有効化と無効化	153
ウォッチドッグのロギング管理	154

第 III 部 関連情報 155

付録 A Instant Messaging の設定パラメータ	157
iim.conf ファイルの使用	157
一般的な設定パラメータ	159
ユーザーソース設定パラメータ	161
ロギング設定パラメータ	163
Instant Messaging Server 設定パラメータ	165
複数サーバー設定パラメータ	172
マルチプレクサ設定パラメータ	174
ウォッチドッグパラメータ	176
エージェントパラメータ	176

付録 B Instant Messaging imadmin ツールリファレンス	179
imadmin	179
形式	181
オプション	181
アクション	181
コンポーネント	182

付録 C Instant Messaging API	183
Instant Messaging API の概要	183
Instant Messaging サービス API	183
メッセージ Bean	184

サービスプロバイダインタフェース	185
アーカイブプロバイダ API	185
メッセージ変換 API	186
認証プロバイダ API	186
用語集	187
索引	189

はじめに

Instant Messaging によって、エンドユーザーは、リアルタイムに対話型のメッセージングおよびディスカッションに参加することができます。Sun Java System Instant Messaging を使用すると、エンドユーザーの Instant Messaging やチャットセッションへの参加、ユーザー間のアラートメッセージの送信、グループニュースの共有を、迅速に行えます。このため、この製品は、イントラネットとインターネットのどちらでの使用にも適しています。

この章には、以下の節があります。

- [対象読者](#)
- [お読みになる前に](#)
- [マニュアルの構成](#)
- [表記規則](#)
- [関連マニュアル](#)
- [Sun リソースへのオンラインアクセス](#)
- [Sun テクニカルサポートへの問い合わせ](#)
- [関連するサードパーティの Web サイトの参照](#)
- [コメントの送付先](#)

対象読者

このマニュアルは、Instant Messaging を管理、設定、および配備する役割を担っている方を対象にしています。

お読みになる前に

このマニュアルの内容は、読者が Instant Messaging の設定、管理、および保守を担当し、JavaScript™、HTML、および各自の環境に配備された次のサーバーに関して理解していることを前提にしています。

- Sun Java™ System Portal Server
- Sun Java™ System Application Server SE (Standard Edition) などの Web コンテナ
- Sun Java™ System Messaging Server などの SMTP サーバー
- Sun Java™ System Directory Server などの LDAP サーバー
- Sun Java™ System Calendar Server
- Sun Java™ System Access Manager

マニュアルの構成

このマニュアルの第 1 章では、Instant Messaging 製品全体の概要を説明します。次の表に、このマニュアルを構成する 3 部の要約を示します。

表 1 マニュアルの構成

章	説明
はじめに	(この章)
第 I 部「インストール後の設定」	
第 1 章「インストール後の Instant Messaging の設定」	Instant Messaging のインストール後またはアップグレード後、使用前に行う必要のある設定手順について説明します。
第 2 章「Instant Messenger のセットアップと起動」	クライアントシステムを設定する方法、Java™ Web Start を有効にする方法、およびローカライズ版クライアントファイルを追加する方法について説明します。また、クライアントの起動方法についても説明します。
第 II 部「Instant Messaging の管理」	
第 3 章「設定ファイルとディレクトリ構造の概要」	この章では、Instant Messaging の管理に使用する設定ファイルについて説明します。
第 4 章「Instant Messaging コンポーネントの管理」	この章では、Sun Java System Instant Messaging Server およびマルチプレクサの管理方法について説明します。

表 1 マニュアルの構成 (続き)

章	説明
第 5 章「Instant Messenger の管理」	この章では、Sun Java System Instant Messenger のカスタマイズ方法と管理方法について説明します。
第 6 章「Instant Messaging ポリシーおよび Presence ポリシーの管理」	この章では、管理者とエンドユーザーの権限の管理方法について説明します。特に、Sun Java System Access Manager 内に設定されたポリシーについて詳しく説明します。
第 7 章「Instant Messaging アーカイブの管理」	この章では、Instant Messaging アーカイブの管理方法と設定方法について説明します。
第 8 章「Instant Messaging の障害追跡と監視」	この章では、Sun Java System Instant Messaging Server のインストール中および配備中に発生する可能性の高い問題を列挙します。
第 III 部「関連情報」	
付録 A「Instant Messaging の設定パラメータ」	この付録では、Instant Messaging に関して設定可能なパラメータについて説明します。
付録 B「Instant Messaging imadmin ツールリファレンス」	この付録では、Instant Messaging を管理するための imadmin コマンドについて説明します。
付録 C「Instant Messaging API」	この付録では、Instant Messaging が使用する API について説明します。

表記規則

この節の表では、このマニュアルで使用される表記上の規則を示します。

表記上の規則

次の表では、このマニュアルで使用される書体の違いについて説明します。

表 2 表記上の規則

書体	意味	例
AaBbCc123 (モノスペース)	API や言語の要素、HTML タグ、Web サイトの URL、コマンド名、ファイル名、ディレクトリパス名、コンピュータ画面上の出力、サンプルコードを示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail

表 2 表記上の規則 (続き)

書体	意味	例
AaBbCc123 (太字のモノスペース)	コンピュータ画面での出力と区別して、ユーザーが入力する文字を示します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i> (イタリック)	コマンドやパス名の中のプレースホルダを示します。実際の名前や値で置き換えられる部分です。	これらを <i>class</i> オプションと呼びます。 ファイルは <i>install-dir/bin</i> ディレクトリに格納されています。

記号

次の表では、このマニュアルで使用される記号の規則について説明します。

表 3 記号の規則

記号	説明	例	意味
[]	省略可能なコマンドオプションを囲みます。	ls [-l]	-l オプションは必須ではありません。
{ }	必須のコマンドオプションの選択肢を囲みます。	-d {y n}	-d オプションには、引数 y または引数 n を指定する必要があります。
-	同時に押すキーを示します。	Control-A	Control キーを押しながら A キーを押します。
+	順番に押すキーを示します。	Ctrl+A+N	Control キーを押してから放し、それに続くキーを押します。
>	グラフィカルユーザーインターフェイスでのメニュー項目の選択順序を示します。	「ファイル」> 「新規」> 「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから「テンプレート」を選択します。

シェルプロンプト

次の表では、このマニュアルで使用されるシェルプロンプトについて説明します。

表 4 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
C シェル	マシン名 %
C シェルスーパーユーザー	マシン名 #
Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#
Microsoft Windows コマンド行	C:¥

関連マニュアル

<http://docs.sun.com/SM> Web サイトでは、Sun の技術マニュアルをオンラインで参照できます。アーカイブを参照したり、特定のマニュアルタイトルや題目を検索したりできます。

Java Enterprise System マニュアル

- 『Sun Java Enterprise System インストールガイド』
<http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja>
- 『Sun Java Enterprise System 2005Q1 アップグレードと移行』
<http://docs.sun.com/doc/819-2235?l=ja>
- 『Sun Java System Communications Services 配備計画ガイド』
<http://docs.sun.com/doc/819-1069?l=ja>

その他のサーバーマニュアル

その他のサーバーのマニュアルについては、次を参照してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/entsys?l=ja#hic>

このサイトでは、次の製品のマニュアルセットを参照できます。

- Sun Java System Directory Server
- Sun Java System Messaging Server
- Sun Java System Calendar Server
- Sun Java System Instant Messaging
- Sun Java System Access Manager
- Sun Java System Portal Server
- Sun Java System Web Server

Sun リソースへのオンラインアクセス

製品のダウンロード、プロフェッショナルサービス、パッチおよびサポート、その他の開発者情報については、次のサイトを参照してください。

- ダウンロードセンター
<http://jp.sun.com/download/>
- プロフェッショナルサービス
<http://jp.sun.com/service/sunps/>
- Sun エンタープライズサービス、Solaris パッチ、およびサポート
<http://sunsolve.sun.com/>
- 開発者情報
<http://developers.sun.com/prodtech/>

Sun テクニカルサポートへの問い合わせ

製品のマニュアルに回答が記載されていない技術的な質問については、<http://jp.sun.com/service/contacting> を参照してください。

関連するサードパーティの Web サイトの参照

このマニュアルではサードパーティの URL を参照し、追加の関連情報を入手できません。

Sun は、この文書に記載されたサードパーティの Web サイトの利用について責任を負いません。Sun は、かかるサイトまたはリソースを通じて入手できるコンテンツ、広告、製品などのマテリアルを保証せず、その責任を負いません。

Sun は、かかるサイトまたはリソースを通じて入手できるコンテンツ、商品、サービスなどの利用に起因する、あるいは起因したとされる損失または損害、またはその申し立てに対して責任を負いません。

コメントの送付先

Sun では、マニュアルの品質向上のために、お客様からのコメントや提案をお待ちしています。

コメントをお送りいただく際は、<http://docs.sun.com/> にアクセスして、「コメントの送信」をクリックしてください。オンラインフォームでは、マニュアルのタイトルと Part No. をご記入ください。Part No. はマニュアルのタイトルページまたは上部に記載された 7 桁または 9 桁の番号です。たとえば、このマニュアルのタイトルは『Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1 管理ガイド』で、Part No. は 819-1487 です。

コメントの送付先

インストール後の設定

第1章「インストール後の Instant Messaging の設定」

第2章「Instant Messenger のセットアップと起動」

インストール後の Instant Messaging の設定

Sun Java™ System Instant Messaging をインストール後、使用を開始する前にいくつかの設定手順を実行する必要があります。この章では、これらの初期の設定手順について次の各節で説明します。

- [設定チェックリストの確認](#)
- [UNIX システムユーザーおよびグループの作成](#)
- [インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定](#)
- [サイレント設定の実行](#)

Instant Messaging を設定する前に、『Sun Java System Communications Services 配備計画ガイド』の説明を読んで理解し、『Sun Java Enterprise System インストールガイド』に従ってインストールを実行し、設定チェックリストの内容をすべて完了して、最後にソフトウェアを設定することをお勧めします。

設定チェックリストの確認

開始前に、次に示す情報を収集してください。インストールするコンポーネントによって異なりますが、次の情報の一部またはすべてを入力するよう指示されます。

[表 1-1](#) を印刷し、該当の箇所に配備の値を記入してください。このチェックリストは、複数の Instant Messaging をインストールする場合にも再利用できます。この表にはパスワードなどの機密情報も含まれるので、安全な場所に保管することをお勧めします。

表 1-1 Instant Messaging の設定パラメータ

パラメータ	説明
インストールディレクトリ	<p><i>im_svr_base</i></p> <p>Instant Messaging がインストールされるディレクトリです。デフォルトでは、Instant Messaging は /opt ディレクトリ内の次の場所にインストールされます。</p> <p>Solaris の場合 : /opt/SUNWiim</p> <p>Linux の場合 : /opt/sun/im</p>
Instant Messaging Server の ホスト名とドメイン名	<p>Instant Messaging のインストール先のホスト名と、ホストに関連付けられるドメイン名です。たとえば、次のようになります。</p> <p>ホスト名 : instantmessaging.siroe.com</p> <p>ドメイン名 : siroe.com</p>
Instant Messaging Server の ポート番号	<p>Instant Messaging Server がマルチプレクサから受信する要求を待機するポートの番号です。</p> <p>デフォルト : 45222</p>
Instant Messaging のサーバー 間通信ポート番号	<p>Instant Messaging Server が他の Instant Messaging Server から受信する要求を待機するポートの番号です。また、マルチプレクサがインストールされていない場合、サーバーはこのポート上の Instant Messenger クライアントから受信する要求を待機します。</p> <p>デフォルト : 5269</p>
マルチプレクサのポート番号 (マルチプレクサ設定時のみ)	<p>Instant Messaging Server が Instant Messenger クライアントから受信する要求を待機するポートの番号です。</p> <p>デフォルト : 5222</p>
Instant Messaging の SSL ポート	<p>セキュリティ保護されたサーバー間通信時に使用されるポートです。</p> <p>デフォルト : 5223</p>
サーバーの無効化	<p>インストールするインスタンスをサーバーではなくマルチプレクサとして機能させる場合、このオプションを選択します。このオプションを選択した場合は、リモート Instant Messaging Server のホスト名の値を設定する必要があります。</p>

表 1-1 Instant Messaging の設定パラメータ (続き)

パラメータ	説明
リモート Instant Messaging Server のホスト名 (マルチプレクサ設定時のみ)	マルチプレクサがメッセージを配信する対象となる Instant Messaging Server のホスト名です。同じホストにマルチプレクサとサーバーをインストールする場合は、localhost を使用してください。 依存性: サーバーの無効化 パラメータを選択する必要があります。すなわち、サーバーの機能を無効にします。
既存のユーザーへの Instant Messaging サービスの割り当て (オプション)	このオプションを選択した場合、既存の Sun Java System Access Manager ユーザーに対して Instant Messaging を有効にします。 依存性: Sun Java System Portal Server および Sun Java System Access Manager。
Instant Messaging アーカイブを有効 (オプション)	このオプションを選択した場合、Instant Messaging に対して Sun Java System Portal Server の検索元となるアーカイブを有効にします。 依存性: Sun Java System Portal Server および Sun Java System Access Manager。
LDAP ホスト名	LDAP サーバーを同時に配備した場合の、Instant Messaging のユーザーとグループの情報を持つ LDAP サーバーのホスト名です。たとえば、directory.siroe.com などです。 依存性: Sun Java System Directory Server などの LDAP サーバー。
LDAP ポート番号	LDAP サーバーを同時に配備した場合の、ディレクトリサーバーが受信する要求を待機するポートの番号です。たとえば、389 などです。 依存性: Sun Java System Directory Server などの LDAP サーバー。
ベース DN	LDAP サーバーを同時に配備した場合の、Instant Messaging のユーザーとグループの情報が格納されているディレクトリツリー内のベース識別名です。たとえば、o=airius.com などです。 依存性: Sun Java System Directory Server などの LDAP サーバー。

表 1-1 Instant Messaging の設定パラメータ (続き)

パラメータ	説明
バインド DN	<p>Sun Java™ System Access Manager を同時に配備した場合、インストール時に Directory Manager のバインド DN とパスワードを使用する必要があります。バインド DN は、ディレクトリスキーマを Instant Messaging、Presence サービステンプレート、および属性のみで更新するために使用されます。これには、Directory Manager のアクセスが必要です。Directory Manager のバインド DN およびパスワードが、インストールと初期設定の後で保存または使用されることはありません。</p> <p>LDAP サーバーを同時に配備した場合のサーバー設定時に、Instant Messaging はこのバインド DN を使用してディレクトリ内でユーザーとグループを検索します。ディレクトリを匿名で検索できる場合は、空欄にしてください。</p> <p>依存性 : Sun Java System Directory Server などの LDAP サーバー。</p>
バインドパスワード	<p>LDAP サーバーを同時に配備した場合の、バインド DN パスワードです。</p>
SMTP サーバーのホスト名 (オプション)	<p>オフラインユーザーに電子メールメッセージの通知を送信する SMTP サーバーのホスト名です。たとえば、mail.siroe.com などです。SMTP サーバーがポート 25 以外を使用している場合は、ホスト名とポート番号を指定してください。たとえば、SMTP サーバーがポート 1025 を使用している場合は次のように指定します。</p> <p>mail.siroe.com:1025</p> <p>依存性 : Sun Java System Messaging Server などの SMTP サーバー。</p>
データベース、ログ、および 実行時ファイルのパス名	<p>実行ファイル、データベース、およびログが格納されている場所です。im_runtime_base としても参照されます。</p> <p>デフォルト :</p> <p>Solaris の場合 : /var/opt/SUNWiim/default</p> <p>Linux の場合 : /var/opt/sun/im/</p> <p>また、データベースディレクトリは im_db_base として参照されることもあります。デフォルトは次のとおりです。</p> <p>Solaris の場合 : /var/opt/SUNWiim/default/db</p> <p>Linux の場合 : /var/opt/sun/im/db/</p>

表 1-1 Instant Messaging の設定パラメータ (続き)

パラメータ	説明
リソースおよびヘルプファイルのパス名	<p data-bbox="725 270 1043 296">リソースのディレクトリです。</p> <p data-bbox="725 317 1322 373">リソースとオンラインヘルプファイルがインストールされるディレクトリです。</p> <p data-bbox="725 394 1322 626">リソースファイルの配備をカスタマイズする場合は、<code>configure</code> ユーティリティを実行してファイルのカスタマイズをしてから、再度リソースファイルを配備してください。<code>configure</code> ユーティリティによって、インデックスの一部とカスタマイズできる <code>.jnlp</code> ファイルが作成されるので、最初に <code>configure</code> を実行する必要があります。詳細については、99 ページの「リソースファイルの再配備」を参照してください。</p> <p data-bbox="725 647 1053 673">デフォルト : <code>im_svr_base/html</code></p>

表 1-1 Instant Messaging の設定パラメータ (続き)

パラメータ	説明
コードベース	<p>Instant Messenger がリソースにアクセスするための URL です。Instant Messaging クライアントの初期ダウンロードの開始ページも含まれます。</p> <p>インストールプログラムによって、リソースファイルは次の場所にインストールされます。</p> <p>Linux の場合 : /opt/sun/im/html Solaris の場合 : /opt/SUNWiim/html</p> <p>configure ユーティリティはコードベースを使用して、どの Web コンテナインスタンスを使うかを決定します。Web コンテナが決定した場合、configure ユーティリティは指定された URL に基づいて、Web コンテナ内の Web アプリケーションとして Instant Messenger リソースを配備します。サポートされる Web コンテナが検出されなかった場合、リソースをコピーまたはリンクするファイルシステムの場所を入力するように要求があります。</p> <p>Instant Messaging を Sun Java™ System Application Server または Sun Java™ System Web Server と同時使用している場合、configure ユーティリティは Web コンテナにリソースファイルを自動的に公開します。Sun Java System Application Server では、configure ユーティリティは自動配備機構を使用します。Sun Java System Web Server では、configure ユーティリティは wdeploy コマンドを使用します。</p> <p>異なる Web コンテナを使用している場合、configure ユーティリティは指定された場所にファイルをコピーします。この場所に Web コンテナのドキュメントルートが含まれることをお勧めします。その代わりに、Web コンテナの設定でリソースファイルのインストールディレクトリをドキュメントルートとして追加することもできます。その方法の詳細については、Web コンテナのマニュアルを参照してください。</p> <p>また、シンボリックリンクを使用して、Web コンテナがリソースを認識できるようにすることも可能です。たとえば Solaris では、次のようなシンボリックリンクを作成すると、Web コンテナはリソースを認識できます。</p> <pre>ln -s /opt/SUNWiim/html docroot/im</pre> <p>docroot は Web コンテナのドキュメントルートで、/opt/web などです。</p> <p>SSO と Sun Java™ System Access Manager を使用している場合、Access Manager Server と Instant Messaging Server が同じ Web コンテナを使用するように設定する必要があります。</p> <p>リソースファイルを Web アプリケーションとして配備する方法については、Web コンテナのマニュアルを参照してください。初期設定の後にリソースファイルの場所を変更する必要がある場合は、74 ページの「コードベースの変更」を参照してください。</p>

UNIX システムユーザーおよびグループの作成

システムユーザーが特定のサーバプロセスを実行します。これらのユーザーがプロセスを実行するための適切なアクセス権を持っていることを保証するために、ユーザーに特定の権限を指定する必要があります。通常、`configure` ユーティリティによって、次のユーザーとグループが作成されます。

- ユーザー: `inetuser`
- グループ: `inetgroup`

`config` ユーティリティによって **Instant Messaging** の UNIX ユーザーとグループが作成されない場合、この節の説明に従ってそれらを手動で作成する必要があります。**Instant Messaging** のユーザーとグループを作成したら、そのユーザーが所有するディレクトリとファイルに適切な権限を設定してください。

Instant Messaging を **Access Manager** と同時に配備している場合を除き、サーバユーザー ID として `root` を選ばないでください。この場合、`root` を使用して **Access Manager** 設定へのアクセスを許可する必要があります。

適切なユーザーとグループを作成するには、次の手順に従ってください。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. システムユーザーを所属させるグループを作成します。たとえば、**Solaris** で `imgroup` という名前のグループを作成するには、次のように入力します。

```
# groupadd imgroup
```
3. システムユーザーを作成し、前の手順で作成したグループに関連付けます。さらに、このユーザーのパスワードを設定します。たとえば、**Solaris** で `imuser` という名前のユーザーを作成し、`imgroup` というグループに関連付けるには、次のように入力します。

```
# useradd -g imgroup imuser
```

ユーザーとグループの追加の詳細については、オペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。
4. ユーザーとグループが `/etc/groups` ファイルに追加されていることを確認します。

インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定

Instant Messaging コンポーネントは、Instant Messaging インストーラでは設定されません。そのため、ソフトウェアのインストール後に `configure` ユーティリティを実行する必要があります。

リソースファイルの配備をカスタマイズする場合は、`configure` ユーティリティを実行してファイルのカスタマイズをしてから、再度リソースファイルを配備してください。 `configure` ユーティリティによって、インデックスの一部とカスタマイズできる `.jnlp` ファイルが作成されるので、最初に `configure` を実行する必要があります。詳細については、[99 ページの「リソースファイルの再配備」](#)を参照してください。また、設定後のファイルの格納場所については、[23 ページの「リソースおよびヘルプファイルのパス名」](#)を参照してください。

BEA Web コンテナを使用している場合、Instant Messaging を設定する前に `PASSFILE` を作成する必要があります。BEA Web コンテナを使用していない場合は、「[インストール後に Instant Messaging を設定する](#)」に進んでください。

▶ BEA Web コンテナの `PASSFILE` を作成する

1. インストールディレクトリ `/SUNwiim/lib/PASSFILE` という名前のファイルを作成します。
2. 作成したファイルに次の行を追加します。

```
DS_DIRMGR_DN=Directory Manager のバインド DN
DS_DIRMGR_PASSWORD=Directory Manager のバインドパスワード
DS_HOST=LDAP ホスト名
DS_PORT=LDAP ポート番号
DS_BASE_DN= ベース DN
```

3. 各変数の値を入力します。

▶ インストール後に Instant Messaging を設定する

1. Instant Messaging のインストール先ディレクトリに移動します。
デフォルトでは、Solaris のインストール先ディレクトリは `/opt/SUNwiim`、Linux のインストール先ディレクトリは `/opt/sun/im` です。
2. `configure` ユーティリティを、次のいずれかの方法で実行します。

グラフィカルユーザーインターフェース：`configure`

コマンド行：`configure -nodisplay`

状態ファイル：`configure -nodisplay -noconsole -state <statefile>`

<statefile> は、使用する状態ファイルへのパスです。状態ファイルを使用した設定時には、設定情報の入力には要求されません。その代わりに、状態ファイル内の値を使用してソフトウェアが設定されます。状態ファイルの生成方法については、[28 ページの「サイレント設定の実行」](#)を参照してください。

グラフィカルユーザーインターフェイスまたはコマンド行を使用した設定時には、Instant Messaging の初期設定をセットアップするための一連の情報を入力するよう要求されます。入力の要求は、インストールしたコンポーネントによって異なります。Instant Messaging チェックリストの値を使用して、要求された情報を入力してください。詳細については、[19 ページの「設定チェックリストの確認」](#)を参照してください。

3. Sun Java System Access Manager を Instant Messaging Server とは別のホストにインストールする場合は、configure ユーティリティの実行後に imServices ファイルを Instant Messaging Server のホストから Access Manager のホストへコピーする必要があります。次の手順に従ってください。
 - a. imService_*.properties ファイルの場所を Instant Messaging Server のホスト上で探します。

デフォルトでは、これらのファイルは Solaris では /opt/SUNWiim/lib/、Linux では /opt/sun/im/lib/ に格納されています。
 - b. ファイルを Sun Java System Access Manager ホスト上の locale ディレクトリにコピーします。

デフォルトでは、このディレクトリは Solaris では /opt/SUNWam/locale、Linux では /opt/sun/identity/locale です。
4. 設定ユーティリティの実行後、Instant Messaging をサポートするように Web コンテナとクライアントシステムを設定する必要があります。詳細については、[第 2 章「Instant Messenger のセットアップと起動」](#)を参照してください。

サイレント設定の実行

サイレント設定を実行するには、最初に仮の設定を完了させて、状態ファイルを作成します。この `configure` セッションの間、`configure` ユーティリティへの応答が状態ファイルに記録されますが、ソフトウェアは変更されません。状態ファイルには、応答がパラメータリストとして保持されます。各パラメータはそれぞれの確認事項を表します。次に、プラットフォームに対応した状態ファイル ID を作成し、この ID を含むように状態ファイルの内容を変更します。

これで、多くのホストで状態ファイルを入力として使用して、`configure` ユーティリティを実行できるようになります。この手順によって、企業の複数のホストに同一の設定を迅速に移植できます。状態ファイルを使用して `Instant Messaging` の新しいインスタンスを設定する方法については、[26 ページの「インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定」](#) を参照してください。

▶ Instant Messaging の設定用状態ファイルとその ID を生成する

1. スーパーユーザーとしてログインします。

2. `Instant Messaging` のインストール先ディレクトリに移動します。

デフォルトでは、Solaris のインストール先ディレクトリは `/opt/SUNWiim`、Linux のインストール先ディレクトリは `/opt/sun/im` です。

3. コマンド行で次のように入力して、`configure` ユーティリティを実行します。

```
configure [-nodisplay] -saveState <statefile>
```

<statefile> は、状態ファイルに付ける名前です。

状態ファイルを別の `Instant Messaging` の設定に使用するには、次のコマンドを使用します。

```
configure -nodisplay -noconsole -state <statefile>
```

`configure` ユーティリティの継続中に入力した回答は状態ファイルに記録されません。設定が完了すると、状態ファイルは指定した場所に作成されます。

4. 再度 `configure` ユーティリティを実行して、プラットフォームに対応した状態ファイル ID を生成します。ただし、今回は次のように `-id` オプションを指定します。

```
configure -id
```

このコマンドによって、暗号化された識別子が生成されます。

5. 識別子をコピーし、状態ファイルの `STATE_BEGIN` パラメータと `STATE_DONE` パラメータの値としてペーストします。

状態ファイルを使用して別の `Instant Messaging` のインストールを設定する方法については、[26 ページの「インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定」](#) を参照してください。

Instant Messenger のセットアップと起動

この章では、Web コンテナとクライアントシステムで Instant Messenger をサポートするための設定について次の各節で説明します。

- [Java™ Web Start の有効化](#)
- [クライアントシステムの設定](#)
- [Instant Messenger の起動](#)

Java™ Web Start の有効化

Instant Messenger と Java Web Start を同時に使用するには、ソフトウェアのインストール後に、Web コンテナが Java Web Start と連携して動作するように設定する必要があります。Java Web Start のインストール方法については、次のサイトを参照してください。

http://java.sun.com/products/javawebstart/ja/index_ja.html

Web コンテナで Java Web Start のサポートを有効にするには、Web コンテナの mime.types ファイルを編集して、JNLP に関する次の定義を挿入します。

Content Type: application/x-java-jnlp-file

Suffix: jnlp

Sun Java System Web Server Enterprise Edition の設定

▶ Sun Java System Web Server に MIME タイプを追加する

1. 次の URL をブラウザに入力して、管理サーバーにアクセスします。

`http://hostname.domain-name:administration_port`

たとえば、次のように入力します。 `http://budgie.siroe.com:8888`

Sun Java System Web Server によって、ユーザー名とパスワードの入力を要求するウィンドウが表示されます。

2. Web Server のインストール時に指定した管理ユーザー名とパスワードを入力します。

Web コンテナによって「Administration Server」ページが表示されます。

3. 「Manage Servers」ページで「Manage」をクリックします。

Web コンテナによって「Server Manager」ページが表示されます。

4. 「MIME Types」リンクをクリックします。

5. 「MIME File」ドロップダウンリストから、編集する MIME タイプを選択し、「OK」をクリックします。

6. 「Global MIME Types」ページの「Category」ドロップダウンリストから「type」を選択します。

7. 「Content-Type」テキストボックスで、次のように入力します。

`application/x-java-jnlp-file`

8. 「File Suffix」テキストボックスで、次のように入力します。

`jnlp`

9. 「New Type」をクリックして、MIME タイプを作成します。

10. Web コンテナを再起動して、変更を有効にします。

Apache Web コンテナの設定

▶ Apache Web コンテナに MIME タイプを追加する

- `mime.types` ファイルに次の行を追加します。

`application/x-java-jnlp-file jnlp`

デフォルトでは、このファイルは Apache Web コンテナの設定ディレクトリに格納されています。

クライアントシステムの設定

クライアントマシンに適切なバージョンの Java がインストールされている場合は、Java プラグインまたは Java Web Start を使用するための追加要件はありません。Netscape Navigator v7 と最新バージョンの Mozilla ブラウザには最新バージョンの Java が含まれますが、Internet Explorer には含まれません。バージョン要件については、Sun Java System Instant Messaging リリースノートを参照してください。

クライアントマシンに必要なバージョンの Java がインストールされていない場合は、Java Web Start をインストールする必要があります。次のサイトから Java をダウンロードし、インストールすることができます。

<http://www.java.sun.com/j2se>

次のサイトから Java Web Start をダウンロードし、インストールすることができます。

http://www.java.sun.com/products/javawebstart/ja/index_ja.html

Instant Messenger の起動

次の各節で説明するように、Instant Messenger を Web ブラウザのアプレットとしても、スタンドアロンアプリケーションとしても実行できます。

- [Web ブラウザからの Instant Messenger の実行](#)
- [スタンドアロンアプリケーションとしての Instant Messenger の実行](#)

Web ブラウザからの Instant Messenger の実行

▶ Web ブラウザのアプレットとして Instant Messenger を実行する

1. Web ブラウザを起動します。

サポートされているブラウザについては、Sun Java System Instant Messaging リリースノートを参照してください。

2. Instant Messaging のホームページを表示します。デフォルトでは、ホームページは index.html として格納されています。Instant Messaging のホームページを探すには、次の書式を使用してください。

`http://codebase/index.html`

`codebase` は Web コンテナ上のリソースファイルの場所に対応する URL です。

3. 「Java プラグインを利用する」をクリックします。

ホームページをカスタマイズし、リンクテキストを変更した場合は、ブラウザの アプレットとして **Instant Messenger** を実行するためのリンクをクリックします。リンク先は `im.jnlp` (標準) または `imssl.jnlp` (セキュリティ保護モード) です。

Java プラグインを使用して **Instant Messenger** セッションが確立されている場合、ブラウザウィンドウはこのセッションに専用であることが必要です。

このブラウザウィンドウで別の URL を指定することも、**Instant Messenger** セッションを終了せずにブラウザウィンドウを閉じることもできません。

スタンドアロンアプリケーションとしての Instant Messenger の実行

- ▶ スタンドアロンアプリケーションとして **Instant Messenger** を実行する

1. Web ブラウザを起動します。

サポートされているブラウザについては、Sun Java System Instant Messaging リリースノートを参照してください。

2. **Instant Messaging** のホームページを表示します。デフォルトでは、ホームページは `index.html` として格納されています。**Instant Messaging** のホームページを探すには、次の書式を使用してください。

`http://codebase/index.html`

`codebase` は Web コンテナ上のリソースファイルの場所に対応する URL です。

3. 「起動」をクリックします。

ホームページをカスタマイズし、リンクテキストを変更した場合は、Java™ Web Start を使用して **Instant Messenger** を実行するためのリンクをクリックします。リンク先は `im.html` (標準) または `imssl.html` (セキュリティ保護モード) です。

リソースページのカスタマイズについては、75 ページの「[Instant Messenger のカスタマイズ](#)」を参照してください。

Instant Messaging の管理

第 3 章 「設定ファイルとディレクトリ構造の概要」

第 4 章 「Instant Messaging コンポーネントの管理」

第 5 章 「Instant Messenger の管理」

第 6 章 「Instant Messaging ポリシーおよび Presence ポリシー
の管理」

第 7 章 「Instant Messaging アーカイブの管理」

第 8 章 「Instant Messaging の障害追跡と監視」

設定ファイルとディレクトリ構造の概要

この章では、Instant Messaging の管理に使用する設定ファイルについて説明します。配備の設定を変更する前に、各ファイルの場所を把握しておいてください。

この節では、Instant Messaging Server のディレクトリ構造と、Instant Messaging の処理データと設定情報を格納するためのプロパティファイルについて説明します。

Instant Messaging Server のディレクトリ構造

表 3-1 は、Instant Messaging Server のプラットフォーム別のディレクトリ構造を示したものです。

表 3-1 Instant Messaging Server のディレクトリ

説明	Solaris での場所	Linux での場所
プログラムファイル これらのファイルには、ネイティブの実行可能ファイルとライブラリファイル (bin ディレクトリ内または lib ディレクトリ内)、シェルスクリプト (sbin ディレクトリ内)、Java クラス、テンプレートファイル (lib ディレクトリ内) が含まれます。	Instant Messaging インストールディレクトリ (<i>im_svr_base</i>) インストールディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。 <code>/opt/SUNWiim</code>	Instant Messaging インストールディレクトリ (<i>im_svr_base</i>) インストールディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。 <code>/opt/sun/im</code>

表 3-1 Instant Messaging Server のディレクトリ (続き)

説明	Solaris での場所	Linux での場所
<p>サーバー設定ファイル</p> <p>これらのファイルは設定ディレクトリ内に格納されます。 im.conf ファイルも含まれます。サブディレクトリには、サーバー全体に対するアクセス制御ファイルがすべて格納されます。</p>	<p>Instant Messaging 設定ディレクトリ (<i>im_cfg_base</i>)</p> <p>設定ディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/etc/opt/SUNWiim/default/config</p> <p>便宜上、インストーラは /etc/opt/SUNWiim/default/config から /opt/SUNWiim/config へのシンボリックリンクを作成します。</p>	<p>Instant Messaging 設定ディレクトリ (<i>im_cfg_base</i>)</p> <p>設定ディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/etc/opt/sun/im/default/config</p> <p>便宜上、インストーラは /etc/opt/sun/im/default/config から /opt/sun/im/config へのシンボリックリンクを作成します。</p>
<p>実行時ディレクトリ</p> <p>Instant Messaging Server のデータを含みます。これらのファイルには、サーバーが実行時に生成するファイルを格納するための設定可能なディレクトリが含まれません。データベースディレクトリ内のエンドユーザーデータも含まれます。また、log ディレクトリ内のサーバー、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、および XMPP サービスのログファイルも含まれます。</p>	<p>Instant Messaging 実行時ディレクトリ (<i>im_runtime_base</i>)</p> <p>実行時ディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/var/opt/SUNWiim/default</p>	<p>Instant Messaging 実行時ディレクトリ (<i>im_runtime_base</i>)</p> <p>実行時ディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/var/opt/sun/im</p>
<p>データベース</p> <p>ユーザーディレクトリおよびニュースチャンネルのディレクトリなどの、エンドユーザー情報を含みます。</p>	<p>Instant Messaging データベースディレクトリ (<i>im_db_base</i>)</p> <p>データベースディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/var/opt/SUNWiim/default/db</p>	<p>Instant Messaging データベースディレクトリ (<i>im_db_base</i>)</p> <p>データベースディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/var/opt/sun/im/db</p>
<p>Instant Messenger リソース</p> <p>これらのファイルには、Instant Messenger が使用する HTML 文書や jar ファイルなどがあります。最上位のディレクトリにはロケールに依存しないリソースが、ロケール固有のディレクトリにはローカライズされたリソースが、それぞれ格納されます。</p>	<p>Instant Messaging リソースディレクトリ (<i>im_svr_base/html</i>)</p> <p>リソースディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/opt/SUNWiim/html</p>	<p>Instant Messaging リソースディレクトリ (<i>im_svr_base/html</i>)</p> <p>リソースディレクトリのデフォルト値は次のとおりです。</p> <p>/opt/sun/im/html</p>

Instant Messaging サーバーの設定ファイル

Instant Messaging は、すべての設定オプションを `iim.conf` ファイル内に格納します。このファイルに格納されるパラメータと値の詳細については、[157 ページの「Instant Messaging の設定パラメータ」](#)を参照してください。

Instant Messaging のデータ

Instant Messaging Server は、Instant Messenger が使用する以下のデータをデータベースディレクトリ (`im_db_base`) に格納します。このディレクトリ名は、`iim.conf` ファイル内の `iim.instancevardir` パラメータに設定されています。

- 連絡先一覧、Instant Messenger の設定、登録しているニュースチャンネル、アクセス制御などのエンドユーザーのプロパティ (これらのプロパティは、LDAP に格納することも可能)。
- ニュースチャンネルのメッセージとアクセス規則。
- 配信すべきアラートメッセージ。これらのメッセージは、受信者がログインした際に配信および削除される。
- 公開会議室。これには、持続的でないインスタントメッセージは含まれない。含まれるのは、アクセス規則など、会議室オブジェクト自体のプロパティのみ。

Instant Messaging コンポーネントの管理

この章では、Instant Messaging コンポーネント (サーバー、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグ) の管理方法について説明するとともに、設定パラメータの変更やロギングの管理など、その他の管理作業の実施方法について説明します。

この章には、次の節があります。各節では、Instant Messaging のさまざまな管理作業について説明します。

- [エンドユーザーの管理](#)
- [新規ユーザーの登録](#)
- [Instant Messaging コンポーネントの停止、起動、更新](#)
- [Instant Messaging Server およびマルチプレクサの設定パラメータの変更](#)
- [ロギングの管理](#)
- [複数の Instant Messaging Server の連携配備](#)
- [Instant Messaging における SSL の使用](#)
- [Instant Messaging の LDAP アクセス設定の管理](#)
- [Instant Messaging データのバックアップ](#)

エンドユーザーの管理

前の節では Instant Messaging にどのような管理作業があるか記述しましたが、本章の残りの節では、これらの各管理作業について詳しく説明していきます。エンドユーザーをプロビジョニングおよび管理する方法 (後述) に注意してください。

Instant Messaging には、ユーザーの一括プロビジョニングツールは含まれていません。複数の Instant Messaging エンドユーザーのプロビジョニングには、ディレクトリの一括プロビジョニングツールを使用する必要があります。デフォルトでは、Instant Messaging に Instant Messaging エンドユーザーの追加、変更、削除を行うためのコマンドは用意されていません。ただし、ユーザーが自分自身をディレクトリに追加できるように Instant Messenger をカスタマイズすることができます。詳細は、[41 ページ](#)の「[新規ユーザーの登録](#)」を参照してください。

さらに、LDAP 単独配備では、エンドユーザーが Instant Messenger を使用することを防ぐことはできません。LDAP 単独配備でエンドユーザーによる Instant Messaging の使用を防ぐには、それらのエンドユーザーをディレクトリから削除するしか方法がありません。Sun Java System Access Manager のポリシー属性を使用した配備では、エンドユーザーが Instant Messenger にアクセスすることを防ぐことができます。Instant Messaging を Access Manager とともに配備している場合は、ユーザー自身に登録を許可するのではなく、Access Manager が提供するプロビジョニングツールを使用することをお勧めします。

管理者は、Instant Messaging の管理アクセス制御メカニズムを使って Instant Messaging エンドユーザーを管理できます。Instant Messaging の管理アクセス制御の詳細については、[101 ページ](#)の「[プライバシー、セキュリティ、およびサイトポリシーの概要](#)」を参照してください。Sun Java System Access Manager を使用している場合、Instant Messaging エンドユーザーのプロビジョニングには Access Manager が使用されます。詳細については、『[Sun Java System Communications Services 配備計画ガイド](#)』を参照してください。

警告

管理者が `sysWatch.acl` ファイルを編集して、エンドユーザーが他のエンドユーザーに対するウォッチをセットアップする権限を無効にすると、該当のエンドユーザーには Instant Messenger のメインウィンドウが表示されなくなります。これにより、それらのエンドユーザーは事実上、インスタントメッセージを送信できなくなります。ただし、アラートとニュースチャンネルの閲覧は、以前と同様に行えます。

新規ユーザーの登録

Instant Messenger をカスタマイズして、新規ユーザーの登録を許可できます。ユーザーが登録すると、Instant Messaging Server は登録時に指定された情報を使用して `ldapadd` 処理を実行し、ディレクトリにユーザーエントリを作成します。

注 Instant Messaging と Sun Java System Access Manager を同時に使用している場合は、この方法でユーザーを登録することはできません。Access Manager が提供するプロビジョニングツールを使用してください。

新規ユーザーの登録を許可するには、`im.jnlp.template` ファイルと `im.html.template` ファイルに引数を追加してから `configure` ユーティリティを実行し、必要に応じてリソースファイルを再配備する必要があります。

この節では、次の各項目について説明します。

- [Instant Messenger で新規ユーザーの登録を許可するためのカスタマイズ](#)
- [新規ユーザーの登録](#)

リソースファイルのカスタマイズについては、[第 5 章「Instant Messenger の管理」](#)を参照してください。

Instant Messenger で新規ユーザーの登録を許可するためのカスタマイズ

新規ユーザーの登録を許可するようにリソースファイルをカスタマイズしている場合は、「ログイン」ダイアログボックスに新しいボタンが表示されます。ユーザーはこのボタンをクリックして、新規ユーザーを登録するための「新規ユーザーの登録」ダイアログボックスを表示します。ユーザーが登録されると、ユーザー情報が LDAP ディレクトリに追加されます。

▶ 新規ユーザーの登録を許可するように Instant Messenger をカスタマイズする

1. テキストエディタで `im.jnlp.template` ファイルを開きます。

デフォルトでは、このファイルは `im_svr_base/html` に格納されています。

2. 次の行を探します。

```
<application-desc main-class="com.iplanet.im.client.iIM">
```

3. セクションの末尾に次の引数を追加します。

```
<argument>register=true</argument>
```

4. `im.jnlp.template` ファイルを保存して閉じます。
5. 手順 1 から 4 までを `im.html.template` について繰り返します。
6. `configure` ユーティリティを実行し、設定するコンポーネントを指定するように要求があった場合のみ「Messenger リソース」コンポーネントを選択します。その方法については、26 ページの「インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定」を参照してください。
7. Sun Java System Access Manager または Sun Java System Web Server を使用している場合は、99 ページの「リソースファイルの再配備」の説明に従ってリソースファイルを再配備します。
8. Instant Messenger を起動します。
「私は新規ユーザーです」ボタンが「ログイン」ダイアログボックスに表示されません。

新規ユーザーの登録

`im.jnlp` ファイルと `im.html` ファイルに新規ユーザーを登録するための引数を追加し、リソースファイルを再配備すると、ユーザーは自分自身を登録できるようになります。

▶ 新規ユーザーとして登録する

1. Web ブラウザで Instant Messaging ホームページを表示します。
2. 「起動」または「Java プラグインを利用する」をクリックします。
「ログイン」ダイアログボックスが開きます。このとき「私は新規ユーザーです」ボタンが表示されています。
3. 「私は新規ユーザーです」をクリックします。
「新規ユーザーの登録」ダイアログボックスが開きます。
4. 各フィールドに情報を入力し、「了解」をクリックします。
情報がディレクトリに格納されます。

Instant Messaging コンポーネントの停止、起動、更新

`imadmin` コマンドを使用すると、次のことを行うことができます。

- すべての Instant Messaging コンポーネント (サーバー、マルチプレクサ、ウォッチドッグ、およびカレンダーエージェント) を起動および停止する。
- Instant Messaging コンポーネントを個別に起動および停止する。
- すべての Instant Messaging コンポーネントの設定を更新する。
- Instant Messaging コンポーネントを個別に更新する。
- Instant Messaging コンポーネントのステータスを確認する。

`imadmin` コマンド行ユーティリティを実行できるのは、`root` または Instant Messaging Server およびマルチプレクサが実行されているシステムに対する管理者権限を持つユーザーのみです。このエンドユーザーは通常、サーバーの実行 ID であり、サーバーのインストール時に次のように指定されます。

- Solaris の場合 : `inetuser`
- Sun Java System Access Manager とともに配備されている場合 : Sun Java System Portal Server と Instant Messaging Server が同一ホスト上にインストールされている場合、`root` として Access Manager を実行しているユーザー。

`imadmin` コマンド行ユーティリティは、次のディレクトリ内に格納されています。

```
im_svr_base/sbin
```

Instant Messaging Server を起動すると、Instant Messenger がサーバーに接続できるようになります。Instant Messaging Server を停止すると、すべての接続が閉じられ、すべての Instant Messenger クライアントとの接続が切断されます。

Instant Messaging コンポーネントを起動する

すべてのコンポーネントを同時に起動することも、各コンポーネントを個別に起動することもできます。

`imadmin` コマンドを実行して、Instant Messaging Server、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグを起動します。各コンポーネントは、それぞれが有効であるかどうかに基づいて起動されます。

▶ すべてのコンポーネントを起動する

- 次の `imadmin` コマンドを使用して、すべてのコンポーネントを起動します。

```
imadmin start
```

サーバーとマルチプレクサの両方が有効になっていた場合、このコマンドによって、まず Instant Messaging Server が起動され、続いてマルチプレクサが起動されます。

ウォッチドッグが有効な場合 (デフォルト)、このコマンドによってウォッチドッグが起動され、ウォッチドッグが設定ファイルを読み取り、必要に応じて Instant Messaging Server またはマルチプレクサ、あるいはその両方を起動します。

▶ コンポーネントを個別に起動する

- 次のようにコンポーネントを示す引数を指定した `imadmin` コマンドを使用します。

サーバー: `imadmin start server`

マルチプレクサ: `imadmin start multiplexor`

カレンダーエージェント: `imadmin start agent-calendar`

ウォッチドッグ: `imadmin start watchdog`

Instant Messaging コンポーネントを停止する

すべてのコンポーネントを同時に停止することも、各コンポーネントを個別に停止することもできます。

`imadmin` コマンドを実行して、Instant Messaging Server、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグを停止します。各コンポーネントは、それぞれが有効であるかどうかに基づいて停止されます。

▶ すべてのコンポーネントを停止する

- 次の `imadmin` コマンドを使用して、すべてのコンポーネントを停止します。

`imadmin stop`

ウォッチドッグが実行されている場合、`imadmin` ユーティリティは最初にウォッチドッグを停止し、次にサーバーまたはマルチプレクサ、あるいはその両方を停止します。

このコマンドを実行すると、サーバー、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグが停止し、全エンドユーザーの接続が終了し、設定されているすべての送受信サーバーへの接続が切断されます。

▶ 単一のコンポーネントを停止する

- 次のようにコンポーネントを示す引数を指定した `imadmin` コマンドを使用します。

サーバー: `imadmin stop server`

マルチプレクサ: `imadmin stop multiplexor`

```
カレンダーエージェント:imadmin stop agent-calendar
```

```
ウォッチドッグ:imadmin stop watchdog
```

コンポーネントの設定を更新する

refresh パラメータを指定した imadmin コマンドを使用して、個々の Instant Messaging コンポーネントを停止および再起動し、コンポーネントの設定を更新します。

すべてのコンポーネントを同時に更新することも、各コンポーネントを個別に更新することもできます。

im.conf ファイル内の設定パラメータを変更した場合は必ず、設定を更新してください。

▶ すべてのコンポーネントを更新する

- 次の imadmin コマンドを使用して、すべてのコンポーネントを更新します。

```
imadmin refresh
```

このコマンドを実行すると、サーバー、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグが停止し、全エンドユーザーの接続が終了し、設定されているすべての送受信サーバーへの接続が切断されます。

ウォッチドッグが実行されている場合、imadmin ユーティリティは最初にウォッチドッグを停止し、次にサーバーまたはマルチプレクサ、あるいはその両方を停止します。次にウォッチドッグが起動され、ウォッチドッグが設定ファイルを読み取り、必要に応じて Instant Messaging Server またはマルチプレクサ、あるいはその両方を起動します。

▶ 単一のコンポーネントを更新する

- 次のようにコンポーネントを示す引数を指定した imadmin コマンドを使用します。

```
サーバー:imadmin refresh server
```

```
マルチプレクサ:imadmin refresh multiplexor
```

```
カレンダーエージェント:imadmin refresh agent-calendar
```

```
ウォッチドッグ:imadmin refresh watchdog
```

Instant Messaging コンポーネントのステータスを確認する

imadmin コマンドを使用して、すべてのコンポーネントのステータスを同時に確認することも、各コンポーネントのステータスを個別に確認することもできます。

▶ すべてのコンポーネントのステータスを確認する

- 次の imadmin コマンドを使用して、ステータスを確認します。

```
imadmin check
```

このコマンドによって、すべての有効なコンポーネントのステータスが返されます。

▶ 単一のコンポーネントのステータスを確認する

- 次のようにコンポーネントを示す引数を指定した imadmin コマンドを使用します。

```
サーバー: imadmin check server
```

```
マルチプレクサ: imadmin check multiplexor
```

```
カレンダーエージェント: imadmin checkagent-calendar
```

```
ウォッチドッグ: imadmin check watchdog
```

Instant Messaging Server およびマルチプレクサの設定パラメータの変更

Instant Messaging の設定パラメータは、iim.conf ファイルに格納されます。設定パラメータの一覧については、「[Instant Messaging の設定パラメータ](#)」を参照してください。

設定パラメータを変更するには、iim.conf ファイル内の設定パラメータとその値を手動で編集したあと、Instant Messaging Server の設定を更新します。マルチプレクサのパラメータのみを変更した場合は、次の imadmin コマンドを使ってマルチプレクサを更新するだけでかまいません。

```
imadmin refresh multiplexor
```

設定パラメータとその値の一覧については、[157 ページの「Instant Messaging の設定パラメータ」](#)を参照してください。

▶ 設定パラメータを変更する

1. `config` ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

2. `iim.conf` ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

3. 変更内容を保存します。
4. 設定を更新します。

警告

マルチプレクサの待機ポート (`iim_mux.listenport`)、マルチプレクサのホストのいずれかを変更した場合、`im.html` ファイルまたは `im.jnlp` ファイルをそれに応じて変更してください。そうしないと、Instant Messenger がサーバーに接続できなくなります。詳細については、「[Instant Messenger の管理](#)」を参照してください。

ロギングの管理

Instant Messaging は、イベント、各種ソフトウェアコンポーネントの関連ステータス、システムエラーなど、サーバー、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグに関する情報を記録するためのログファイルを生成します。ログファイルを調査することで、サーバーの処理状況を多角的に監視できます。また、Instant Messenger に関するロギングデータをオンデマンドで収集することもできます。この節では、ロギングに関する次の事項について説明します。

- [ロギングの概要](#)
- [ロギングレベル](#)
- [クライアントのロギングの管理](#)

ロギングの概要

`iim.conf` ファイルで適切なパラメータを指定することによって、Instant Messaging Server、マルチプレクサ、カレンダーエージェント、およびウォッチドッグのロギングレベルを設定できます。`iim.conf` ファイルでのロギングレベルの設定方法については、46 ページの「Instant Messaging Server およびマルチプレクサの設定パラメータの変更」を参照してください。

ログファイルの場所は、Instant Messaging の設定時に指定されます。通常、ログファイルは `im_runtime_base/log` に格納されています。`im_runtime_base` のデフォルトは次のとおりです。

- Solaris の場合 :
`/var/opt/SUNWiim/default`
- Linux の場合 :
`/var/opt/sun/im`

システムの通常の保守作業の一環として、ログファイルを定期的に確認し、必要に応じて内容を削除してください。そうしないと、ディスク占有量が増加してしまいます。サーバーは、そのような処理を実行しません。

表 4-1 には、ログファイル名と各ログファイルのロギングレベルを設定するために使用する `iim.conf` ファイル内の設定パラメータを示します。

表 4-1 ログファイル名およびロギングレベル設定パラメータ

コンポーネント	ログファイル名	ロギングレベル設定パラメータ
サーバー	<code>xmppd.log</code>	<code>iim.log.iim_server.severity</code>
マルチプレクサ	<code>mux.log</code>	<code>iim.log.iim_mux.severity</code>
カレンダーエージェント	<code>agent-calendar.log</code>	<code>iim.log.agent-calendar.severity</code>
ウォッチドッグ	<code>iim_wd.log</code>	<code>iim.log.iim_wd.severity</code>

設定パラメータに設定可能な値は、次のとおりです。

- fatal
- error
- warning
- info
- debug

また、Sun Java System Access Manager とともに配備されている場合のロギング設定は、`com.ipplanet.services.debug.level` プロパティによって決定されます。このプロパティは、Sun Java System Access Manager ホスト上の `AMConfig.properties` ファイルで設定します。デフォルトでは、このファイルは次の場所にインストールされています。

`AM_svr_base/lib/AMConfig.properties`

`AM_svr_base` は Access Manager のインストール先ディレクトリです。

このプロパティに設定可能な値は、次のとおりです。

- `message`
- `warning`
- `error`
- `off`

デフォルトでは、Sun Java System Portal Server のデスクトップログファイル (`desktop.debug`) およびアーカイブログファイル (`IMArchiveSearch.log` および `IMArchiveSubmit.log`) は次の場所に格納されています。

- Solaris の場合：`/var/opt/SUNWam/debug`
- Linux の場合：`/var/opt/sun/am/debug`

ロギングレベル

エラーログの優先順位 (レベル) によって、ログの詳細レベル (冗長度) が決まります。優先レベルが高ければ、詳細レベルは低くなります。なぜなら、優先レベル (重要度) の高いイベントのみがログファイルに記録されるからです。逆に、優先レベルが低ければ、詳細レベルは高くなります。なぜなら、より多くのイベントがログファイルに記録されるからです。

ロギングレベルの設定は、Instant Messaging Server、マルチプレクサ、ウォッチドッグ、およびカレンダーエージェントのそれぞれに対して個別に行うことができます。

表 4-2 は、コンポーネントのロギングレベルの説明です。これらのロギングレベルは、UNIX の `syslog` 機構で定義されているレベルのサブセットになっています。

表 4-2 Instant Messaging コンポーネントのロギングレベル

レベル	説明
FATAL	この優先レベルでは、最小限のロギング詳細がログファイルに記録されます。重大な問題や緊急事態が発生するたびに、対応するログレコードがログファイルに追加されます。FATAL に該当する問題が発生すると、アプリケーションの実行が停止されることもあります。
ERROR	復旧可能なソフトウェアエラーが発生するか、ネットワーク障害が検出されるたびに、対応するログレコードがログファイルに追加されます。たとえば、サーバーがクライアントや別のサーバーへの接続に失敗した場合などです。
WARNING	ユーザーエラーが検出されるたびに、対応するログレコードがログファイルに追加されます。たとえば、クライアントから送信されてきた通信内容をサーバーが理解できない場合などです。
INFO	主要なアクションが発生するたびに、対応するログレコードがログファイルに追加されます。たとえば、エンドユーザーがログインやログアウトに成功した場合などです。
DEBUG	タスク情報がログファイルに記録されます。この情報はデバッグ時のみ役立ちます。個々のプロセスまたはタスク内の各イベントとその関連ステップが、ログファイルに書き込まれます。これらの情報は、エンドユーザーがアプリケーションのデバッグ時に問題を特定する際に役立ちます。

特定のロギングレベルを選択すると、そのレベルのイベントと、それより高いレベルのイベント（つまり、冗長レベルの低いイベント）がすべてログに記録されます。

デフォルトでは、サーバーのロギングレベルは INFO です。マルチプレクサとウォッチドッグのログファイルでは、ERROR がデフォルトのレベルです。

注 ロギングレベルとして DEBUG を指定すると、ログファイルはより多くのディスク領域を占有するようになります。ディスク占有量の増加を防ぐために、ログファイルを監視し、必要に応じてその内容を削除してください。

ログのレベルを設定する

ログのレベルは、`iim.conf` ファイル内のパラメータを変更して設定します。48 ページの表 4-1 に、各コンポーネントに対応するログファイル名と設定の必要なパラメータを示します。

パラメータの変更方法については、46 ページの「Instant Messaging Server およびマルチプレクサの設定パラメータの変更」を参照してください。ウォッチドッグの詳細については、152 ページの「ウォッチドッグプロセスの管理」を参照してください。カレンダーエージェントの詳細については、94 ページの「カレンダーのポップアップリマインダーの使用」を参照してください。

クライアントのロギングの管理

デフォルトでは、クライアントデータはロギングされません。サポートへの問い合わせ時に、クライアントデータの収集を依頼される場合があります。その場合、クライアントのログデータを参照できるようにするために、ロギングを有効にする必要があります。

クライアントのロギングを有効にするには、次の手順に従います。

1. クライアントのホスト上の Java Web Start アプリケーションマネージャまたは Java プラグインコントロールパネルでロギングを有効にします。
2. `im.jnlp` ファイルにデバッグパラメータを追加します。
3. 必要に応じて Instant Messenger リソースを再配備します。

▶ クライアントのロギングを有効にする

1. Java Web Start アプリケーションマネージャまたは Java プラグインコントロールパネルでロギング機能を有効にします。

クライアントが Java プラグインを初期のバージョンの JDK とともに使用している場合は、Java プラグインコントロールパネルを実行します。ロギングを有効にする方法については、Java プラグインコントロールパネルのオンラインヘルプを参照してください。

クライアントが Java Web Start または Java プラグインを JDK 5.0 とともに使用している場合は、Java Web Start アプリケーションマネージャを実行し、次の手順を実行します。

- a. 「ファイル」、「設定」を選択します。
「設定」ダイアログボックスが開きます。
- b. 「詳細」タブで「ログ出力」チェックボックスをオンにして、ログファイルの名前を入力します。

- c. 「了解」をクリックします。
2. テキストエディタで im.jnlp を開きます。
3. 次の行を探します。

```
<application-desc main-class="com.ipplanet.im.client.iIM">
```
4. セクションの末尾に次の引数を追加します。

```
<argument>debug=true</argument>
```
5. im.jnlp ファイルを保存して閉じます。
6. Sun Java System Access Manager または Sun Java System Web Server を使用している場合は、99 ページの「リソースファイルの再配備」の説明に従ってリソースファイルを再配備します。
7. Instant Messenger を再起動します。

複数の Instant Messaging Server の連携配備

LDAP 単独配備で、複数の Instant Messaging 配備を連携させた場合、より大きな Instant Messaging コミュニティが形成されます。異なるサーバー上のエンドユーザーが、アクセス権限に基づいて、お互いに通信したり、ほかのドメイン上の会議室を使用したり、リモートサーバー上のニュースチャンネルに登録したりできます。

Sun Java System Access Manager とともに配備すると、単一の Instant Messaging Server が複数のドメインをホストできます。特定の単一ドメインを、Instant Messaging Server インスタンスのデフォルトドメインとして指定することができます。同一サーバーによってホストされた異なるドメイン内のエンドユーザーは、互いに通信することはできません。複数の Instant Messaging 配備を連携させた場合、デフォルトドメイン内のエンドユーザーは、ほかのリモートの Instant Messaging Server のデフォルトドメイン内のエンドユーザーを参照できます。

ネットワーク内の複数の Instant Messaging Server 間の通信を有効にするには、ネットワーク内の各サーバーを設定して、ほかの Instant Messaging Server がそのサーバーを識別できるようにする必要があります。特定の Instant Messaging Server を識別するには、ドメイン名、ホスト名、ポート番号、サーバー ID、およびパスワードを指定します。

LDAP 単独配備では、2つのサーバーが異なるドメインになるようにしてください。

サーバーの設定ファイル内で、各 Instant Messaging Server に、文字と数字から構成されるシンボリック名 (IMserver1 など) を割り当てることができます。

警告 サーバー間通信を TLS (SSL) で保護することをお勧めします。というのも、2つのサーバー間でデータを交換する際には、第三者によるセキュリティ違反を防止する必要があるからです。2つのサーバー間を公共のインターネットで結ぶ場合、この対策は不可欠となります。Instant Messaging Server 間の SSL を設定する際には、後述する SSL 設定の概要手順に従ってください。

Instant Messaging Server 間の通信を設定する

ここでは、`iim.company22.com` と `iim.i-zed.com` という、2つの Instant Messaging Server 間の通信を有効にする方法について説明します。

▶ 2つのサーバー間の通信を設定する

1. 表 4-3 に記載された情報を収集します。

表 4-3 は、`iim.conf` ファイル内のサーバー間通信に関するパラメータと、Instant Messaging Server `iim.company22.com` と `iim.i-zed.com` における値を一覧にまとめたものです。

表 4-3 サーバー間通信用の設定情報

iim.conf ファイル内のパラメータ	サーバー <code>iim.company22.com</code> に設定する値	サーバー <code>iim.i-zed.com</code> に設定する値
<code>iim_server.serverid</code>	<code>Iamcompany22</code>	<code>Iami-zed</code>
<code>iim_server.password</code>	<code>secretforcompany22</code>	<code>secret4i-zed</code>
<code>iim_server.coservers</code>	<code>coserver1</code>	<code>coserver1</code>
<code>iim_server.domain</code>	<code>iim.company22.com</code>	<code>iim.i-zed.com</code>
<code>iim_server.coserver1.host</code>	<code>iim.i-zed.com:9919</code>	<code>iim.company22.com:9919</code>
<code>iim_server.coserver1.serverid</code>	<code>Iami-zed</code>	<code>Iamcompany22</code>
<code>iim_server.coserver1.password</code>	<code>secret4i-zed</code>	<code>secretforcompany22</code>
<code>iim_server.coserver1.domain</code>	<code>i-zed.com</code>	<code>company22.com</code>

設定パラメータの詳細については、「[Instant Messaging の設定パラメータ](#)」を参照してください。

注 ほかの Instant Messaging Server と通信するようにサーバーを設定できません。各 Instant Messaging Server は、シンボリック名で識別します。サーバーのシンボリック名は、iim.conf ファイル内の iim_server.coservers パラメータに追加します。このパラメータには複数の値を設定でき、個々の値はコンマで区切ります。

2. サーバー iim.company22.com 上で、config ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

3. iim.conf ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

注 iim.conf ファイルの所有者は、インストール時に作成した Instant Messaging Server アカウントでなければなりません。iim.conf ファイルを Instant Messaging Server アカウントで読みとれなければ、Instant Messaging Server とマルチプレクサは設定ファイルを読み取れません。さらに、iim.conf ファイルを編集できなくなる可能性もあります。

次の例は、iim.company22.com 上の iim.conf ファイル内の、サーバー間通信に対応する部分を示したものです。これらは変更可能です。

```
iim_server.serverid=Iamcompany22
iim_server.password=secretforcompany22
iim_server.domain=iim.icompany22.com
iim_server.coservers=coserver1
iim_server.coserver1.host=iim.i-zed.com:9919
iim_server.coserver1.serverid=Iami-zed
iim_server.coserver1.password=secret4i-zed
iim_server.coserver1.domain=i-zed.com
```

4. サーバー iim.i-zed.com 上の iim.conf ファイルについて、[手順 2](#) と [手順 3](#) の手順に従います。

次の例は、iim.i-zed.com 上の iim.conf ファイル内の、サーバー間通信に対応する部分を示したものです。これらは変更可能です。

```
iim_server.serverid=Iami-zed
iim_server.password=secret4i-zed
iim_server.domain=iim.i-zed.com
iim_server.coservers=coserver1
iim_server.coserver1.host=iim.company22.com:9919
iim_server.coserver1.serverid=Iamcompany22
iim_server.coserver1.password=secretforcompany22
iim_server.coserver1.domain=company22.com
```

5. 変更内容を保存し、両方のサーバーの設定を更新します。

Instant Messaging における SSL の使用

Instant Messaging は、複数の Instant Messaging Server 間で暗号化された通信や証明書に基づく認証を行えるように、SSL (Secure Sockets Layer) プロトコルをサポートしています。Instant Messaging Server は、SSL バージョン 3.0 をサポートしています。

Instant Messaging マルチプレクサおよび Instant Messenger も、クライアントとマルチプレクサ間で暗号化された通信を行えるように、SSL をサポートしています。

Instant Messaging Server で SSL を有効にするには、次の手順を実行する必要があります。

1. ユーザーの Instant Messaging Server 用の証明書を取得およびインストールしたあと、証明書発行局の証明書を信頼するように Instant Messaging Server を設定します。
2. ユーザーのサーバーと SSL を使って通信する必要がある各 Instant Messaging Server で、証明書が取得およびインストールされていることを確認します。
3. iim.conf ファイル内に適切なパラメータを設定して、サーバーの SSL を有効にします。

マルチプレクサと Instant Messenger 間の SSL を有効にするには、次の手順を実行する必要があります。

1. [証明書発行局への証明書の要求](#)
2. [証明書のインストール](#)
3. [マルチプレクサと Instant Messenger 間の SSL の有効化](#)
4. [サーバー間通信の SSL を有効にする](#)

5. セキュリティ保護されたバージョンの Instant Messenger の起動

証明書の管理方法の詳細については、<http://docs.sun.com/> で Web Server と Application Server の製品マニュアルを参照してください。

証明書発行局への証明書の要求

Instant Messenger とマルチプレクサ間の SSL を有効にするには、証明書をインストールし、セキュリティ保護された通信用のデータベースを作成する必要があります。証明書の要求とインストールは、Web Server または Application Server を使用して行うことができます。

▶ 証明書の要求とインストールを行う

1. 次の管理サーバー起動用 URL をブラウザに入力します。

```
http://hostname.domain-name:administration_port
```

ユーザー名とパスワードの入力を要求するウィンドウが表示されます。

2. Web Server または Application Server のインストール時に指定した管理ユーザー名とパスワードを入力します。

「Administration Server」ページが表示されます。

3. 個別の Web Server インスタンスまたは Application Server インスタンスを作成します。複数のサーバーインスタンスのインストールについては、次のサイトの製品マニュアルを参照してください。

<http://docs.sun.com/>

4. 公開鍵と非公開鍵を格納するための信頼データベースを作成します。このデータベースはキーペアファイルと呼ばれます。キーペアファイルは、SSL 暗号化に使われます。

信頼データベースの詳細については、次のサイトで Web Server と Application Server の製品マニュアルを参照してください。

<http://docs.sun.com/>

5. 証明書発行局に証明書を要求します。

証明書の要求方法については、次のサイトで Web Server と Application Server の製品マニュアルを参照してください。

<http://docs.sun.com/>

証明書のインストール

証明書発行局からサーバーの証明書を受け取ったら、その証明書をインストールする必要があります。

▶ 証明書をインストールする

1. 次の管理サーバー起動用 URL をブラウザに入力します。

```
http://hostname.domain-name:administration_port
```

ユーザー名とパスワードの入力を要求するウィンドウが表示されます。

2. Web Server または Application Server のインストール時に指定した管理ユーザー名とパスワードを入力します。

「Administration Server」ページが表示されます。

3. サーバーの証明書をインストールします。

証明書のインストール方法については、次のサイトで Web Server と Application Server の製品マニュアルを参照してください。

```
http://docs.sun.com/
```

4. Web Server または Application Server の alias ディレクトリに移動します。

5. alias ディレクトリから Instant Messenger の config ディレクトリにデータベースファイルをコピーします。

alias ディレクトリから Instant Messenger の config ディレクトリにデータベースファイルをコピーするには、次のように入力します。

```
cp https-serverid-hostname-cert8.db
/etc/opt/SUNWiim/default/config/cert8.db
```

```
cp https-serverid-hostname-key3.db
/etc/opt/SUNWiim/default/config/key3.db
```

```
cp secmod.db /etc/opt/SUNWiim/default/config/secmod.db
```

注 Instant Messaging Server を実行するエンドユーザーは、cert7.db、key3.db、および secmod.db の各ファイルに対する読み取り権限を持っている必要があります。

6. Instant Messaging の *im_cfg_base* ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

7. 任意のエディタを使って *sslpassword.conf* ファイルを作成します。たとえば、次のように入力します。

```
vi sslpassword.conf
```

8. *sslpassword.conf* ファイルに次の行を入力します。

```
Internal (Software) Token:password
```

password: 信頼データベースの作成時に指定したパスワードです。

9. ファイルを保存します。

注 Instant Messenger のすべてのエンドユーザーは、`sslpassword.conf` ファイルの所有権限と読み取り権限を持っている必要があります。

10. SSL の動作を確認したあと、Web Server または Application Server に管理者としてログインし、証明書の要求時に作成したサーバーインスタンスを削除します。

マルチプレクサと Instant Messenger 間の SSL の有効化

表 4-4 は、`iim.conf` ファイル内の、Instant Messenger とマルチプレクサ間の SSL を有効にするためのパラメータを一覧にまとめたものです。また、この表には、これらのパラメータの説明とデフォルト値も含まれています。

表 4-4 Instant Messenger とマルチプレクサの SSL パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_mux.usessl</code>	<code>off</code>	この値が "on" に設定された場合、マルチプレクサは、アプリケーションデータを交換する前に、受け入れた接続ごとに SSL ハンドシェイクを要求します。
<code>iim_mux.secconfigdir</code>	Solaris の場合： <code>/etc/opt/SUNWiim/default/config</code> Linux の場合： <code>/etc/opt/sun/im/default/config</code>	このディレクトリには鍵と証明書のデータベースが含まれます。また、通常はセキュリティモジュールデータベースも含まれます。
<code>iim_mux.keydbprefix</code>	(空の文字列)	この値には、鍵データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。鍵データベースのファイル名は、必ず <code>key3.db</code> で終わる必要があります。 たとえば <code>This-Database-key3.db</code> のように、鍵データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>This-Database</code> になります。

表 4-4 Instant Messenger とマルチプレクサの SSL パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_mux.certdbprefix</code>	(空の文字列)	この値には、証明書データベースのファイル名のプレフィックスが必要。証明書データベースのファイル名は、必ず <code>cert7.db</code> で終わる必要があります。 たとえば <code>Secret-stuff-cert7.db</code> のように、証明書データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>Secret-stuff</code> になります。
<code>iim_mux.secmodfile</code>	<code>secmod.db</code>	この値には、セキュリティモジュールファイルの名前が必要です。
<code>iim_mux.certrnickname</code>	<code>Server-Cert</code>	この値には、証明書のインストール時に入力した証明書の名前が必要です。 この証明書の名前は、大文字と小文字が区別されます。
<code>iim_mux.keystorepasswordfile</code>	<code>sslpassword.conf</code>	この値には、鍵データベースのパスワードが格納されたファイルの相対パスと名前が必要です。このファイルは次の行を含む必要があります。 <code>Internal (Software)</code> <code>Token:password</code> <code>password</code> は、鍵データベースを保護するパスワードです。

▶ Instant Messenger とマルチプレクサ間の SSL を有効にする

- `iim_cfg_base` ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```
- `iim.conf` ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

- マルチプレクサ設定パラメータに、表 4-4 で説明した値を追加します。

次に示すのは、マルチプレクサ設定パラメータを含む iim.conf ファイルの例です。

```
! IIM multiplexor configuration
! =====
!
! Multiplexor specific options

! IP address and listening port for the multiplexor.
! WARNING: If this value is changed, the port value of '-server'
argument
! in the client's im.html and im.jsp files should also be changed
to match th
is.
iim_mux.listenport = "siroe.com:5222"

! The IM server and port the multiplexor talks to.
iim_mux.serverport = "siroe.com:45222"

! Number of instances of the multiplexor.
iim_mux.numinstances = "1"

! Maximum number of threads per instance
iim_mux.maxthreads = "10"

! Maximum number of concurrent connections per multiplexor
process
iim_mux.maxsessions = "1000"

iim_mux.usessl = "on"
iim_mux.seconfigdir = "/etc/opt/SUNWiim/default/config"
iim_mux.keydbprefix = "This-Database"
iim_mux.certdbprefix = "Secret-stuff"
iim_mux.secmodfile = "secmod.db"
iim_mux.cernickname = "Server_Cert"
iim_mux.keystorepasswordfile = "sslpassword.conf"
```

セキュリティ保護されたバージョンの Instant Messenger の起動

セキュリティ保護されたバージョンの Instant Messenger を起動するには、ブラウザから `imssl.html` ファイルまたは `imssl.jnlp` ファイルにアクセスします。これらのファイルは、リソースディレクトリ内にあります。このディレクトリは、Instant Messenger のすべてのリソースを格納するベースディレクトリです。

また、これらのアプレット記述子ファイルへのリンクを、`index.html` ファイルに追加することもできます。

サーバー間通信の SSL を有効にする

SSL を有効にする前に、前述したように証明書データベースを作成し、サーバーの証明書を取得してインストールし、CA の証明書を信頼する必要があります。

▶ SSL を有効にする

1. 次の `iim.conf` パラメータを設定します。

- `iim_server.usesslport=true`
- `iim_server.sslport=5223`

これらのパラメータはすでに、`iim.conf` ファイル内に存在しているはずです。

2. 「複数の Instant Messaging Server の連携配備」の説明に従ってサーバー間の設定を行い、次のパラメータを追加します。

- `iim_server.coserver1.usessl=true`

ポート番号を次のように変更します。

- `iim_server.coserver1.host=hostname:5223`

このポート番号は、相手側のサーバーの SSL ポートである必要があります。

必要な SSL 設定を含む `iim.conf` ファイルの一部を、次に示します。

```

! Server to server communication port.
iim_server.port = "5269"
! Should the server listen on the server to server communication port
iim_server.useport = "True"
! Should this server listen for server-to-server communication using ssl port
iim_server.usesslport = "True"
iim_server.sslport=5223
iim_server.coservers=coserver1
iim_server.coserver1.serverid=Iamcompany22
iim_server.coserver1.password=secretforcompany22
iim_server.coserver1.usessl=true
iim_server.coserver1.host=iim.i-zed.com:5223
iim_server.serverid=Iami-zed
iim_server.password=secret4i-zed
iim_server.secconfigdir = "/etc/opt/SUNWiim/default/config"
iim_server.keydbprefix = "This-Database"
iim_server.certdbprefix = "Secret-stuff"
iim_server.secmodfile = "secmod.db"
iim_server.certrnickname = "Server_Cert"
iim_server.keystorepasswordfile = "sslpassword.conf"

```

2 つのサーバー間の SSL の有効化

62 ページの表 4-5 は、iim.conf ファイル内の、2 つの Instant Messaging Server 間の SSL を有効にするためのパラメータの一覧です。また、この表には、これらのパラメータの説明とデフォルト値も含まれています。

表 4-5 サーバー間通信の SSL 設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_server.secconfigdir	Solaris の場合： /etc/opt/SUNWiim/default/config Linux の場合： /etc/opt/sun/im/default/config	このディレクトリには鍵と証明書のデータベースが含まれます。また、通常はセキュリティモジュールデータベースも含まれます。

表 4-5 サーバー間通信の SSL 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.keydbprefix</code>	なし	<p>この値には、鍵データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。鍵データベースのファイル名は、必ず <code>key3.db</code> で終わる必要があります。</p> <p>たとえば <code>This-Database-key3.db</code> のように、鍵データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>This-Database</code> になります。</p>
<code>iim_server.certdbprefix</code>	なし	<p>この値には、証明書データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。証明書データベースのファイル名は、必ず <code>cert7.db</code> で終わる必要があります。</p> <p>たとえば <code>Secret-stuff-cert7.db</code> のように、証明書データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>Secret-stuff</code> になります。</p>
<code>iim_server.secmodfile</code>	<code>secmod.db</code>	<p>この値には、セキュリティモジュールファイルの名前が必要です。</p>
<code>iim_server.certrnickname</code>	<code>Server-Cert</code>	<p>この値には、証明書のインストール時に入力した証明書の名前が必要です。</p> <p>この証明書の名前は、大文字と小文字が区別されます。</p>

表 4-5 サーバー間通信の SSL 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.keystorepass</code> <code>wordfile</code>	<code>sslpassword.conf</code>	この値には、鍵データベースのパスワードが格納されたファイルの相対パスと名前が必要です。このファイルは次の行を含む必要があります。 Internal (Software) Token: <i>password</i> <i>password</i> は、鍵データベースを保護するパスワードです。
<code>iim_server.trust_all_certificate</code>	<code>false</code>	この値が <code>true</code> の場合、サーバーはすべての証明書を信頼するとともに、証明書の情報をログファイル内に追加します。

Instant Messaging の LDAP アクセス設定の管理

Instant Messaging Server の LDAP 単独配備では、ディレクトリサーバーが必要となります。LDAP 単独配備では、Instant Messaging Server はディレクトリサーバーを使ってエンドユーザーの認証と検索を行います。

Sun Java System Access Manager とともに配備した場合、Instant Messaging Server は Sun Java System Portal Server が使用しているディレクトリを使います。Access Manager の配備環境にインストールされた Instant Messaging Server は、Access Manager が使用するディレクトリを、エンドユーザーの認証用としてではなく、エンドユーザーの検索用として使います。Access Manager の配備では、Access Manager が認証を行います。

LDAP ディレクトリを使ってユーザーの名前空間を管理する場合、デフォルトの設定では、このディレクトリで使用するスキーマに関して、次のような仮定がなされます。

- エンドユーザーエント리는、inetOrgPerson オブジェクトクラスによって識別される。
- グループエント리는、groupOfUniqueNames または groupOfURLs オブジェクトクラスによって識別される。
- エンドユーザーの Instant Messenger ユーザー ID 属性は、(inetOrgPerson オブジェクトクラスの) uid 属性によって提供される。
- エンドユーザーの電子メールアドレスは、mail 属性によって提供される。
- エンドユーザーまたはグループの表示名は、cn 属性によって提供される。

- グループのメンバーリストは、(groupOfUniqueNames オブジェクトクラスの) uniqueMember 属性によって提供される。

これらのデフォルト設定は、iim.conf ファイルを編集することによって変更できません。詳細については、157 ページの「[iim.conf ファイルの使用](#)」を参照してください。

匿名ユーザーとしてのディレクトリ検索

Instant Messaging が正しく機能するには、ディレクトリを検索する必要があります。匿名ユーザーによる検索が可能であるようにディレクトリが設定されている場合、Instant Messaging はディレクトリを検索できます。匿名ユーザーがディレクトリの読み取りまたは検索を行えない場合、ディレクトリに対して読み取り以上のアクセス権限を持つユーザー ID の資格情報を iim.conf ファイルに設定する必要があります。

それらの資格情報は、次のとおりです。

- 識別名 (dn)
- 上記の dn に対するパスワード

▶ サーバーが特定のエンドユーザーとしてディレクトリ検索を行えるようにする

1. iim.conf ファイル内で、次のパラメータに対する値を探します。

- iim_ldap.usergroupbinddn - 検索時のディレクトリへのバインドに使う識別名 (dn) を指定します。
- iim_ldap.usergroupbindcred - 識別名 (dn) に対して使うパスワードを指定します。

たとえば、次のように入力します。

```
iim_ldap.usergroupbinddn="cn=iim server,o=i-zed.com"
iim_ldap.usergroupbindcred=secret
```

注 ここで必要なのは、ドメインツリーに対する読み取りアクセス権のみであるため、書き込みレベルのアクセス権を持つ管理者レベルの資格情報を使用する必要はありません。したがって、読み取りレベルのアクセス権を持つ LDAP ユーザーが存在していれば、その資格情報を代わりに使用してください。そうしたほうが、管理者レベルの資格情報が拡散するのを防ぐため、システムの安全性が向上します。

2. Access Manager とともに配備した場合、通常匿名ユーザーではディレクトリを検索できません。この場合は、iim_ldap.useidentityadmin 設定パラメータを true に設定してください。また、次の設定パラメータは、削除もしくはコメントアウトできます。

- `iim_ldap.usergroupbinddn`
 - `iim_ldap.usergroupbindcred`
3. `iim.conf` ファイルを編集します。

`iim.conf` ファイルの編集手順については、[46 ページの「Instant Messaging Server およびマルチプレクサの設定パラメータの変更」](#)を参照してください。

`iim_ldap.usergroupbinddn` と `iim_ldap.usergroupbindcred` の各パラメータが `iim.conf` ファイル内に存在しない場合、それらのパラメータをファイル内の任意の場所に追加してください。

動的 LDAP サーバークラウドの設定

LDAP サーバークラウドを使うと、DN に基づいてエンドユーザーをフィルタリングし、それらのエンドユーザーを単一のグループ内に含めることができます。動的グループは、ディレクトリサーバ内の `groupOfUris` オブジェクトクラスとして定義されます。

エンドユーザーが、動的グループを検索結果内に表示し、それらを連絡先一覧に追加できるようにするには、`groupOfUris` オブジェクトを検索結果内に含める必要があります。

サーバの設定ファイル `iim.conf` に対して、次の変更を行う必要があります。

1. `config` ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

2. `iim.conf` ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

3. `iim.conf` ファイルに次の情報を追加します。

```
iim_ldap.usergroupbynamefilter=(| (&(| (objectclass=groupofuniquenames) (objectclass=groupofurls)) (cn={0})) (&(objectclass=inetorgperson) (cn={0})))
```

```
iim_ldap.groupbrowsefilter=(| (objectclass=groupofuniquenames) (objectclass=groupofurls))
```

```
iim_ldap.groupclass=groupOfUniqueNames,groupOfURLs
```

属性名とオブジェクトクラス名は、設定可能です。デフォルトでは、`memberOfUrls` 属性が、動的グループのメンバーシップ属性として使用されます。`memberOfUrls` 以外の属性名を使用する場合は、その属性名を `iim_ldap.groupmemberurlattr` オプションに設定してください。

Instant Messaging データのバックアップ

Instant Messaging には障害復旧ツールは付属していません。サイトのバックアップシステムを使って、設定ディレクトリとデータベースディレクトリを定期的にバックアップしてください。

バックアップすべき情報

バックアップすべき Instant Messaging 情報の種類は、次のとおりです。

- 設定情報
- Instant Messaging のエンドユーザーデータ
- Instant Messenger リソース

設定情報は設定ディレクトリ (`im_cfg_base`) に格納されています。デフォルトのパスは次のとおりです。

- Solaris の場合 `:/etc/opt/SUNWiim/default/config`
- Linux の場合 `:/etc/opt/sun/im/default/config`
- (省略可能) 「[Instant Messenger のカスタマイズ](#)」で説明しているファイルを1つでもカスタマイズした場合、カスタマイズしたファイルをリソースディレクトリからバックアップします。

Instant Messaging データはデータベースディレクトリ (`im_db_base`) に格納されています。`im_db_base` のデフォルトは次のとおりです。

- Solaris の場合 `:/var/opt/SUNWiim/default/db`
- Linux の場合 `:/var/opt/sun/im/db`

Instant Messenger リソースがカスタマイズされている場合、それらのリソースもバックアップする必要があります。Instant Messenger リソースの場所は、インストール時に指定します。

バックアップの実行

設定情報はあまり頻繁には変更されませんが、Instant Messaging エンドユーザーデータは頻繁に変更されます。したがって、Instant Messaging エンドユーザーデータが失われることのないよう、それらを定期的にバックアップすることをお勧めします。バックアップは、インストールプログラムやアンインストールプログラムの実行前に実行する必要があります。

エンドユーザーデータや設定情報をバックアップする際、Instant Messaging Server を停止する必要はありません。というのも、サーバーによるすべてのディスクコミットは自動的に実行されるからです。

バックアップ情報の復元

ディスクに障害が発生し、すべてのエンドユーザーデータと設定情報が失われた場合、バックアップしたエンドユーザーデータと設定情報を復元する必要があります。

▶ エンドユーザーデータをバックアップから復元する

1. 実行時ディレクトリに移動します。

たとえば、次のように入力します。

```
cd im_runtime_base
```

im_runtime_base のデフォルトは次のとおりです。

Solaris の場合 : /var/opt/SUNWiim/default

Linux の場合 : /var/opt/sun/im/

2. Instant Messaging Server を停止します。次のように入力します。

```
imadmin stop
```

3. バックアップデータを *im_db_base* ディレクトリにコピーします。バックアップされたデータのディレクトリ構造が保持されていることを確認してください。

4. 新しく復元したデータのアクセス権と所有者を確認します。

ファイルの所有者は Instant Messaging システムユーザーであるはずですが、このユーザーの詳細については、[25 ページの「UNIX システムユーザーおよびグループの作成」](#)を参照してください。アクセス権は次のように設定されているはずですが、

- ファイル : 600 (所有者だけが読み取りと書き込みの権限を持つ)
- ディレクトリ : 700 (所有者だけが読み取り、書き込み、および実行の権限を持つ)

アクセス権と所有者を変更する方法については、オペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

5. 次のように入力して、Instant Messaging Server を起動します。

```
imadmin start
```


Instant Messenger の管理

この章では、Instant Messenger のカスタマイズ方法と管理方法について次の各節で説明します。

- [Instant Messenger の設定](#)
- [Instant Messenger の起動](#)
- [コードベースの変更](#)
- [Web コンテナのポートの変更](#)
- [Instant Messenger のカスタマイズ](#)
- [Instant Messenger のリソースファイル](#)
- [クライアントユーザーによる連絡先の検索方法の変更](#)
- [会議室とニュースチャネルの管理](#)
- [Instant Messenger のプロキシ設定の変更](#)
- [Instant Messenger 公開機能セットの制御](#)
- [エンドユーザーのシステム上に格納される Instant Messenger データ](#)
- [カレンダーのポップアップリマインダーの使用](#)
- [リソースファイルの再配備](#)

Instant Messenger の設定

Instant Messenger の起動方法と実行方法には、次の 2 つがあります。

Java Web Start を使用する方法：この設定では、Instant Messenger は、Java Web Start からアプリケーションとして起動されます。Instant Messenger の起動後には、ブラウザは不要です。

Java プラグインを使用する方法：この設定では、Instant Messenger は Java アプレットとして実行されます。Instant Messenger のセッションを有効に保つには、アプレットが起動したブラウザウィンドウを開いたままにしておく必要があります。このウィンドウを使ってほかの URL に移動することはできません。

Instant Messenger を利用可能にする Java ソフトウェアの設定方法の詳細については、第 2 章「[Instant Messenger のセットアップと起動](#)」を参照してください。

Instant Messenger の起動

Instant Messenger を起動するには、次のいずれかを使用します。

- `index.html` ファイル。このファイルには、Instant Messenger の Java Web Start 版を起動するオプションと Java プラグイン版を起動するオプションの両方が含まれます。また、Instant Messenger マニュアルへのリンクも含まれます。
- Instant Messenger へのリンクを含む、ユーザー自身が設計した Web ページ。
- `im.html`、`im.jnlp` のいずれかのファイルを直接参照する URL。

Instant Messenger を起動する

Instant Messenger を起動するには、次の URL を使います。

`http://webservice:webserviceport/path/filename`

この URL の構成要素は、次のとおりです。

<i>webservice</i>	Instant Messenger リソースがインストールされている Web コンテナの名前を指定します。
<i>webserviceport</i>	(省略可能) Web コンテナのポートを指定します。デフォルト値は 80 です。
<i>path</i>	(省略可能) クライアントファイルのインストール先ディレクトリを指定します。インストール時にデフォルト値を選択した場合、クライアントファイルの格納先サブディレクトリを指定する必要はありません。

<i>filename</i>	<p>使用する Instant Messenger ファイルを指定します。指定できるのは、次のいずれかです。</p> <p><i>index.html</i>: このファイルは製品に付属しています。このファイルには、Instant Messenger の Java Web Start 版と Java プラグイン版の両方を起動する <i>im.jnlp</i> と <i>im.html</i> へのリンクが含まれています。</p> <p><i>im.jnlp</i>: Instant Messenger の Java Web Start 版のみを起動する <i>jnlp</i> ファイルです。</p> <p><i>im.html</i>: Instant Messenger の Java プラグイン版のみを起動するページです。</p>
-----------------	---

また、次のことも実行できます。

- URL をお気に入りに追加する。
- デスクトップ上の Java Web Start アイコンを使ってアプリケーションを起動する。
- デスクトップにショートカットを作成し、使用する。

これには、次の 2 つの方法があります。

- Java Web Start を使用してショートカットを作成する。
- 手動でショートカットを作成し、次のようにターゲット値を設定する。

```
javaws_cmd jnlp_URL
```

jnlp_URL は *im.jnlp* ファイルの URL です。

- Solaris 上で次のように入力して、Instant Messenger をコマンド行から起動する。

```
javaws_cmd URL
```

コードベースの変更

コードベースは、Instant Messenger がリソースにアクセスするための URL です。Instant Messaging クライアントの初期ダウンロードの開始ページも含まれます。この URL は、インストール後の設定で `configure` ユーティリティを使用してリソースファイルを配備するときに定義されます。Web コンテナのポート番号を含む Instant Messenger リソースへのアクセスに使用する URL のいずれかの部分を変更する場合は、コードベースを変更する必要があります。

リソースファイルの配備後にコードベースを変更する場合は、次の内容を実行する必要があります。

- 新しい URL をポイントするテンプレートファイルを修正する。その方法については、この節の「リソーステンプレートのコードベースを変更する」を参照してください。
- `configure` ユーティリティを再実行し、設定するコンポーネントを指定するように要求があった場合のみ「Messenger リソース」コンポーネントを選択する。その方法については、26 ページの「インストール後またはアップグレード後の Instant Messaging の設定」を参照してください。
- リソースファイルを再配備する。その方法については、99 ページの「リソースファイルの再配備」を参照してください。

▶ リソーステンプレートのコードベースを変更する

- `im_svr_base/html` ディレクトリ内の各テンプレートファイルを新しい URL で編集します。

テンプレートファイルの名前は `*.template` です。すべてのテンプレートファイルの一覧については、75 ページの表 5-1 を参照してください。

Web コンテナのポートの変更

Web コンテナのポート番号を含む Instant Messenger リソースへのアクセスに使用する URL のいずれかの部分を変更する場合は、コードベースを変更する必要があります。その方法については、74 ページの「コードベースの変更」を参照してください。

Instant Messenger のカスタマイズ

Instant Messenger は、カスタマイズ可能です。個々の組織の要求に応じて、HTML ファイルや JNLP ファイルをカスタマイズできます。リソースファイルの配備をカスタマイズする場合は、`configure` ユーティリティを実行し (インストール後に実行していない場合)、ファイルのカスタマイズをしてから、再度リソースファイルを配備してください。`configure` ユーティリティによって、インデックスの一部とカスタマイズ可能な `.jnlp` ファイルが作成されるので、最初に `configure` を実行する必要があります。再配備の方法については、99 ページの「リソースファイルの再配備」を参照してください。

ユーザー要件に応じて Instant Messenger をカスタマイズする方法としては、次のものがあります。

- [index.html](#) ファイルと [im.html](#) ファイルのカスタマイズ (LDAP 単独配備)
- [アプリケーションのカスタマイズ \(Java Web Start\)](#)
- [ユーザー名表示のカスタマイズ](#)

この節では、Instant Messenger のカスタマイズのために変更可能な Instant Messaging Server ファイルについて説明します。カスタマイズ可能なファイルはすべて、`html` ディレクトリに格納されています。たとえば Solaris の場合、HTML ファイルはリソースディレクトリ内に格納されます。

Instant Messenger のリソースファイル

Instant Messenger リソースファイルは、リソースディレクトリと呼ばれるディレクトリ内に格納されます。

表 5-1 に、リソースディレクトリ (`im_svr_base/html`) 内の Instant Messenger ファイルの一覧を示します。この表には、これらのファイルの説明とカスタマイズ情報も含まれています。リソースディレクトリ内には、ディレクトリパス内で一般的に「`lang`」と表現されるロケール別サブディレクトリが存在しています。実際には、`en_US`、`jp`、`fr_FR` といった、各言語の略語として表現されます。

表 5-1 Instant Messenger のファイル

ファイル	説明	カスタマイズ可能か
<code>lang/im.html</code>	Java プラグイン版の Instant Messenger を起動するための初期ページです。	可能

表 5-1 Instant Messenger のファイル (続き)

ファイル	説明	カスタマイズ可能か
im.html.template	im.html のテンプレート版です。	不可能。このファイルは、インストールプログラムによる im.html ファイル生成時に使用されます。
imdesktop.jar	im.html ファイルまたは im.jnlp ファイルによってダウンロードされるクライアント jar ファイルです。	不可能
lang/im.jnlp	Java Web Start 版の Instant Messenger を起動するための jnlp ファイルです。	可能
im.jnlp.template	im.jnlp のテンプレート版です。	不可能
imjni.jar	im.html ファイルまたは im.jnlp ファイルによってダウンロードされるクライアント jar ファイルです。	不可能
messenger.jar	im.html ファイルまたは im.jnlp ファイルによってダウンロードされるメインクライアント jar ファイルです。	不可能
icalendar.jar	カレンダーマインダの処理時に使用される icalendar パーサーです。	不可能
imnet.jar	im.html ファイルまたは im.jnlp ファイルによってダウンロードされるクライアント jar ファイルです。	不可能
lang/imbrand.jar	このファイルには、カスタマイズ可能なプロパティ、スタイルシート、イメージ、背景、音声の各ファイルが含まれています。	可能
lang/imssl.html	Java プラグイン版の Instant Messenger を起動するための初期ページです。クライアントとマルチプレクサ間で SSL を実行する場合に使用されます。	可能
imssl.html.template	imssl.html のテンプレート版です。	不可能

表 5-1 Instant Messenger のファイル (続き)

ファイル	説明	カスタマイズ可能か
<i>lang/imssl.jnlp</i>	Java Web Start 版の Instant Messenger を起動するためのファイルです。このファイルは、クライアントとマルチプレクサ間で SSL を実行する場合に使用されません。	可能
<i>imssl.jnlp.template</i>	<i>imssl.jnlp</i> ファイルのテンプレート版です。	不可能
<i>jnlpLaunch.jsp</i>	このファイルを使うと、Sun Java System Access Manager にすでにログインしているエンドユーザーが、シングルサインオンと Java Web Start による Instant Messenger の起動を行うことができます。	可能
<i>pluginLaunch.jsp</i>	このファイルを使うと、Sun Java System Access Manager にすでにログインしているエンドユーザーが、シングルサインオンと Java プラグインによる Instant Messenger の起動を行うことができます。	可能
<i>index.html</i>	LDAP 配備用のスプラッシュ (初期) ページです。 <i>im.html</i> と <i>im.jnlp</i> へのリンクが含まれているほか、 <i>windows.htm</i> 、 <i>solaris.htm</i> 、および <i>quickref.htm</i> へのマニュアルリンクも含まれています。このページはサイトの要件に応じてカスタマイズ可能です。	可能
<i>index.html.template</i>	<i>index.html</i> のテンプレート版です。	不可能
<i>lang/imhelp/SunONE.jpg</i>	<i>quickref.htm</i> 、 <i>solaris.htm</i> 、および <i>windows.htm</i> によって使用されるイメージです。	置換可能
<i>quickref.html</i>	<i>lang/imhelp/</i> 内に格納されたこれらのファイルには、Instant Messenger の入門レベルのマニュアルが含まれています。	可能
<i>solaris.html</i>		
<i>windows.html</i>		

表 5-1 Instant Messenger のファイル (続き)

ファイル	説明	カスタマイズ可能か
<i>lang/imhelp</i>	Instant Messenger のオンラインヘルプディレクトリです。	不可能
<i>imwebex.jar</i>		
<i>msgrinstall.jar</i>		

index.html ファイルと im.html ファイルのカスタマイズ (LDAP 単独配備)

Instant Messenger では、index.html ファイルと im.html ファイルの「静的な」部分を変更することで、完全にカスタマイズされたユーザーインタフェースを実現できます。これらの HTML ファイルには、テキストと、それらのテキストの書式や処理方法を記述したマークアップの両方が含まれています。マークアップは一連のタグを使って実装されており、それらのタグは、ヘッダ、インデント、フォントサイズ、およびフォントスタイルに対する書式を指定しています。

変更可能なページ要素のいくつかを、次に示します。

- イメージおよびバナー
- 画面上のテキスト (タイトルやフィールドラベルなど)
- 背景のスキーム

index.html ファイルは、Instant Messenger のアプレットと Java Web Start アプリケーションの両方を起動します。Instant Messenger アプレットを実行する場合は、im.html ファイルを変更してください。im.html ファイルは、index.html から呼び出され、Instant Messenger のアプレットを起動します。im.html ファイルは、インストール時に生成されます。また、このファイルには、マルチプレクサを参照するアプレット引数が含まれています。

注 im.html ファイル内の引数 「<PARAM NAME="server" VALUE="servername">」 は、Instant Messaging のマルチプレクサとそのポートを表しています。iim_mux.listenport パラメータのデフォルト値を変更した場合、値 *servername* を *host.domain:port* に変更する必要があります。

Sun Java System Access Manager SSO による Instant Messenger の起動

Instant Messenger クライアントを Sun Java System Access Manager によるシングルサインオン (SSO) を使って起動するには、`IMLaunch.jsp` を使用します。このファイルは、リソースディレクトリ内に格納されています。

Sun Java System Access Manager および Instant Messenger クライアントを同じ Web コンテナを使用するように設定して SSO を有効にする必要があります。

Instant Messaging Server を起動するには、ブラウザに次のように入力します。

```
codebase/IMLaunch.jsp?server=multiplexor-hostname:multiplexor-port
```

または

```
codebase/IMLaunch.jsp?server=www.example.com:5222
```

ここで、

`codebase` は、Instant Messenger リソースのダウンロード元のコードベースです。たとえば、<http://www.example.com> などです。

`multiplexor-hostname` は、マルチプレクサの名前です。たとえば、<http://www.company22.com> などです。

`multiplexor-port` は、マルチプレクサがクライアントから受信する要求を待機するポートの番号です。たとえば、5222 などです。

`IMLaunch.jsp` は、Java Web Start または Java プラグインを使って Instant Messenger を起動するときに使用されます。

アプリケーションのカスタマイズ (Java Web Start)

Java Web Start を使って Instant Messenger を実行する場合、`im.jnlp`、`imres.jnlp`、`imbrand.jar` の各ファイルを変更することで、ユーザーインターフェースをカスタマイズできます。これらの HTML ファイルに対して行うことができる変更を次に示します。

- `im.jnlp`: このファイルは、Java Web Start 版の Instant Messenger アプリケーションを起動します。このファイル内のコードベース、タイトル、ベンダー、および説明を変更できます。

表 5-2 に、`im.jnlp` ファイルのサンプルコードを示します。カスタマイズ可能な HTML コードは太字で示してあります。

表 5-2 im.jnlp ファイルのサンプル

```

<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<!-- Instant Messenger -->
<jnlp
  spec="1.0+"
  codebase="http://im.i-zed.com:80/im"
  href="en/im.jnlp">
  <information>
    <title>Instant Messaging</title>
    <vendor>I-Zed.com</vendor>
    <homepage href="http://www.I-zed.com/" />
    <description>I-Zed's Sun Java System Instant Messenger</description>
    <description kind="short">Instant Messenger</description>
    <icon href="CompanyLogo.gif" />
    <offline-allowed />
  </information>
  <security>
    <all-permissions />
  </security>
  <resources>
    <j2se version="1.3+">
      <resources>
        <jar href="en/imres.jar" />
        <jar href="en/imbrand.jar" />
      </resources>
    </j2se>
    <jar href="messenger.jar" />
    <jar href="imdesktop.jar" />
    <jar href="imnet.jar" />
    <jar href="icalendar.jar" />
    <nativelib href="imjni.jar" />
  </resources>
  <application-desc main-class="com.iplanet.im.client.iIM">
    <argument>server=im.i-zed.com:45222</argument>
    <argument>help_codebase=http://im.i-zed.com:80/im/en</argument>
  </application-desc>
</jnlp>

```

注 im.jnlp ファイル内の引数 `<argument>servername</argument>` は、Instant Messaging マルチプレクサのホストとポートを表しています。iim_mux.listenport パラメータのデフォルト値を変更した場合、値 *servername* を *host.domain:port* に変更する必要があります。

- `imbrand.jar`: このファイルには、カスタマイズ可能なイメージファイル、音声ファイル、およびプロパティが含まれています。`imbrand.jar` ファイルを `jar` コマンドを使って解凍するには、**Java Developers Kit 1.3 (JDK)** が必要となります。`imbrand.jar` ファイルの内容の詳細については、[81 ページの表 5-3](#) を参照してください。

`jar` コマンドの構文は、次のようになります。

```
jar xvf imbrand.jar
```

このコマンドを実行すると、ディレクトリツリーが作成され、そこにリソースファイルがコピーされます。`jar` ファイル内の個々のファイルを変更する場合、このディレクトリ構造を保持する必要があります。

独自に変更した `.gif` ファイルや `.wav` ファイルで置き換えるには、ファイル名を変更せずに次の `jar` コマンドを使用してディレクトリに戻します。

```
jar -uf imbrand.jar com/Sun/im/client/images/*.gif
```

このコマンドを実行すると、変更された `.gif` ファイルが、`imbrand.jar` ファイルに反映されます。同様のことが、音声ファイル (`.wav` ファイル) についても可能です。

imbrand.jar の内容一覧

[表 5-3](#) は、`imbrand.jar` ファイル内のファイルとその説明を、一覧にまとめたものです。`imbrand.jar` ファイル内に含まれるイメージファイルと音声ファイルを使えば、Instant Messenger の外観をカスタマイズできます。

表 5-3 imbrand.jar の内容

ファイル名	説明
設定ファイル	
<code>brand.properties</code>	
<code>chat-styles.css</code>	
絵文字	
<code>emo_alarm.png</code>	警戒の感情を視覚的に表現します。
<code>emo_angel.png</code>	天使のような感情を視覚的に表現します。
<code>emo_angry.png</code>	怒りの感情を視覚的に表現します。
<code>emo_balloons.png</code>	風船の束を視覚的に表現します。
<code>emo_beermug.png</code>	ビアマグを視覚的に表現します。
<code>emo_cake.png</code>	パースデーケーキを視覚的に表現します。
<code>emo_calendar.png</code>	カレンダーを視覚的に表現します。

表 5-3 imbrand.jar の内容 (続き)

ファイル名	説明
emo_canworms.png	厄介な表情を視覚的に表現します。
emo_clown.png	ピエロの顔を視覚的に表現します。
emo_cool.png	クールな感情を視覚的に表現します。
emo_dead.png	まいった表情を視覚的に表現します。
emo_devil.png	悪魔のような感情を視覚的に表現します。
emo_dont-tell.png	秘密にしてもらいたい感情を視覚的に表現します。
emo_embarrassed.png	恥ずかしい感情を視覚的に表現します。
emo_exclamation.png	感嘆符を視覚的に表現します。
emo_flower.png	花を視覚的に表現します。
emo_ghost.png	幽霊を視覚的に表現します。
emo_goldstar.png	ゴールドスターを視覚的に表現します。
emo_grin.png	ニヤツとした感情を視覚的に表現します。
emo_kiss.png	キスを視覚的に表現します。
emo_laughing.png	笑いの感情を視覚的に表現します。
emo_lifepreserver.png	救助を視覚的に表現します。
emo_lightning.png	雷雲と稲妻を視覚的に表現します。
emo_lovestruck.png	愛情を視覚的に表現します。
emo_martini.png	マティーニのグラスを視覚的に表現します。
emo_money.png	山積みのコインを視覚的に表現します。
emo_musicnote.png	音符を視覚的に表現します。
emo_nerd.png	おたくを視覚的に表現します。
emo_nottalking.png	そっぽを向いた様子を視覚的に表現します。
emo_phone.png	受話器を視覚的に表現します。
emo_present.png	贈り物を視覚的に表現します。
emo_psychoknife.png	ナイフを視覚的に表現します。
emo_rathole.png	怪しい様子を視覚的に表現します。
emo_sad.png	悲しい感情を視覚的に表現します。
emo_sick.png	病気を視覚的に表現します。
emo_sleep.png	眠たい様子を視覚的に表現します。

表 5-3 imbrand.jar の内容 (続き)

ファイル名	説明
emo_smiley.png	スマイルを視覚的に表現します。
emo_straightfaced.png	無表情な人物を視覚的に表現します。
emo_sunshining.png	太陽を視覚的に表現します。
emo_surprised.png	驚いた様子を視覚的に表現します。
emo_tongue-out.png	舌を出している人物を視覚的に表現します。
emo_violin.png	バイオリンを視覚的に表現します。
emo_whatever.png	無関心や軽視の様子を視覚的に表現します。
アプリケーションアイコン: Microsoft Windows	
im_app_icon_16.png	Microsoft Windows タイトルバーのアイコンです。
im_app_icon_24.png	Microsoft Windows タイトルバーのアイコンです。
tray_icon.ico	Microsoft Windows システムトレイのアイコンです。
アプリケーションアイコン: すべてのプラットフォーム	
logo_login_footer.png	「ログイン」ダイアログボックスの最下部に表示されるロゴです。
logo_register.png	「登録」ダイアログボックスに表示されるロゴです。
logo_sun.png	「ログイン」ダイアログボックスに表示される Sun のロゴです。
ツールバーアイコン	
tb_addcontacts.png	「連絡先を追加」ボタンのグラフィックです。
tb_alert.png	「アラートを送信」ボタンのグラフィックです。
tb_chat.png	「チャット」ボタンのグラフィックです。
tb_conf.png	「会議室を追加」ボタンのグラフィックです。
連絡先一覧アイコン	
cl_folder_closed.png	閉じられているフォルダを視覚的に表現します。
cl_folder_open.png	開かれているフォルダを視覚的に表現します。
Presence アイコン: 連絡先一覧	
cl_activeconf.png	連絡先一覧の会議室で利用中のものを示すアイコンです。
cl_away.png	連絡先一覧で不在ステータスを示すアイコンです。
cl_dnd.png	
cl_idle.png	連絡先一覧でアイドルステータスを示すアイコンです。

表 5-3 imbrand.jar の内容 (続き)

ファイル名	説明
cl_inactiveconf.png	連絡先一覧の会議室で未使用のものを示すアイコンです。
cl_offline.png	連絡先一覧でオフラインステータスを示すアイコンです。
cl_online.png	連絡先一覧でオンラインステータスを示すアイコンです。
cl_pending.png	連絡先一覧で保留中ステータスを示すアイコンです。
Presence アイコン : ステータスバー	
sb_away.png	ステータスバーで不在ステータスを示すアイコンです。
sb_dnd.png	
sb_idle.png	ステータスバーでアイドルステータスを示すアイコンです。
sb_offline.png	ステータスバーでオフラインステータスを示すアイコンです。
sb_online.png	ステータスバーでオンラインステータスを示すアイコンです。
背景設定ファイル	
bgstyles.properties	背景セットの拡張に使用する設定ファイルです。

表 5-3 imbrand.jar の内容 (続き)

ファイル名	説明
パレットの背景と背景スウォッチ	
bgplt_tex_blue.gif	bgplt_tex_weave_purple.gif
bgplt_tex_brown.gif	bgplt_tex_weave_ruby.gif
bgplt_tex_bubble_blue.gif	bgplt_tex_white.gif
bgplt_tex_bubble_brown.gif	bg_tex_bubble_blue.gif
bgplt_tex_bubble_green.gif	bg_tex_bubble_brown.gif
bgplt_tex_bubble_grey.gif	bg_tex_bubble_green.gif
bgplt_tex_bubble_orange.gif	bg_tex_bubble_grey.gif
bgplt_tex_bubble_purple.gif	bg_tex_bubble_orange.gif
bgplt_tex_bubble_ruby.gif	bg_tex_bubble_purple.gif
bgplt_tex_crackle_blue.gif	bg_tex_bubble_ruby.gif
bgplt_tex_crackle_green1.gif	bg_tex_crackle_blue.gif
bgplt_tex_crackle_grey.gif	bg_tex_crackle_green1.gif
bgplt_tex_crackle_olive.gif	bg_tex_crackle_grey.gif
bgplt_tex_crackle_orange.gif	bg_tex_crackle_olive.gif
bgplt_tex_crackle_purple.gif	bg_tex_crackle_orange.gif
bgplt_tex_crackle_ruby.gif	bg_tex_crackle_purple.gif
bgplt_tex_gradation_blue.gif	bg_tex_crackle_ruby.gif
bgplt_tex_gradation_brown.gif	bg_tex_gradation_blue.gif
bgplt_tex_gradation_green.gif	bg_tex_gradation_brown.gif
bgplt_tex_gradation_grey.gif	bg_tex_gradation_green.gif
bgplt_tex_gradation_orange.gif	bg_tex_gradation_grey.gif
bgplt_tex_gradation_purple.gif	bg_tex_gradation_orange.gif
bgplt_tex_gradation_ruby.gif	bg_tex_gradation_purple.gif
bgplt_tex_green.gif	bg_tex_gradation_ruby.gif
bgplt_tex_orange.gif	bg_tex_weave_blue.gif
bgplt_tex_pink.gif	bg_tex_weave_brown.gif
bgplt_tex_purple.gif	bg_tex_weave_green.gif
bgplt_tex_weave_blue.gif	bg_tex_weave_grey.gif
bgplt_tex_weave_brown.gif	bg_tex_weave_orange.gif
bgplt_tex_weave_green.gif	bg_tex_weave_purple.gif
bgplt_tex_weave_grey.gif	bg_tex_weave_ruby.gif
bgplt_tex_weave_orange.gif	

表 5-3 imbrand.jar の内容 (続き)

ファイル名	説明
サウンド	
alert.wav	アラートサウンドです。
alerttpc.wav	アラートサウンドです。
away.wav	ステータスを不在に変更する際のサウンドです。
receive.wav	メッセージを受信する際のサウンドです。
send.wav	メッセージを送信する際のサウンドです。
soundoff.wav	サウンドを無効にする際のサウンドです。
soundon.wav	サウンドを有効にする際のサウンドです。

Instant Messenger の外観のカスタマイズ

imbrand.jar ファイルには、Instant Messenger のルック & フィール (見た目と操作感) を制御するすべてのイメージとプロパティが含まれています。Instant Messenger の外観をカスタマイズするには、imbrand.jar ファイル内のイメージとプロパティを変更します。

▶ Instant Messenger の外観をカスタマイズする

1. imbrand.jar ファイルを作業用ディレクトリにコピーします。たとえば、次のように入力します。

```
cp im_svr_base/html/lang/imbrand.jar working_directory
```

2. 作業用ディレクトリに移動します。

```
cd working_directory
```

3. imbrand.jar ファイルを解凍します。

```
jar xf imbrand.jar
```

このコマンドを実行すると、ディレクトリツリーが作成され、そこにリソースファイルがコピーされます。jar ファイル内の個々のファイルを変更する場合、このディレクトリ構造を保持する必要があります。

また、imbrand.jar 内のファイルを個別に解凍し、指定したディレクトリ構造の中に格納することもできます。たとえば、brand.properties だけを解凍するには、次のコマンドを使用します。

```
jar xf imbrand.jar com/sun/im/desktop/brand/brand.properties
```

4. 変更された .gif、.wav、および .properties の各ファイルを imbrand.jar ファイルに反映します。

imbrand.jar 内のすべてのファイルを反映するには、次のコマンドを使用します。

```
jar cf imbrand.jar.
```

変更されたファイルを個別に imbrand.jar ファイルに反映するには、次のコマンドを使用します。

```
jar uf imbrand.jar com/sun/im/desktop/brand/<filename>
```

<filename> は imbrand.jar 内のファイル名です。たとえば、brand.properties などです。

5. imbrand.jar ファイルをリソースディレクトリにコピーします。たとえば、次のように入力します。

```
cp imbrand.jar im_svr_base/html/lang/
```

注 複数のロケールがサポートされている場合、Instant Messenger の外観のカスタマイズ手順を、それらのロケールごとに実行する必要があります。

ユーザー名表示のカスタマイズ

ツールヒントと検索結果におけるユーザー名表示をカスタマイズできます。

検索結果におけるユーザー名表示のカスタマイズ

まったく同じ氏名を持つエンドユーザーが 2 人いた場合、どちらのエンドユーザーを連絡先一覧に追加すればよいか、判断が付きません。Instant Messenger のユーザー検索結果内に、追加情報が表示されるようにカスタマイズすることが可能です。ユーザーの検索結果内に追加情報を表示するには、imbrand.jar ファイル内の brand.properties ファイルに、dialogs.searchresults.format 属性を追加する必要があります。なお、このファイルは次の場所にあります。

```
com/sun/im/desktop/brand/
```

imbrand.jar の変更方法の詳細については、「[アプリケーションのカスタマイズ \(Java Web Start\)](#)」を参照してください。

ユーザーの検索結果内に追加情報を表示するには、dialogs.searchresults.format 属性の値として、ほかの LDAP 属性を追加します。

LDAP 属性は次の形式で指定します。

```
${attr:attribute-name}
```

次の例は、`dialogs.searchresults.format` 属性に指定された LDAP 属性を示したものです。

```
dialogs.searchresults.format=${attr:title}
```

LDAP ユーザーエントリに含まれる任意の属性を使用するには、それらのカスタム属性のリストを、サーバー設定ファイル `iim.conf` 内に指定する必要があります。それらのカスタム属性は、属性 `iim_ldap.userattributes` の値として指定する必要があります。

カスタム属性リストが設定された `iim_ldap.userattributes` の例を、次に示します。

```
iim_ldap.userattributes=title,department,telephonenumber
```

ツールヒントにおけるユーザー名表示のカスタマイズ

Instant Messenger の連絡先ツールヒント内に、追加情報が表示されるようにカスタマイズすることが可能です。

たとえば、ある連絡先の上にマウスを置くと、その連絡先の電話番号が表示されるようにするには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
com/sun/im/client/
```

2. `brand.properties` ファイルを開きます。
3. そのファイル内に `contact.tooltip.format.html` 属性を追加します。
4. ファイルへの変更を保存します。
5. 次のディレクトリに移動します。

```
cd im_svr_base/html
```

6. `imbrand.jar` ファイルの HTML コード内で、`contact.tooltip.format.html` 属性を追加し、さらにその値として `telephonenumber` 属性を追加します。

```
contact.tooltip.format.html=mailto: ${attr:mail} tel:
${attr:telephonenumber}
```

`imbrand.jar` ファイルのカスタマイズ方法の詳細については、「[アプリケーションのカスタマイズ \(Java Web Start\)](#)」を参照してください。

クライアントユーザーによる連絡先の検索方法の変更

デフォルトでは、LDAP 属性の「commonname」または「cn」はユーザーの表示名を表し、ユーザーの検索属性として使用されます。代わりに「nickname」LDAP 属性を使用する場合は、iim.conf に次のパラメータを設定します。

```
iim_ldap.userdisplay=nickname
```

ユーザーが commonname か nickname のいずれかを使用して検索できるようにするには、iim_ldap.usergroupbynamefilter 属性を変更します。これで、ユーザーやグループの検索時に使用される LDAP 検索を指定します。検索時には、標準の LDAP フィルタ構文が使用されます。構文を変更すると、より複雑な検索を実行することができます。検索文字列の変更方法の詳細については、Directory Server のマニュアルを参照してください。

会議室とニュースチャネルの管理

Instant Messenger で実行可能な会議室とニュースチャネルに関する管理作業を次に示します。これらの作業の実行手順の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

- 会議室の管理
- ニュースチャネルの管理
- エンドユーザーへの会議室アクセスレベルの割り当て
- エンドユーザーへのニュースチャネルアクセスレベルの割り当て
- 会議室へのエンドユーザーの割り当て
- ニュースチャネルへのエンドユーザーの割り当て (登録)
- 新しい会議室の作成
- 新しいニュースチャネルの作成
- エンドユーザー設定の変更
- 会議室の削除
- ニュースチャネルからのメッセージの削除
- ニュースチャネルの削除
- ニュースチャネルへのメッセージの投稿
- 会議室からのエンドユーザーの削除

- ニュースチャネルからのエンドユーザーの削除

会議室およびニュースチャネルの作成権限のエンドユーザーへの付与

管理者は、エンドユーザーの会議室とニュースチャネルを作成できます。エンドユーザーでも、適切な権限を持っていれば、作成可能です。会議室とニュースチャネルの作成権限をエンドユーザーに付与するためのポリシーを追加する方法の詳細については、[101 ページの第 6 章「Instant Messaging ポリシーおよび Presence ポリシーの管理」](#)を参照してください。デフォルトで会議室またはニュースチャネルを作成するエンドユーザーは、会議室またはニュースチャネルの管理を可能にする管理アクセス権限を持っています。

Instant Messenger のプロキシ設定の変更

Instant Messaging のメッセージには、埋め込み URL が含まれることがあります。たとえば、`http://stocks.yahoo.com?id=sunw` などです。プロキシサーバーを使用する場合、そのような埋め込み URL を解決できるように、Java Web Start 設定内の Instant Messenger のプロキシ設定を変更する必要があります。

この問題が発生する可能性があるのは、組織内にファイアウォールが存在しており、クライアントホストからインターネットへの接続がプロキシサーバー経由で行われるようになっているが、Java Web Start のプロキシ設定が正しくない場合です。

Instant Messenger のプロキシ設定を変更する

Java Web Start は、システムまたはデフォルトのブラウザに照会することで、プロキシ設定を自動的に実行します。ただし、プロキシ設定が JavaScript ファイルによって実行される場合、Java Web Start はそれらの設定を自動的に行えません。

▶ プロキシ設定を手動で変更する

1. Java Web Start を起動します。
2. 「ファイル」メニューから「設定」を選択します。
3. 「設定」ダイアログボックスで「手動」オプションを選択します。
4. 次の詳細情報を入力します。

HTTP プロキシ: プロキシサーバーの名前または IP アドレスを入力します。

HTTP ポート : プロキシサーバーのポート番号を入力します。

プロキシなし : プロキシサーバーを経由せずに直接接続可能な任意のドメインの名前を入力します。ホスト名が複数ある場合は、コンマで区切ります。

5. 「了解」をクリックしてプロキシ設定を保存します。

Instant Messenger 公開機能セットの制御

管理者は、Instant Messenger の公開機能セットを制御できます。それには、アプレット記述子ファイル内の Instant Messaging アプレットパラメータを設定します。

表 5-4 に、アプレット記述子ファイル内の Instant Messenger アプレットパラメータを示します。また、この表には、これらのパラメータの説明とデフォルト値も含まれています。

表 5-4 Instant Messenger のアプレットパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
server	127.0.0.1	Instant Messaging Server のホストとポートです。
debug	FALSE	このパラメータが true に設定された場合、アプレットは Java コンソール上で実行されたすべてのタスクを記録します。
uid		このパラメータは SSO 時に使用されます。
token		このパラメータには SSO トークンが含まれます。自動ログインに使用されます。
secure	FALSE	SRA モードで実行するように、Instant Messenger に指示します。セキュリティインジケータを表示します。
usessl	FALSE	サーバーへの接続時に SSL を使用するように、Instant Messenger に指示します。
allow_alert_only	FALSE	連絡先一覧とニュースチャンネルをエンドユーザーに表示しないように、Instant Messenger に指示します。 このパラメータは、CHAT 様式と POPUP 様式で使用されます。
allow_file_transfer	TRUE	ファイルの添付と転送を可能にします。
enable_moderator	TRUE	true に設定された場合、モデレート会議機能が有効になります。

表 5-4 Instant Messenger のアプレットパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
messenger_bean		このパラメータには、使用するメッセージ Bean のリストが含まれます。複数のファクトリクラス名を入力でき、その際、各クラス名の間はコンマで区切ります。
domain	Null	このパラメータはマルチドメインの Sun Java System Access Manager の配備時に使用されます。このパラメータの値は、このエンドユーザーが所属する組織の論理ドメイン名にしてください。
gateway_url	Null	このパラメータには、ポータル SRA のゲートウェイコンポーネントの URL が含まれます。

エンドユーザーのシステム上に格納される Instant Messenger データ

Instant Messenger は、限られた量の自動ログイン関連情報を、エンドユーザーのシステム上にキャッシュします。この情報は次の場所に格納されます。

`home_directory/.sunmsgr`

`home_directory` は、エンドユーザーのホームディレクトリです。エンドユーザーのホームディレクトリは、Java システムプロパティ内の `user.home` パラメータから取得できます。

表 5-5 に、キャッシュデータが格納されるディレクトリおよびファイルを示します。また、この表には、それらのファイルおよびディレクトリの説明も含まれています。

表 5-5 キャッシュデータのディレクトリとファイル

ファイル名 / ディレクトリ名	種類	説明
<code>.sunmsgr/messenger.pro</code> <code>perties</code>	ファイル	自動ログインプロパティが格納されるファイルです。
<code>.sunmsgr/<user_domain></code>	ディレクトリ	特定の { ログイン名, ドメイン名 } の組み合わせに関するデータが格納されるディレクトリです。

表 5-5 キャッシュデータのディレクトリとファイル (続き)

ファイル名 / ディレクトリ名	種類	説明
<code>home_directory/sunmsggr/<user_domain>/messenger.properties</code>	ファイル	このファイルには、特定の <code><user_domain></code> に関する自動ログインオプションが格納されます。このファイルは使用されません。
<code>home_directory/sunmsggr/<user_domain>/messages/</code>	ディレクトリ	このディレクトリには、キャッシュメッセージが格納されます。このディレクトリは使用されません。

表 5-6 に、Instant Messaging の自動ログインプロパティを示します。また、この表には、これらのプロパティの説明とデフォルト値も含まれています。

表 5-6 自動ログインプロパティ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>client.password.encoded</code>	false	ユーザーパスワードを符号化するかどうかを決定します (SSO 使用時)。このパラメータの値が true の場合、符号化されたパスワードは <code>net.password</code> パラメータの値として格納されます。
<code>net.server</code>	127.0.0.1	Instant Messaging Server のホスト名とポートです。
<code>net.server.n</code> (数字 <i>n</i> は、複数のエントリを区別するために使用される)		セカンダリサーバーのホスト名とポート番号です。
<code>net.user</code>		デフォルトのユーザー ID です。
<code>net.password</code>		自動ログインを可能にする符号化されたユーザーパスワードです。

カレンダーのポップアップリマインダーの使用

Instant Messaging には Sun Java System Calendar Server が統合されているので、Instant Messenger ユーザーにカレンダーのイベントとタスクの両方を知らせる自動ポップアップリマインダーを利用できます。

この節では、次の事項について説明します。

- [ポップアップリマインダーの概要](#)
- [Instant Messaging ポップアップの設定](#)
- [カレンダーエージェントの管理](#)

ポップアップリマインダーの概要

この節では、次の事項について説明します。

- [94 ページの「ポップアップリマインダーの操作」](#)
- [94 ページの「ポップアップリマインダーのアーキテクチャフロー」](#)

ポップアップリマインダーの操作

カレンダー上のイベントとタスクが近づくと、ユーザーは Instant Messenger のポップアップリマインダーを受信できます。ポップアップリマインダーを有効にする条件は、次のとおりです。

- ポップアップ通知を許可するように、管理者が Calendar Server と Instant Messaging Server を設定する。
- エンドユーザーが Calendar Express または Communications Express の「オプション」タブで電子メールリマインダーを指定する。これにより、イベント通知システムにアラームが設定される。
- エンドユーザーが Instant Messenger でカレンダーリマインダーを有効にする。

ポップアップが有効に設定されている場合、イベントやタスクが近づくと、イベント通知システムに設定されたアラームに基づいて、Calendar Server は電子メール通知を送信し、Instant Messaging はポップアップリマインダーを表示します。

ポップアップリマインダーのアーキテクチャフロー

Instant Messaging でポップアップリマインダーが設定されると、次のアーキテクチャフローに従って動作します。

1. Instant Messaging JMS Subscriber が、イベント通知サービス (ENS) 内の Calendar Server のイベントと通知を受け取るよう登録される。

2. Calendar Server がイベントまたはタスクの通知を text/xml または text/calendar の形式で ENS に公開する。
3. Instant Messaging JMS Subscriber がカレンダーイベントまたはタスクの通知を受信し、text/calendar 形式でメッセージを生成する。
4. エンドユーザーがオンラインであれば、Instant Messaging Server がメッセージをカレンダーの所有者に送信する。
5. 受信者が有効な場合、Instant Messenger はメッセージに基づいて HTML ポップアップリマインダーをエンドユーザーのデスクトップに生成する。
受信者が無効な場合、Instant Messaging Server はメッセージを破棄します。

Instant Messaging ポップアップの設定

この節では、次の設定方法について説明します。

- [Instant Messaging Server を設定する](#)
- [Calendar Server を設定する](#)
- [Instant Messenger を設定する](#)

▶ Instant Messaging Server を設定する

1. 新しいパッケージ SUNwiimag をインストールします。
2. [表 5-7](#) に示される iim.conf ファイルのパラメータを編集します。

記載されるパラメータ値は、イベントとタスクの両方についてポップアップリマインダーを設定することを前提にしています。これらのパラメータが iim.conf ファイルに存在しない場合は、追加してください。

表 5-7 カレンダーポップアップを設定するための iim.conf パラメータ

パラメータ	説明および適切な値
JMS コンシューマセクション	
jms.consumers	アラームの名前です。次の値に設定します。 cal_reminder
jms.consumer.cal_reminder.destination	アラームの宛先です。ics.conf ファイル内の caldb.serveralarms.url 設定パラメータと同じ値であることが必要です。たとえば、次のようになります。 enp:///ics/customalarm

表 5-7 カレンダーポップアップを設定するための iim.conf パラメータ (続き)

パラメータ	説明および適切な値
<code>jms.consumer.cal_reminder.provider</code>	プロバイダの名前です。ens に設定します。JMS プロバイダセクションの <code>jms.providers</code> と同じ名前である必要があります。
<code>jms.consumer.cal_reminder.type</code>	設定するアラームの種類です。次の値に設定します。 topic
<code>jms.consumer.cal_reminder.param</code>	アラームパラメータです。引用符を含めて次のように値を設定します。 "eventtype=calendar.alarm"
<code>jms.consumer.cal_reminder.factory</code>	新しいカレンダーリマインダーメッセージのリスナーです。自身を登録します。次の値に設定します。 com.iplanet.im.server.JMSCalendarMessageListener
JMS プロバイダセクション	
<code>jms.providers</code>	プロバイダの名前です。値を ens に設定します。JMS コンシューマセクションの <code>jms.consumer.cal_reminder.provider</code> と同じ値である必要があります。
<code>jms.provider.ens.broker</code>	ENS のホスト名と、ENS が受信する要求を待機するポートの番号です。ics.conf ファイルのパラメータ <code>service.ens.port</code> で指定されるポートに設定します。デフォルト値は 57997 です。たとえば、次のようになります。 jms.provider.ens.broker=cal.example.com:57997
<code>jms.provider.ens.factory</code>	トピック接続オブジェクトの作成に使用されるファクトリクラスです。次の値に設定します。 com.iplanet.ens.jms.EnsTopicConnFactory
Instant Messaging の一般的なパラメータ	
<code>iim_agent.enable</code>	カレンダーエージェントを有効にします。引用符を含めて次のように値を設定します。 iim_agent.enable="true"
<code>iim_agent.agent-calendar.enable</code>	カレンダーエージェントを有効にするコンポーネントを読み込みます。引用符を含めて次のように値を設定します。 iim_agent.agent-calendar.enable="true"

表 5-7 カレンダーポップアップを設定するための iim.conf パラメータ (続き)

パラメータ	説明および適切な値
agent-calendar.jid	<p>カレンダーエージェントの JID です。この値を次のように設定します。</p> <p>agent-calendar.jid=calimbot.server.domain</p>
agent-calendar.password	<p>カレンダーエージェントのパスワードです。この値を次のように設定します。</p> <p>agent-calendar.password=password</p>
iim_server.components	<p>この値を次のように設定します。</p> <p>iim_server.components=agent-calendar</p>

3. imadmin を使用してカレンダーエージェントを起動します。

```
imadmin start agent-calendar
```

imadmin コマンド行ユーティリティは、次のディレクトリ内に格納されています。

```
im_svr_base/sbin
```

im_svr_base は Instant Messaging のインストール先ディレクトリです。

▶ Calendar Server を設定する

1. ics.conf パラメータが表 5-8 に記載される値に設定されていることを確認します。設定されていない場合、次の手順に従って値を確定します。
2. Calendar Server に、設定を変更できる権限を持つ管理者としてログインします。
3. /etc/opt/SUNWics5/cal/config ディレクトリに移動します。
4. 古い ics.conf ファイルをコピーし、別の名前で作成します。
5. 表 5-8 に示される値になるようにパラメータを編集します。

表 5-8 カレンダーポップアップを設定するための ics.conf パラメータ

パラメータ	説明およびデフォルト値
caldb.serveralarms	<p>カレンダーアラームをキューに入れられるようにします。デフォルト値は "yes" (有効) です。</p>
caldb.serveralarms.contenttype	<p>アラームの内容の出力形式です。デフォルト値は "text/xml" です。</p>
caldb.serveralarms.dispatch	<p>カレンダーアラームを発信できるようにします。デフォルト値は "yes" です。</p>

表 5-8 カレンダーポップアップを設定するための ics.conf パラメータ (続き)

パラメータ	説明およびデフォルト値
<code>caldb.serveralarms.dispatchtype</code>	発信するサーバーアラームの種類です。デフォルト値は "ens" です。
<code>caldb.serveralarms.url</code>	アラームの内容を取得するためのアラームの URL です。デフォルト値は、"enp:///ics/customalarm" です。

6. ics.conf という名前でファイルを保存します。

7. Calendar Server を再起動します。

```
cal_svr_base/SUNwics5/cal/sbin/start-cal
```

`cal_svr_base` は Sun Java System Calendar Server のインストール先ディレクトリです。

▶ Instant Messenger を設定する

1. Instant Messenger のメインウィンドウで、「ツール」メニューの「設定」を選択します。
2. 「設定」ウィンドウで、「アラート」タブをクリックします。
3. 「カレンダーリマインダーを表示」オプションをオンにします。
4. 「了解」をクリックします。

これで、ユーザーがオンラインのときに Instant Messenger からカレンダーポップアップを受け取ることができます。

カレンダーエージェントの管理

カレンダーエージェントは、Instant Messaging のコンポーネントで、カレンダーと Instant Messaging ユーザーにポップアップ機能を提供します。Instant Messaging に付属するツールを使用すると、カレンダーエージェントの起動、停止、再起動、およびステータス確認を行うことができます。また、ログファイルによってアクティビティを監視することもできます。カレンダーエージェントコンポーネントの管理の詳細については、[43 ページの「Instant Messaging コンポーネントの停止、起動、更新」](#)を参照してください。また、カレンダーエージェントのログについては、[47 ページの「ロギングの管理」](#)を参照してください。

リソースファイルの再配備

Sun Java™ System Application Server または Sun Java™ System Web Server を使用して、configure ユーティリティの実行後に、サイトの変更やカスタマイズの結果としてリソースファイルに変更を加えた場合、Web コンテナにファイルを再配備する必要があります。

▶ **Sun Java System Access Manager または Sun Java System Web Server にリソースファイルを再配備する**

- コマンド行から redeployApp プログラムを実行します。

```
im_svr_base/html/redeployApp
```

im_svr_base は Instant Messaging のインストール先ディレクトリです。

詳細については、Web コンテナのマニュアルを参照してください。

リソースファイルの再配備

Instant Messaging ポリシーおよび Presence ポリシーの管理

Instant Messaging は、チャット、会議、調査、Presence アクセスなど、さまざまな機能を提供します。ポリシーには、これらの機能に関する一連のアクセス制御権限を記述できます。一方、エンドユーザーおよびグループには、組織の要求に応じて特定のポリシーを割り当てることができます。

この章では、Instant Messaging Server の機能と権限情報に対するエンドユーザーと管理者のアクセスを管理するための、ポリシーの定義方法と使用方法について説明します。

- [プライバシー、セキュリティ、およびサイトポリシーの概要](#)
- [エンドユーザーと管理者の権限を制御する方法](#)
- [アクセス制御ファイルによるポリシー管理](#)
- [Sun Java System Access Manager によるポリシー管理](#)

プライバシー、セキュリティ、およびサイトポリシーの概要

Instant Messaging は、Instant Messaging 機能へのアクセスを制御する機能と、エンドユーザーのプライバシーを保護する機能を備えています。

サイトポリシー

サイトポリシーは、Instant Messaging の特定機能に対するエンドユーザーのアクセス権を指定します。指定できる権限は、次のとおりです。

- ほかのエンドユーザーの Presence ステータスにアクセスする権限

- ほかのエンドユーザーにアラートを送信する権限
- プロパティをサーバー上に保存する権限
- 会議室を作成および管理する権限
- ニュースチャンネルを作成および管理する権限

Instant Messaging 管理者は、すべての **Instant Messaging** 機能にアクセスできます。管理者は、すべての会議室とニュースチャンネルに対する管理アクセス権を持っており、任意のエンドユーザーの **Presence** 情報を表示でき、任意のエンドユーザーのプロパティ (連絡先一覧や **Instant Messenger** 設定など) を表示および変更できます。サイトポリシーの設定は、管理者権限にはまったく影響しません。

エンドユーザーにはデフォルトで、ほかのエンドユーザーの **Presence** ステータスにアクセスする権限、ほかのエンドユーザーにアラートを送信する権限、およびプロパティをサーバー上に保存する権限が与えられます。ほとんどの配備では、このデフォルト値は変更されません。このデフォルト値を変更する必要があるのは、**Instant Messaging** をポップアップ機能専用として使う場合です。

Instant Messaging をポップアップ機能専用として使う場合、エンドユーザーには **Presence** 情報、チャット機能、およびニュース機能に対するアクセス権限が付与されません。

注 管理者は、特定の権限をグローバルに設定できますが、それらの権限に対する例外を定義することも可能です。たとえば、管理者は、選択されたエンドユーザー、ロール、またはグループに対して、特定のデフォルト権限を拒否することができます。

サイトポリシーの設定方法の詳細については、[101 ページの「Instant Messaging ポリシーおよび Presence ポリシーの管理」](#)を参照してください。

会議室とニュースチャンネルのアクセス制御

会議室とニュースチャンネルに対してエンドユーザーが持つことのできるアクセス権限は、次のとおりです。

- **管理**: 完全なアクセス権限 (会議室またはニュースチャンネルに対するほかのエンドユーザーの権限を設定する権限も含む)
- **書き込み**: 会議室またはニュースチャンネルにコンテンツを追加する権限
- **読み取り**: 会議室またはニュースチャンネルのコンテンツを読み取る権限
- **なし**: アクセス権限なし

管理権限を持つエンドユーザーは、すべてのエンドユーザーに対するデフォルトの権限レベルを設定できます。また、そうしたエンドユーザーは、特定のエンドユーザーやグループに対してデフォルトとは異なるアクセスレベル権限を付与する例外規則を定義することもできます。

注 書き込み権限が設定されたエンドユーザーには、読み取り権限も付与されません。

ユーザーのプライバシー

エンドユーザーは、自身の Presence ステータスをほかのエンドユーザーに公開するかどうかを指定できます。デフォルトでは、すべてのエンドユーザーが、ほかのエンドユーザーの Presence 情報にアクセスできます。また、エンドユーザーは、特定のエンドユーザーやグループからのアクセスを拒否する例外を設定することもできます。

あるエンドユーザーが自身の Presence ステータスにはほかのエンドユーザーがアクセスするのを拒否した場合、ほかのエンドユーザーの連絡先一覧で、そのエンドユーザーのステータスはオフラインとして表示されます。Presence ステータスがオフラインになっているエンドユーザーには、アラートやチャットへの参加依頼を送信できません。

ユーザーのプライバシーを設定するには、Instant Messenger の「ユーザー設定」ウィンドウを使います。ユーザーのプライバシーを設定する方法の詳細については、Instant Messenger のオンラインヘルプを参照してください。

エンドユーザーと管理者の権限を制御する方法

Instant Messaging サービスに対する各種アクセス権限を、エンドユーザーに対して許可または制限することに関する要件は、Instant Messaging Server を使用するサイトごとにそれぞれ異なります。エンドユーザーと管理者の、Instant Messaging Server 機能と権限情報へのアクセスを制御する処理は、ポリシー管理と呼ばれます。ポリシーを管理するための方法は、2つあります。アクセス制御ファイルを使う方法と、Sun Java System Access Manager を使う方法です。

アクセス制御ファイルによるポリシー管理の概要

アクセス制御ファイルによるポリシー管理では、ニュースチャンネル管理、会議室管理、「ユーザー設定」ダイアログにおける設定変更、アラート送信の各領域における、エンドユーザーの権限を調整することができます。また、特定のエンドユーザーをシステム管理者として割り当てることもできます。

Sun Java System Access Manager によるポリシー管理の概要

Sun Java System Access Manager によるポリシー管理では、アクセス制御ファイルを使う方法と同じ権限を制御できますが、この方法ではさらに、アラートの受信、調査の送受信など、機能の制御をよりきめ細かく行えます。完全な一覧については、[111 ページの表 6-4](#) を参照してください。さらに、Sun Java System Access Manager によるポリシー管理では、権限の制御も、よりきめ細かく行えます。

ポリシーには、Instant Messaging ポリシーと Presence ポリシーの 2 種類があります。Instant Messaging ポリシーは、アラートの送受信、公開会議室やニュースチャンネルの管理、ファイルの送信といった、一般的な Instant Messaging 機能に対する権限を制御します。Presence ポリシーは、エンドユーザーが自身のオンラインステータスを変更する権限や、他人がオンライン情報または Presence 情報を表示するのを許可または拒否する権限を制御します。

ポリシー管理：使用する方法の選択

使用するポリシー管理方法を選択する際には、ポリシー情報の格納場所も同時に選択する必要があります。ポリシーの管理方法を選択するには、iim.conf ファイルを編集し、iim.policy.modules パラメータを設定します。Access Manager を使用する場合は identity を、アクセス制御ファイルを使用する場合は iim_ldap を、それぞれ設定します。なお、後者の方法は、デフォルトの方法でもあります。

LDAP 単独配備を使用する場合、つまり、Sun Java System Access Manager を使用しない場合は、アクセス制御ファイルによる方法を選択する必要があります。Sun Java System Access Manager と Instant Messaging Server を併用し、かつ Instant Messaging サービスおよび Presence サービスのコンポーネントがインストールされている場合、いずれかのポリシー管理方法を選択できます。ただし、Sun Java System Access Manager によるポリシー管理のほうが、より包括的な方法です。この方法の利点の 1 つは、すべてのエンドユーザー情報をディレクトリ内に格納できる点です。

使用するポリシー管理方法を設定する際の具体的な手順を、以下に示します。

1. `iim.conf` ファイルが格納されているディレクトリに移動します。
2. 任意のエディタを使って `iim.conf` ファイルを開きます。
3. `iim.policy.modules` パラメータを編集します。具体的には、次のいずれかを設定します。
 - `iim_ldap` (アクセス制御ファイルによる方法)
 - `identity` (Access Manager による方法)
4. `iim.userprops.store` パラメータを編集します。具体的には、次のいずれかを設定します。
 - `ldap` (ユーザープロパティをLDAPに格納する場合)
 - `file` (デフォルト、ユーザープロパティをファイル内に格納する場合)
5. 変更内容を保存します。
6. 設定を更新します。

ポリシー設定パラメータ

表 6-1 は、Instant Messaging 配備において Sun Java System Access Manager が果たす役割の拡大に伴い、`iim.conf` ファイル内で利用可能になったパラメータの一覧とその説明です。

表 6-1 `iim.conf` における Access Manager 関連のパラメータ

パラメータ名	使用法	値
<code>iim.policy.modules</code>	ポリシーを Sun Java System Access Manager に格納するかどうかを示します	<code>iim_ldap</code> (デフォルト) <code>identity</code>
<code>iim.userprops.store</code>	ユーザープロパティをユーザープロパティファイル、LDAP のいずれに格納するかを示します	<code>file</code> (デフォルト) <code>ldap</code>

注 現時点では、`iim.userprops.store` パラメータが重要になるのは、Presence サービスと Instant Messaging サービスのサービス定義がインストールされた場合だけです。

アクセス制御ファイルによるポリシー管理

アクセス制御ファイルを編集することで、次のエンドユーザー権限を制御できます。

- ほかのエンドユーザーの Presence ステータスにアクセスする権限
- ほかのエンドユーザーにアラートを送信する権限
- プロパティをサーバー上に保存する権限
- 新しい会議室を作成する権限
- 新しいニュースチャンネルを作成する権限

デフォルトでは、ほかのエンドユーザーの Presence ステータスにアクセスする権限、エンドユーザーにアラートを送信する権限、およびプロパティをサーバー上に保存する権限が、エンドユーザーに与えられます。ほとんどの配備では、このデフォルト値を変更する必要はありません。

注 管理者は、特定の権限をグローバルに設定できますが、それらの権限に対する例外を定義することも可能です。たとえば、管理者は、選択されたエンドユーザーまたはグループに対して、特定のデフォルト権限を拒否することができます。

アクセス制御ファイルの格納場所は、*im_cfg_base/acls* です。*im_cfg_base* は設定ディレクトリです。設定ディレクトリのデフォルトの場所については、[35 ページの表 3-1](#) を参照してください。

[表 6-2](#) は、Instant Messaging のグローバルアクセス制御ファイルとそれらのファイルがエンドユーザーに付与する権限を、一覧にまとめたものです。

表 6-2 アクセス制御ファイル

アクセス制御ファイル	権限
<i>sysSaveUserSettings.acl</i>	自身の設定を変更できる (できない) ユーザーを定義します。この権限を持たないユーザーは、連絡先の追加や会議室の作成などを行うことができません。
<i>sysTopicsAdd.acl</i>	ニュースチャンネルを作成できる (できない) ユーザーを定義します。
<i>sysRoomsAdd.acl</i>	会議室を作成できる (できない) ユーザーを定義します。
<i>sysSendAlerts.acl</i>	アラートを送信できる (できない) ユーザーを定義します。

表 6-2 アクセス制御ファイル (続き)

アクセス制御ファイル	権限
sysWatch.acl	ほかのエンドユーザーの変更を監視できる (できない) ユーザーを定義します。この権限を持たないエンドユーザーには、Instant Messenger のウィンドウが表示され、「会議室とニュースチャンネルへの登録と登録解除」だけが許可されます。
sysAdmin.acl	管理者専用のファイルです。このファイルでは、Instant Messaging のすべての機能、すべてのエンドユーザーに対する管理権限を設定します。この権限はほかのすべての権限よりも優先されます。また、この権限は、すべての会議室およびニュースチャンネルに対する管理アクセス権に加え、すべてのエンドユーザーの Presence 情報、設定、およびプロパティに対する管理アクセス権を管理者に与えます。

アクセス制御ファイルの形式

アクセス制御ファイルには、権限を定義する一連のエントリが含まれます。各エントリは、次のいずれかのタグで始まります。

- d: - デフォルト
- u: - ユーザー
- g: - グループ

注 d: タグで始まるエントリは、アクセス制御ファイルの最後のエントリでなければなりません。d: タグで始まるエントリのあとに存在するエントリは、すべてサーバーによって無視されます。d: タグの値が true の場合、その他の行はすべて無視されます。アクセス制御ファイル内で d: タグを true に設定した場合、特定のエンドユーザーがその権限を持つことを選択的に拒否することはできません。

タグのあとにはコロン (:) を付けます。デフォルトタグでは、そのあとに true、false のいずれかを指定します。

エンドユーザータグ、グループタグでは、その後にエンドユーザー名、グループ名をそれぞれ指定します。

複数のエンドユーザーまたはグループを指定するには、それらの各エンドユーザー (u)、各グループ (g) をそれぞれ別々の行に記述します。

デフォルトエントリに true が設定された場合、ファイル内のその他のすべてのエントリは無視されます。デフォルトエントリに false が設定された場合、ファイル内に指定されたエンドユーザーとグループのみが、その特定の権限を持つことになります。

新規インストール時の、ACL ファイル内の d: タグ (デフォルトタグ) エントリを、次に示します。

- sysAdmin.acl - d:false が含まれる
- sysTopicsAdd.acl - d:false が含まれる
- sysRoomsAdd.acl - d:false が含まれる
- sysSaveUserSettings.acl - d:true が含まれる
- sysSendAlerts.acl - d:true が含まれる
- sysWatch.acl - d:true が含まれる

注 すべてのアクセス制御ファイルの形式、さらにはその存在自体が、今後の製品リリースで変更される可能性があります。

アクセス制御ファイルのサンプル

この節では、権限が設定されたアクセス制御ファイル (sysTopicsAdd.acl ファイル) のサンプルを示します。

sysTopicsAdd.acl ファイル

次の例では、sysTopicsAdd.acl ファイルのデフォルトの d: タグエントリは false です。このため、ニュースチャンネルを追加および削除する権限は、そのデフォルトよりも前に記述されたエンドユーザーとグループ、すなわち、user1、user2、および sales グループに対して付与されます。

```
# Example sysTopicsAdd.acl file
u:user1
u:user2
g:cn=sales,ou=groups,o=siroe
d:False
```

エンドユーザーの権限の変更

▶ エンドユーザーの権限を変更する

1. `config/acls` ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config/acls
```

2. 目的のアクセス制御ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi sysTopicsAdd.acl
```

3. 変更を保存します。
4. エンドユーザーが Instant Messenger ウィンドウを更新しない限り、その変更は表示に反映されません。

Sun Java System Access Manager によるポリシー管理

Sun Java System Access Manager の Instant Messaging サービスと Presence サービスを使うと、エンドユーザーと管理者の権限を別の方法で制御できます。各サービスには、動的属性、ユーザー属性、ポリシー属性の 3 種類があります。ポリシー属性は、権限を設定するための属性です。

Access Manager 内に作成された特定のポリシーに、ほかのユーザーから調査メッセージを受信する権限などや、Instant Messaging のさまざまな機能に対する権限、そして管理者およびエンドユーザーに許可または拒否する規則を追加する際に、ポリシー属性はそれらの規則の一部となります。

Instant Messaging Server を Sun Java System Access Manager とともにインストールすると、サンプルのポリシーとロールがいくつか作成されます。ポリシーとロールの詳細については、『Sun Java System Access Manager Getting Started Guide』と『Sun Java System Access Manager 管理ガイド』を参照してください。

さらに、サンプルのポリシーに満足できなかった場合、新しいポリシーを作成し、それらをサイトの要求に応じて特定のロール、グループ、組織、またはエンドユーザーに割り当てることも可能です。

Instant Messaging サービスまたは Presence サービスがエンドユーザーに割り当てられると、それらのエンドユーザーは、関連する動的属性とユーザー属性を取得します。動的属性は、Sun Java System Access Manager で設定された特定のロールまたは組織に割り当てることができます。

特定のロールをエンドユーザーに割り当てたり、組織内でエンドユーザーを作成したりすると、関連する動的属性がそのエンドユーザーの特性の一部となります。ユーザー属性は、各エンドユーザーに直接割り当てます。ユーザー属性は、ロールや組織から継承されるわけではないため、通常はエンドユーザーごとに異なります。

エンドユーザーはログイン時に、該当するすべての属性を取得します。なお、取得される属性は、そのユーザーに割り当てられているロールの種類やポリシーの適用方法に応じて異なります。

動的、ユーザー、ポリシーの各属性がエンドユーザーに関連付けられるのは、Presence サービスと Instant Messaging サービスがそれらのエンドユーザーに割り当てられた後です。

Instant Messaging サービス属性

表 6-3 は、各サービスに含まれるポリシー属性、動的属性、ユーザー属性を一覧にまとめたものです。

表 6-3 Instant Messaging 用の Access Manager 属性

サービス	ポリシー属性	動的属性	ユーザー属性
sunIM	sunIMAllowChat	sunIMProperties	sunIMUserProperties
	sunIMAllowChatInvite	sunIMRoster	sunIMUserRoster
	sunIMAllowForumAccess	sunIMConferenceRoster	sunIMUserConferenceRoster
	sunIMAllowForumManage	sunIMNewsRoster	sunIMUserNewsRoster
	sunIMAllowForumModerate	sunIMPrivateSettings	sunIMUserPrivateSettings
	sunIMAllowAlertsAccess		
	sunIMAllowAlertsSend		
	sunIMAllowNewsAccess		
	sunIMAllowNewsManage		
	sunIMAllowFileTransfer		
	sunIMAllowContactListManage		
	sunIMAllowUserSettings		
	sunIMAllowPollingAccess		
	sunIMAllowPollingSend		

表 6-3 Instant Messaging 用の Access Manager 属性 (続き)

サービス	ポリシー属性	動的属性	ユーザー属性
sunPresence	sunPresenceAllowAccess	sunPresenceDevices	sunPresenceEntityDevices
	sunPresenceAllowPublish	sunPresencePrivacy	sunPresenceUserPrivacy
	sunPresenceAllowManage		

Access Manager 管理コンソールでは、上表の各属性に対応するラベルが表示されます。次の 2 つの表は、属性、対応するラベル、簡単な説明を一覧にまとめたものです。表 6-4 はポリシー属性の一覧とその説明、表 6-5 は動的属性およびユーザー属性の一覧とその説明です。

表 6-4 Instant Messaging 用の Access Manager ポリシー属性

ポリシー属性	管理コンソールのラベル	属性の説明
sunIMAllowChat	チャット	エンドユーザーは、チャットルームへの参加依頼を受信できるほか、通常のチャット機能にアクセスできます
sunIMAllowChatInvite	チャットに参加依頼	エンドユーザーは、チャットへの参加依頼をほかのユーザーに送信できます
sunIMAllowForumAccess	会議室に参加	Instant Messenger に「会議室」タブが表示され、エンドユーザーは会議室に参加できるようになります
sunIMAllowForumManage	会議室の管理	エンドユーザーは、会議室の作成、削除、および管理を行えます
sunIMAllowForumModerate	会議室のモデレート	エンドユーザーは会議のモデレータになります
sunIMAllowAlertsAccess	アラートの受信	エンドユーザーは、ほかのユーザーからのアラートを受信できます
sunIMAllowAlertsSend	アラートの送信	エンドユーザーは、ほかのユーザーにアラートを送信できます
sunIMAllowNewsAccess	ニュースに加入	Instant Messenger に「ニュース」ボタンが表示され、エンドユーザーはこのボタンを使うと、ニュースメッセージを送受信するためにニュースチャンネルを一覧表示できます
sunIMAllowNewsManage	ニュースチャンネルの管理	エンドユーザーはニュースチャンネルを管理できます (ニュースチャンネルの作成、削除、権限割り当てを行える)

表 6-4 Instant Messaging 用の Access Manager ポリシー属性 (続き)

ポリシー属性	管理コンソールのラベル	属性の説明
sunIMAllowFileTransfer	ファイルの交換	エンドユーザーは、アラート、チャット、ニュースの各メッセージに添付ファイルを追加できます
sunIMAllowContactListManage	連絡先の管理	エンドユーザーは自身の連絡先一覧を管理できます (ユーザーまたはグループの一覧への追加、一覧からの削除、一覧内のフォルダ名の変更を行える)
sunIMAllowUserSettings	Messenger 設定	Instant Messenger に「設定」ボタンが表示され、エンドユーザーはこのボタンを使うと、自身の Instant Messenger 設定を変更できます
sunIMAllowPollingAccess	調査の受信	エンドユーザーは、ほかのユーザーから調査メッセージを受信し、それらの調査に回答できます
sunIMAllowPollingSend	調査の送信	Instant Messenger に「調査」ボタンが表示され、エンドユーザーはこのボタンを使うと、調査メッセージをほかのユーザーに送信し、その回答を受信できます
sunPresenceAllowAccess	他人の Presence 情報にアクセス	エンドユーザーは、ほかのユーザーの Presence ステータスを監視できます。連絡先一覧には、連絡先が表示されるだけでなく、それらの連絡先の Presence ステータスの変更が反映されます (ステータスアイコンが変化する)
sunPresenceAllowPublish	Presence 情報の公開	エンドユーザーは、他人が監視する自分のステータス (オンライン、オフライン、取り込み中など) をクリックして選択できます
sunPresenceAllowManage	Presence 情報へのアクセスの管理	Instant Messenger の「設定」に「アクセス権」タブが表示され、エンドユーザーは、自身のデフォルトの Presence アクセス、Presence 許可リスト、Presence 拒否リストを設定できます

属性の直接変更

エンドユーザーは、Sun Java System Access Manager の管理コンソールにログインし、Instant Messaging サービスと Presence サービスの各属性値を参照できます。属性が変更可能として定義されていた場合、エンドユーザーはそれらの属性を変更できます。ただし、デフォルトでは、Instant Messaging サービス内の属性はすべて変更不可能になっており、エンドユーザーにそれらの変更を許可することも、あまりお勧めできません。とはいえ、システム管理の観点から、属性を直接変更したほうが便利なこともあります。

たとえば、「参加する会議室」など、いくつかのシステム属性ではロールの影響は存在しないため、システム管理者は、それらの属性の値を変更する際に、ほかのエンドユーザー（の会議名簿など）からそれらの属性をコピーしたり、それらの属性を直接変更したりします。これらの属性の一覧を、113 ページの表 6-5 に示します。

表 6-5 を見ると、ユーザー属性は、エンドユーザーが Sun Java System Access Manager 管理コンソールを使って設定できます。動的属性は、管理者によって設定されます。動的属性に設定された値は、対応するユーザー属性の値を上書きするか、その値とマージされます。

対応する動的属性とユーザー属性の性質により、競合もしくは補完し合う情報がどのように解決されるかが決まります。たとえば、「参加する会議室」の 2 つのソース（動的属性およびユーザー属性）は互いに補完し合う関係にあるため、両者の情報はマージされます。いずれの属性も他方を上書きしません。

表 6-5 Instant Messaging 用の Access Manager ユーザー属性と動的属性

管理コンソールのラベル	ユーザー属性	動的属性	属性の説明	競合の解決
Messenger 設定	sunIMUserProperties	sunIMProperties	Instant Messenger のすべてのプロパティが含まれます。ファイルを使用したユーザープロパティ機構における user.properties ファイルに対応しています	マージ: ただし、あるプロパティの値がユーザー属性、動的属性の両方に存在していた場合、動的属性の値が使用されます。

表 6-5 Instant Messaging 用の Access Manager ユーザー属性と動的属性 (続き)

管理コンソールのラベル	ユーザー属性	動的属性	属性の説明	競合の解決
登録	sunIMUserRoster	sunIMRoster	登録情報が含まれます (ユーザーの連絡先一覧)	マージ: Jabber 識別子がユーザー属性と動的属性の両方に存在していた場合、ニックネームがユーザー属性から取得され、グループはユーザー属性と動的属性の両方のグループを結合したものとなり、登録値はユーザー属性と動的属性の値のうち最も大きい値が採用されます。
参加する会議室	sunIMUserConferenceRoster	sunIMConferenceRoster	会議室の参加情報が含まれます	マージ: 動的属性とユーザー属性の登録情報がマージされ、重複は削除されます。
ニュースチャンネルへ登録	sunIMUserNewsRoster	sunIMNewsRoster	ニュースチャンネルの登録情報が含まれます	マージ: 動的属性とユーザー属性の登録情報がマージされ、重複は削除されます。
Presence エージェント	sunPresenceEntityDevices	sunPresenceDevices	このリリースでは未使用です (将来使用予定)	動的属性の情報が使用されません。
プライバシー	sunPresenceUserPrivacy	sunPresencePrivacy	Instant Messenger におけるプライバシー設定に対応しています	マージ: 競合が発生した場合は動的値が使用されます。

表 6-5 Instant Messaging 用の Access Manager ユーザー属性と動的属性 (続き)

管理コンソールのラベル	ユーザー属性	動的属性	属性の説明	競合の解決
Instant Messenger の設定	sunIMUserPrivateSettings	sunIMPrivateSettings	Messenger 設定に設定されていない非公開の設定が保存されます	マージ

Instant Messaging ポリシーと Presence ポリシーの事前定義サンプル

表 6-6 は、Instant Messaging サービスコンポーネントのインストール時に Sun Java System Access Manager 内に作成される、7つのサンプルポリシーと7つのサンプルロール、およびその説明を一覧にまとめたものです。各エンドユーザーには、付与すべきアクセス権限に応じたロールを追加できます。

典型的なサイトでは、ロール「IM Regular User」(デフォルトの Instant Messaging アクセス権と Presence アクセス権を取得するロール)を、Instant Messaging ポリシー管理の責務を負わない、Instant Messenger を単に使用するだけのエンドユーザーに割り当てます。また、その同じサイトで、ロール「IM Administrator」(Instant Messaging サービスと Presence サービスの管理権限が関連付けられたロール)を、Instant Messaging ポリシー管理に対して完全な責務を負うエンドユーザーに割り当てます。

表 6-7 は、ポリシー属性のデフォルトの権限割り当て一覧です。あるアクションがある規則内で選択されていない場合、この表の値「許可」や「許可しない」は意味を持ちません。というのも、そのポリシーはその属性に影響しないからです。

表 6-6 Sun Java System Access Manager のデフォルトのポリシーとロール

ポリシー	このポリシーが適用されるロール	このポリシーが適用されるサービス	ポリシーの説明
Default Instant Messaging and presence access	IM Regular User	sunIM、sunPresence	一般的な Instant Messaging エンドユーザーがデフォルトで備えるべきアクセス権です。
Ability to administer Instant Messaging and Presence Service	IM Administrator	sunIM、sunPresence	Instant Messaging 管理者が備えるアクセス権です。Instant Messaging のすべての機能にアクセスできます。
Ability to manage Instant Messaging news channels	IM News Administrator	sunIM	エンドユーザーは、ニュースチャンネルの管理 (作成や削除など) を行えます。

表 6-6 Sun Java System Access Manager のデフォルトのポリシーとロール (続き)

ポリシー	このポリシーが適用されるロール	このポリシーが適用されるサービス	ポリシーの説明
Ability to manage Instant Messaging conference rooms	IM Conference Rooms Administrator	sunIM	エンドユーザーは、会議室の管理 (作成や削除など) を行えます。
Ability to change own Instant Messaging user settings	IM Allow User Settings Role	sunIM	エンドユーザーは、Instant Messenger の「設定」ボタンをクリックして設定を編集できます。
Ability to send Instant Messaging alerts	IM Allow Send Alerts Role	sunIM	エンドユーザーは、Instant Messenger でアラートを送信できます。
Ability to watch changes on other Instant Messaging end users	IM Allow Watch Changes Role	sunIM	エンドユーザーは、ほかの Instant Messaging エンドユーザーの Presence ステータスにアクセスできます。

表 6-7 デフォルトのポリシー割り当て

属性	ポリシー						
	デフォルトのアクセス	Instant Messaging と Presence サービスの管理	ニュースチャンネルの管理	会議室の管理	自身のエンドユーザー設定の変更	アラートの送信	ほかのユーザーの変更の監視
sunIMAllowChat	許可	許可					
sunIMAllowChatInvite	許可	許可					
sunIMAllowForumAccess	許可	許可		許可			
sunIMAllowForumManage	許可しない	許可		許可			
sunIMAllowForumModerate	許可しない	許可		許可			
sunIMAllowAlertsAccess	許可	許可				許可	
sunIMAllowAlertsSend	許可	許可				許可	
sunIMAllowNewsAccess	許可	許可	許可				
sunIMAllowNewsManage	許可しない	許可	許可				
sunIMAllowFileTransfer	許可	許可					
sunIMAllowContactListManage	許可	許可					

表 6-7 デフォルトのポリシー割り当て (続き)

属性	ポリシー						
	デフォルトのアクセス	Instant Messaging と Presence サービスの管理	ニュースチャンネルの管理	会議室の管理	自身のエンドユーザー設定の変更	アラートの送信	ほかのユーザーの変更の監視
sunIMAllowUserSettings	許可	許可			許可		
sunIMAllowPollingAccess	許可	許可					
sunIMAllowPollingSend	許可	許可					
sunPresenceAllowManage	許可	許可					
sunPresenceAllowAccess	許可	許可					許可
sunPresenceAllowPublish	許可	許可					

新しい Instant Messaging ポリシーの作成

サイトの特定の要求に応じて、新しいポリシーを作成できます。

▶ 新しいポリシーを作成する

1. Access Manager の管理コンソール (<http://hostname:port/amconsole>、たとえば <http://imserver.company22.example.com:80/amconsole>) にログインします。
2. 「アイデンティティ管理」タブが選択された状態で、ナビゲーション区画 (左下のフレーム) にある「表示」ドロップダウンリストから「ポリシー」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。データ区画 (右下のフレーム) に「新規ポリシー」ページが表示されます。
4. 「ポリシータイプ」で「標準」を選択します。
5. 「名前」フィールドにポリシーの説明 (「Ability to Perform IM Task」など) を入力します。
6. 「了解」をクリックします。ナビゲーション区画のポリシー一覧に新しいポリシーの名前が表示され、データ区画のページが、新しいポリシーに対する「編集」ページに変わります。
7. 「編集」ページの「表示」ドロップダウンリストから「ルール」を選択します。「編集」ページ内に「ルール名、サービス、リソース」パネルが表示されます。
8. 「新規」をクリックします。「ルールを追加」ページが表示されます。

9. 適用するサービス (「Instant Messaging サービス」、「Presence サービス」のいずれか) を選択します。

各サービスでは、エンドユーザーが特定のアクションを実行するのを許可または拒否できます。たとえば、「チャット」は Instant Messaging サービスに固有のアクションであり、「他人の Presence にアクセス」は Presence サービスに固有のアクションです。
10. 「ルール名」フィールドに規則の説明 (「Rule 1」など) を入力します。
11. 「リソース名」に適切な値 (IMResource、PresenceResource のいずれか) を入力します。
 - Instant Messaging サービスの場合は IMResource
 - Presence サービスの場合は PresenceResource
12. 「アクション」で適用するアクションを選択します。
13. 「値」で各アクションの値 (「許可する」、「許可しない」のいずれか) を選択します。
14. 「作成」をクリックします。この規則案が、そのポリシーの保存規則一覧に表示されます。
15. 「保存」をクリックします。この規則案が保存規則になります。
16. そのポリシーに適用するすべての規則を作成し終わるまで、手順 8 ~ 15 を繰り返します。新しい規則を作成するたびに、「保存」をクリックして変更内容をポリシーに保存してください。

ルール、グループ、組織、ユーザーへのポリシーの割り当て

ルール、グループ、組織、またはユーザーには、ポリシー (デフォルトの Instant Messaging ポリシーまたは Instant Messaging のインストール後に作成された Instant Messaging ポリシー) を割り当てることができます。

▶ ポリシーを割り当てる

1. Access Manager の管理コンソール (<http://hostname:port/amconsole>、たとえば <http://imserver.company22.example.com:80/amconsole>) にログインします。
2. 「アイデンティティ管理」タブが選択された状態で、ナビゲーション区画 (左下のフレーム) にある「表示」ドロップダウンリストから「ポリシー」を選択します。
3. 割り当てるポリシーの名前の横にある矢印をクリックします。そのポリシーに対する「編集」ページが、データ区画 (右下のフレーム) に表示されます。

4. 「編集」ページの「表示」ドロップダウンリストから「サブジェクト」を選択します。
5. 「追加」をクリックします。「サブジェクトを追加」ページが表示されます。このページには、次の利用可能なサブジェクトタイプが一覧表示されます。
 - Access Manager ロール
 - LDAP グループ
 - LDAP ロール
 - LDAP ユーザー
 - 組織
6. このポリシーに合うサブジェクトタイプ(「組織」など)を選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「名前」フィールドで、サブジェクトの説明を入力します。
9. 必要であれば、「排他的」チェックボックスをオンにします。

「排他的」チェックボックスは、デフォルトでオフになっています。これは、このサブジェクトのすべてのメンバーにポリシーが適用されることを意味しています。

「排他的」チェックボックスをオンにすると、このサブジェクトのメンバー以外のすべてのユーザーにポリシーが適用されます。
10. 「利用可能」フィールドで、このサブジェクトに追加するエントリを検索します。
 - a. 探したいエントリの検索条件を入力します。デフォルトの検索条件は「*」です。この場合、そのサブジェクトタイプのすべてのサブジェクトが表示されます。
 - b. 「検索」をクリックします。
 - c. 「利用可能」テキストボックス内で、「選択」テキストボックスに追加したいエントリを強調表示します。
 - d. 「追加」、「すべて追加」のいずれか適切なほうをクリックします。
 - e. 必要なすべての名前を「選択」テキストボックスに追加し終わるまで、手順 a ~ d を繰り返します。
11. 「作成」をクリックします。このサブジェクト案が、そのポリシーの保存サブジェクト一覧に表示されます。
12. 「保存」をクリックします。このサブジェクト案が保存サブジェクトになります。
13. このポリシーに追加するすべてのサブジェクトを作成し終わるまで、手順 5 ~ 12 を繰り返します。新しいサブジェクトを作成するたびに、「保存」をクリックして変更内容をポリシーに保存してください。

Access Manager による新しいサブ組織の作成

Sun Java System Access Manager のサブ組織作成機能を使うと、組織的に独立した複数のユーザー群を、Instant Messaging Server 内に作成することができます。各サブ組織は、個別の DNS ドメインにマッピングすることが可能です。サブ組織内のエンドユーザーは、ほかのサブ組織内のエンドユーザーから完全に隔離されます。Instant Messaging の新しいサブ組織を作成するための最小限の手順を、以下に示します。

▶ 新しいサブ組織を作成する

1. Access Manager の管理コンソール (<http://hostname:port/amconsole>、たとえば <http://imserver.company22.example.com:80/amconsole>) にログインします。
2. 新しい組織を作成します。
 - a. 「アイデンティティ管理」タブが選択された状態で、ナビゲーション区画 (左下のフレーム) にある「表示」ドロップダウンリストから「組織」を選択します。
 - b. 「新規」をクリックします。データ区画 (右下のフレーム) に「新規組織」ページが表示されます。
 - c. 次の情報を適切なフィールドに入力します。
 - サブ組織名 (sub1 など)
 - ドメイン名 (sub1.company22.example.com など)
 - d. 「作成」をクリックします。
3. 新しく作成されたサブ組織のサービスを登録します。
 - a. ナビゲーション区画で、新しいサブ組織の名前 (sub1 など) をクリックします (ここでクリックするのは名前であり、その右側にあるプロパティ矢印ではない)。
 - b. ナビゲーション区画の「表示」ドロップダウンリストから「サービス」を選択します。
 - c. 「登録」をクリックします。「サービスを登録」ページがデータ区画に表示されます。
 - d. 「認証」見出しの下にある次のサービスを選択します。
 - コア
 - LDAP
 - e. Instant Messaging サービス」見出しの下にある次のサービスを選択します。
 - Instant Messaging サービス
 - Presence サービス

- f. 「登録」をクリックします。このサブ組織用に新しく選択されたサービスが、ナビゲーション区画に表示されます。
4. 新しく選択されたサービスのサービステンプレートを作成します。
 - a. ナビゲーション区画で、特定のサービスのプロパティ矢印をクリックします。まずは、「コア」サービスから始めます。
データ区画に「サービステンプレートの作成」ページが表示されます。
 - b. データ区画で「作成」をクリックします。すると、「サービステンプレートの作成」ページに代わって、選択したサービスのテンプレートオプションを含むページが表示されます。
テンプレートオプションを変更しない場合でも、個々のサービスごとに「作成」をクリックする必要があります。
 - c. 以下の手順に従って、各サービスのサービステンプレートのオプションを変更します。
 - I. **コア** : 通常の場合、オプションを変更する必要はありません。そのまま**手順 d**に進んでください。
 - II. **LDAP** : 新しいサブ組織のプレフィックスを、「ユーザー検索の開始 DN」フィールドに追加します。プレフィックス追加後の最終的な DN の形式は、次のようになります。
`o=sub1,dc=company22,dc=example,dc=com`
「root ユーザーバインドパスワード」、「root ユーザーバインドパスワード (確認)」の各フィールドに、LDAP パスワードを入力します。
手順 dに進んでください。
 - III. **Instant Messaging サービス** : 通常の場合、オプションを変更する必要はありません。そのまま**手順 d**に進んでください。
 - d. 「保存」をクリックします。
 - e. すべてのサービスのサービステンプレートを作成し終わるまで、手順 a ~ d を繰り返します。

新しいサブ組織へのエンドユーザーの追加

サブ組織内に新しいエンドユーザーを作成し終わったら、次にそれらのエンドユーザーにロールを割り当てる必要があります。ロールは親組織から継承できます。その方法を以下で説明します。

▶ エンドユーザーを新しいサブ組織に追加する

1. 親組織に移動し、「表示」ドロップダウンリストから「ロール」を選択します。具体的な手順は、次のとおりです。
 - a. Access Manager の管理コンソール (<http://hostname:port/amconsole>、たとえば <http://imserver.company22.example.com:80/amconsole>) にログインします。
 - b. 「アイデンティティ管理」タブが選択された状態で、ナビゲーション区画 (左下のフレーム) にある「表示」ドロップダウンリストから「ロール」を選択します。
2. 割り当てるロールの右側にあるプロパティ矢印をクリックします。そのロールに対するページが、データ区画 (右下のフレーム) に表示されます。
3. データ区画の「表示」ドロップダウンリストから「ユーザー」を選択します。
4. 「追加」をクリックします。「ユーザーを追加」ページが表示されます。
5. ユーザーを特定するための検索パターンを入力します。たとえば、「UserId」フィールドにアスタリスク「*」を入力すると、すべてのユーザーが一覧表示されます。
6. 「フィルタ」をクリックします。「ユーザーを選択」ページが表示されます。
7. 「ユーザーを選択」ページで親パスを表示します。
 - a. 「親パスを表示」チェックボックスをオンにします。
 - b. 「更新」をクリックします。
8. このロールを割り当てるユーザーを選択します。
9. 「送信」をクリックします。

Instant Messaging アーカイブの管理

この章では、Instant Messaging アーカイブの管理方法と設定方法について説明します。

この章に含まれる節は、次のとおりです。

- [Instant Messaging アーカイブの概要](#)
- [インスタントメッセージのアーカイブ](#)
- [アーカイブプロバイダの有効化](#)
- [アーカイブプロバイダの設定](#)
- [Portal Server 検索データベース内のアーカイブデータの管理](#)
- [Instant Messenger アーカイブ制御の有効化](#)
- [アーカイブデータの表示の変更](#)
- [アーカイブプロバイダの配備シナリオ例](#)

Instant Messaging アーカイブの概要

Instant Messaging アーカイブは、インスタントメッセージを捕捉し、それらのメッセージを Portal Server 検索データベース内にアーカイブします。これにより、エンドユーザーは、Portal Server デスクトップの検索ページからクエリを実行し、それらのアーカイブメッセージを取得できるようになります。

Instant Messaging アーカイブには、次のコンポーネントが含まれています。

アーカイブ / 取得コンポーネント : Portal Server 検索コンポーネントは「アーカイブ / 取得コンポーネント」とも呼ばれ、アーカイブインスタントメッセージの格納場所として使用されます。Instant Messaging アーカイブデータは、インデックスの設定後、Portal Server 検索データベース内に格納されます。また、それらのアーカイブデータにはカテゴリを割り当てることもできます。たとえば、アラートメッセージを Alert カテゴリ内に格納したりできます。

注 データを個々のカテゴリに格納すると、検索処理が単純化されるほか、アーカイブデータをすばやく取得できるようになります。

Instant Messaging アーカイブ検索 / 表示サブレット : エンドユーザーが、特定の条件に一致するドキュメントの検索処理を実行すると、Portal Server 検索は、その条件に一致するページを取り出します。これらのページは、リモート Web ページ、Instant Messaging アーカイブデータのいずれかです。なお、Instant Messaging アーカイブデータは「Instant Messaging リソース記述子」とも呼ばれます。

- リモート Web ページの場合、条件に一致するページの URL が、検索結果リスト内に表示されます。エンドユーザーが検索結果リスト内の Web ページの URL をクリックすると、ブラウザは、リモート Web コンテナからそのページを取得します。
- Instant Messaging リソース記述子の場合、それらのアーカイブデータは、Portal Server 検索データベース内に格納されており、Web コンテナからダウンロード可能なドキュメントとして存在しているわけではありません。

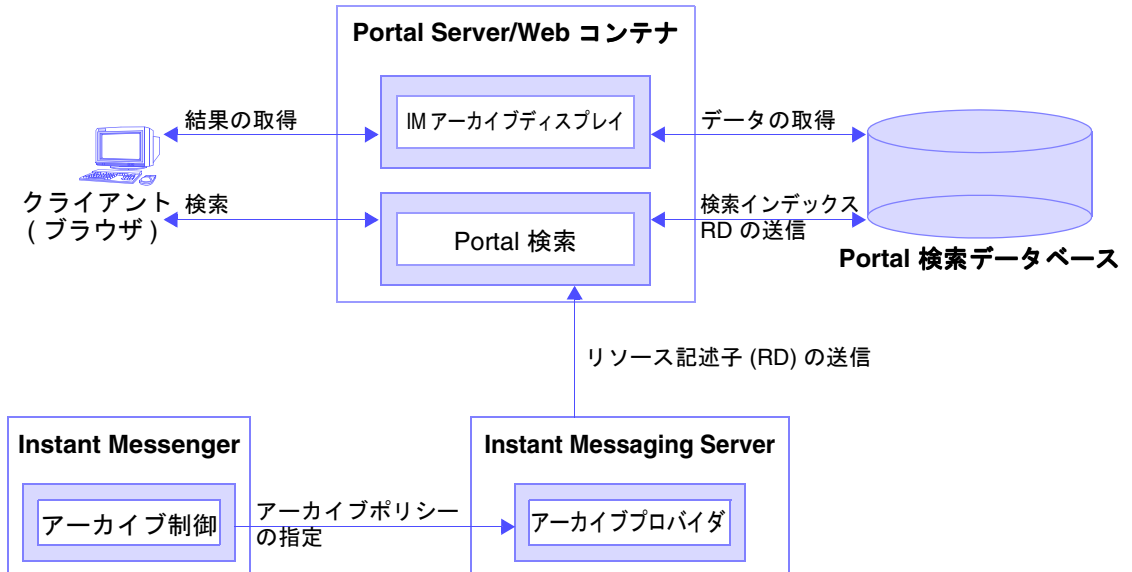
エンドユーザーが、Instant Messaging リソース記述子の URL をクリックしてそのアーカイブデータを表示しようとする、Instant Messaging アーカイブ検索 / 表示サブレットが起動されます。Instant Messaging アーカイブ検索サブレットは、Portal Server 検索データベースから目的の情報を取り出し、その Instant Messaging アーカイブデータを含んだテキスト形式または HTML 形式の応答を生成します。

Instant Messaging アーカイブプロバイダ : このコンポーネントは、アーカイブすべきインスタントメッセージが発生するたびに、Instant Messaging Server によって起動されます。Instant Messaging アーカイブプロバイダは、Instant Messaging Server から提供されたデータに基づいて、SOIF (Summary Object Interchange Format) に準拠したリソース記述子 (RD: Resource Descriptor) を作成します。そして、それらのリソース記述子を、Portal Server 検索 API 経由で Portal Server 検索データベースに送信します。なお、アーカイブプロバイダは、Portal Server 検索データベースへのデータ送信時のパフォーマンス低下を抑えるために、バッファレコードを使用します。

Instant Messenger アーカイブ制御 : Instant Messaging データのアーカイブは、エンドユーザーの人手を介さずに自動的に行えます。エンドユーザーがアーカイブ機能を制御できるようにするには、Instant Messenger アーカイブ制御コンポーネントを有効にする必要があります。このコンポーネントを使うと、エンドユーザーは、「すべての会議室をアーカイブ」などといった、デフォルトのアーカイブオプションを設定できます。また、それらのデフォルト値をトランザクション単位で変更することもできます。たとえば、エンドユーザーは、会議のコンテンツをアーカイブするように選択できます。

図 7-1 は、Instant Messaging アーカイブのコンポーネントを図示したものです。

図 7-1 Instant Messaging アーカイブのコンポーネント



インスタントメッセージのアーカイブ

すべてのインスタントメッセージは、アーカイブ時に次のいずれかのカテゴリに分類されます。

チャット：非公開会議室のすべてのメッセージ

会議室：公開会議室のすべてのメッセージ

アラート：すべてのアラートメッセージが格納される

調査：すべての調査メッセージが格納される

ニュース：ニュースチャンネルに投稿されたすべてのメッセージが格納される

Instant Messaging アーカイブプロバイダの機能は、次のとおりです。

- サーバーを通過するすべての Instant Messaging トラフィックを捕捉します。
- アーカイブデータを、Portal Server 検索内の個々のカテゴリ内に格納できます。
- データを個々のカテゴリに格納すると、検索処理を単純化できるほか、アーカイブデータをすばやく取得できるようになります。
- Portal Server デスクトップを使って検索を実行できます。
- Portal Server 検索のセキュリティ機能を使ってアクセス制御リストを提供できます。アーカイブプロバイダのセキュリティ機能を使うと、ある一連の管理ユーザーに対してのみ、アーカイブデータへのアクセスを許可できます。
- Portal Server 検索データベースの管理ツールを使ってデータ管理を行えます。

アーカイブプロバイダの有効化

▶ Instant Messaging のアーカイブプロバイダを有効にする

1. config ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

2. iim.conf ファイルを開きます。
たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

3. iim.conf ファイルに次の行を追加します。
デフォルトのアーカイブプロバイダに対して、次の行を追加します。

```
iim_server.msg_archive = true
```

カスタムアーカイブプロバイダを使用する場合、次の行を追加します。

```
im_server.msg_archive.provider = provider_name
```

Portal Server 検索ベースのアーカイブを使用する場合、*provider_name* を次の文字列で置き換えます。

```
com.iplanet.im.server.IMPSArchive
```

4. ファイルを保存します。
5. Instant Messaging Server 設定を更新します。更新するには、次のように入力します。

```
imadmin refresh
```

Instant Messaging Server に備わる API と SPI を使うと、カスタムアーカイブプロバイダを記述できます。Instant Messaging API の詳細については、[183 ページの「Instant Messaging API」](#)を参照してください。

アーカイブプロバイダの設定

アーカイブプロバイダは、アーカイブメッセージをリソース記述子 (RD) として、Portal Server 検索データベース内に格納します。アーカイブプロバイダが使用する Portal Server 検索スキーマのフィールドは、次のとおりです。

Title: このフィールドには、Conference カテゴリでは公開会議室の名前が、Chat カテゴリでは特定チャットセッション内の参加者の名前が、Alert カテゴリと News カテゴリではアラートメッセージの件名とニュースチャンネルの名前が、それぞれ格納されます。また、Poll カテゴリでは、"Poll from *Sender*" が、Title フィールドに格納されます。ここで、*Sender* は調査の送信者の表示名です。

Keyword: Conference カテゴリと Chat カテゴリの場合、このフィールドには会議室内のすべての参加者のリストが格納されます。また、公開会議室の場合、会議室の名前も格納されます。Alert カテゴリでは、送信者と受信者の表示名が格納されます。

News カテゴリでは、チャンネルの名前が格納されます。Poll カテゴリでは、送信者と受信者のリストが格納されます。以上の値に加え、すべてのカテゴリで、カテゴリ別の一意の ID も格納されます。

表 7-1 は、アーカイブプロバイダの各カテゴリの一意の ID とその説明を示したものです。

表 7-1 各カテゴリの一意の ID とその説明

カテゴリ	一意の ID
Conference Chat	RoomName-StartTime 説明: RoomName: 公開会議室または非公開会議室の名前です StartTime: RD 作成時のタイムスタンプです
Alert	Alert-messageID 説明: messageID: アーカイブメッセージのメッセージ ID です。このメッセージ ID が重要となるのは、RD に含まれるメッセージが 1 つだけの場合です。たとえば、News メッセージや Alert メッセージなどです。
Poll	Poll-pollID
News	TopicName-messageID

ReadACL: Conference カテゴリと News カテゴリでは、このフィールドの値は、それぞれ会議室とニュースチャンネルのアクセス制御ファイルに基づいて設定されます。Chat カテゴリでは、このフィールドには参加者の DN が格納されます。Alert カテゴリでは、このフィールドには送信者の DN と受信者の DN が格納されます。Poll カテゴリでは、アーカイブによって新しいアクセス制御ファイルが提供されます。

RD に対する検索アクセス権は、この ReadACL フィールドの値によって制御されます。ドキュメントレベルのセキュリティが有効になっている場合、エンドユーザーが検索結果にアクセスできるのは、ReadACL フィールドにそのエンドユーザーの DN が含まれている場合だけです。Instant Messenger アーカイブ制御が有効になっている場合、チャットメッセージに対して ReadACL フィールドに追加されるエンドユーザー DN は、エンドユーザーの選択内容に応じて変わります。

Description: このフィールドには、HTML の書式を含まないアーカイブメッセージが格納されます。

Full-Text: このフィールドには、HTML 形式のアーカイブメッセージが格納されます。

Classification: このフィールドには、アーカイブメッセージのカテゴリが格納されません。

アーカイブプロバイダ設定パラメータ

表 7-2 は、iim.conf ファイルに追加可能なアーカイブプロバイダ設定パラメータの一覧とその説明です。

表 7-2 iim.conf に設定可能なアーカイブプロバイダのパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_arch.title.attr	Title	このパラメータには、Portal Server 検索のデフォルトスキーマの Title と同等のフィールドの名前を指定します。
iim_arch.keyword.attr	Keyword	このパラメータには、Portal Server 検索のデフォルトスキーマの Keyword と同等のフィールドの名前を指定します。
iim_arch.readacl.attr	ReadACL	このパラメータには、Portal Server 検索のデフォルトスキーマの ReadACL と同等のフィールドの名前を指定します。
iim_arch.description.attr	説明	このパラメータには、Portal Server 検索のデフォルトスキーマの Description と同等のフィールドの名前を指定します。
iim_arch.fulltext.attr	Full-Text	このパラメータには、Portal Server 検索のデフォルトスキーマの Full-Text と同等のフィールドの名前を指定します。
iim_arch.category.attr	Category	このパラメータには、Portal Server 検索のデフォルトスキーマの Category と同等のフィールドの名前を指定します。
iim_arch.readacl.admin	なし	このパラメータには管理者の DN を指定します。値を複数指定する場合、値を ";" で区切る必要があります。
iim_arch.readacl.adminonly	false	このパラメータには、true、false のいずれかを指定します。 true: パラメータ iim_arch.readacl.admin に指定された管理者 DN のみが、ReadACL フィールドに追加され、ReadACL フィールドのデフォルト動作は無効になります。 false: パラメータ iim_arch.readacl.admin に指定された管理者 DN が ReadACL フィールドに追加されるほか、そのフィールドのデフォルト動作も実行されます。

表 7-2 iim.conf に設定可能なアーカイブプロバイダのパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_arch.categories	all	このパラメータには、アーカイブ可能なメッセージタイプのリストを指定します。 指定可能な値は次のとおりです。 poll alert chat conference news 複数の値も指定可能です。値はコンマ(",")で区切ります。
iim_arch.categoryname	なし	カテゴリ名が割り当てられていないカテゴリが存在した場合、このパラメータの値がそのカテゴリの名前として使用されます。
iim_arch.alert.categoryname	なし	このパラメータには、アラートアーカイブメッセージが格納されるカテゴリの名前を指定します。 注: アラートメッセージ専用のカテゴリは、必ずしも必要ではありません。
iim_arch.poll.categoryname	なし	このパラメータには、調査アーカイブメッセージが格納されるカテゴリの名前を指定します。 注: 調査メッセージ専用のカテゴリは、必ずしも必要ではありません。
iim_arch.conference.categoryname	なし	このパラメータには、会議アーカイブメッセージが格納されるカテゴリの名前を指定します。 注: 会議メッセージ専用のカテゴリは、必ずしも必要ではありません。
iim_arch.chat.categoryname	なし	このパラメータには、チャットアーカイブメッセージが格納されるカテゴリの名前を指定します。 注: チャットメッセージ専用のカテゴリは、必ずしも必要ではありません。

表 7-2 iim.conf に設定可能なアーカイブプロバイダのパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_arch.news.categoryname	なし	このパラメータには、ニュースアーカイブメッセージが格納されるカテゴリの名前を指定します。 注: ニュースメッセージ専用のカテゴリは、必ずしも必要ではありません。
iim_arch.conference.quiettime	5	このパラメータには、1つの会議室 (公開または非公開) における連続した2つのメッセージ間の最大沈黙時間を指定します。沈黙したまま指定した時間が経過すると、現在の RD は期限切れとなり、メッセージアーカイブ用の新しい RD が作成されます。この値の単位は「分」です。
iim_arch.poll.maxwaittime	15	このパラメータには、調査データをサーバー内にバッファリングする最大時間を指定します。この値の単位は「分」です。
iim_arch.ignoreexplicitdeny	true	このパラメータには、true、false のいずれかを指定します。 true: Poll カテゴリと Conference カテゴリで、明示的な拒否アクセスを持つデータはアーカイブされません。これらのメッセージがアーカイブされない場合、その情報が xmppd.log ファイル内に記録されます。 false: Poll カテゴリと Conference カテゴリで、明示的な拒否アクセスを持つデータがアーカイブされ、そのメッセージが Portal Server 検索データベースに追加されます。 注: 特定の会議室またはニュースチャンネルへのアクセスを明示的に拒否しなかった場合、デフォルトのアクセス権は、読み取り、書き込み、管理のいずれかになります。また、特定のエンドユーザーのアクセス権をなしにすることも可能です。

表 7-2 iim.conf に設定可能なアーカイブプロバイダのパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_arch.portal.search	なし	<p>このパラメータの値には、Portal Server 検索サブレットの URL を指定します。たとえば、次のように入力します。 http://www.example.com/portal/search</p> <p>このパラメータが存在しない場合、アーカイブプロバイダは、システム上に存在する AMConfig.properties ファイルに基づいて、Portal Server 検索 URL の値を決定します。</p>
iim_arch.portal.adminDN	なし	<p>このパラメータの値には、管理ユーザーの DN を指定します。たとえば、次のように入力します。 uid=amadmin,ou=People,o=internet</p> <p>Portal Server 検索のドキュメントレベルのセキュリティがオンになっている場合、このパラメータを指定する必要があります。</p>
iim_arch.portal.adminpassword	なし	<p>このパラメータの値には、iim_arch.portal.adminDN パラメータで指定された管理ユーザーのパスワードを指定します。</p> <p>Portal Server 検索のドキュメントレベルのセキュリティがオンになっている場合、このパラメータを指定する必要があります。</p>
iim_arch.portal.search.database	なし	<p>このパラメータの値には、Instant Messaging Server によってアーカイブメッセージが格納されるデータベースの名前を指定します。このパラメータを指定しなかった場合、Sun Java System Portal Server 検索のデフォルトのデータベース内に、すべてのメッセージが格納されます。</p>

デフォルト以外の Portal Server 検索データベースへのアーカイブメッセージの格納

▶ デフォルト以外のデータベースにアーカイブメッセージを格納する

1. `iim.conf` ファイルを変更します。

- a. `config` ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

- b. 任意のエディタを使って `iim.conf` ファイルを開きます。

たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

- c. デフォルトのアーカイブプロバイダに対して、次の行を追加します。

```
iim_arch.portal.search.database = database-name
```

ここで、`database-name` は、デフォルト以外のデータベースの名前です。

- d. ファイルを保存します。

2. Portal Server 検索チャンネルを変更します。

Portal Server 検索チャンネルに、別のデータベース内のデータを検索するためのオプションを追加します。詳細については、『Sun Java System Portal Server Desktop Customization Guide』を参照してください。

3. `IMArchiveDisplay.jsp` ファイルを変更します。

- a. 次のディレクトリに移動します。

```
/etc/opt/SUNWps/desktop/default_ja/IMProvider/
```

- b. `IMArchiveDisplay.jsp` ファイルのバックアップを作成します。

- c. 任意のエディタを使って `IMArchiveDisplay.jsp` ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi IMArchiveDisplay.jsp
```

- d. `IMArchiveDisplay.jsp` ファイル内のコードを検索し、次の 2 行を見つけます。

コード例 7-1 `IMArchiveDisplay.jsp` ファイル内の検索コード (編集前)

```
<search:setQuery query = "<%= scope %>"/>
<search:setRDmType rdmType = "rd-request"/>
```

- e. [コード例 7-1](#) に示した 2 行の間に、次のコード行を追加します。

```
<search:setDatabase database = "database-name"/>
```

新しいコード行を追加すると、検索コードは[コード例 7-2](#) のようになります。

コード例 7-2 IMArchiveDisplay.jsp ファイル内の検索コード (編集後)

```
<search:setQuery query = "<%= scope %>"/>
<search:setDatabase database = "database-name"/>
<search:setRDmType rdmType = "rd-request"/>
```

ここで、*database-name* は、デフォルト以外のデータベースの名前です。

Portal Server 検索データベース内のアーカイブデータの管理

注 この節の説明は、Solaris にのみ適用されます。

Instant Messaging データは、Portal Server 検索データベース内にリソース記述子 (RD) としてアーカイブされます。Portal Server 検索データベース内の個々のエントリは、リソース記述子 (RD) と呼ばれます。各 RD は、ある単一のリソースに関する一連の情報を含んでいます。各 RD のフィールドは、Portal Server 検索データベースのスキーマによって決定されます。

アーカイブデータを管理するには、これらの Portal Server 検索データベース内の RD を管理する必要があります。ここでは、Portal Server 検索データベースの保守作業のうち、頻繁に実行されるもののいくつかを説明します。

Portal Server 検索データベースにおけるデータ管理の詳細については、『Sun Java System Portal Server 管理ガイド』を参照してください。

rdmgr コマンド

rdmgr コマンドは、検索サービスを操作する際の主要コマンドです。このコマンドは、2 種類のサブコマンドを管理者に提供します。1 つは、リソース記述子 (RD) を操作するためのサブコマンド、もう 1 つは、データベースを保守するためのサブコマンドです。rdmgr コマンドは通常、検索が有効化された Portal Server インスタンスディレクトリ内で実行されます。

▶ rdmgr コマンドを起動する

1. 次のディレクトリに移動します。

```
cd /var/opt/SUNWps/https-servername/
```

2. コマンド行で次のように入力します。

```
run-cs-cli portal-server-install-dir/SUNWps/bin/rdmgr args
```

ここで、*portal-server-install-dir* は、Portal Server のインストール先ディレクトリです。

rdmgr コマンドの詳細については、『Sun Java System Portal Server 管理ガイド』の「コマンド行ユーティリティ」の項を参照してください。

リソース記述子の検索

引数値 `-Q` を指定して rdmgr コマンドを実行すると、検索処理を詳細に記述するリソース記述子 (RD) のリストが生成されます。

たとえば、次のように入力します。

- テキスト `testing` を含むリソース記述子 (RD) を検索するには、次のように入力します。

```
run-cs-cli portal-server-install-dir/SUNWps/bin/rdmgr -Q testing
```

- 特定のカテゴリに属するリソース記述子 (RD) を検索するには、次のように入力します。

```
run-cs-cli portal-server-install-dir/SUNWps/bin/rdmgr -Q
"classification=Archive:Chat:January"
```

リソース記述子の削除

Portal Server 検索データベースからリソース記述子 (RD) を削除する例を、次に示します。

テキスト `testing` を含むすべてのリソース記述子 (RD) を削除するには、次のように入力します。

```
run-cs-cli portal-server-install-dir/SUNWps/bin/rdmgr -d -Q testing
```

特定のカテゴリ `Archive:Chat:January` に属するすべてのリソース記述子 (RD) を削除するには、次のように入力します。

```
run-cs-cli portal-server-install-dir/SUNWps/bin/rdmgr -d -Q
"classification=Archive:Chat:January"
```

Instant Messenger アーカイブ制御の有効化

Instant Messenger アーカイブ制御コンポーネントを使うと、エンドユーザーは、アーカイブインスタントメッセージを制御できます。このコンポーネントを使うと、エンドユーザーは、Portal Server 検索データベース内に格納されたアーカイブインスタントメッセージを検索できます。それには、Instant Messenger のメインウィンドウ内の「アーカイブ」ボタンをクリックします。また、エンドユーザーは、Instant Messenger の「アーカイブ」タブを使って、「すべての会議室をアーカイブ」などのデフォルトのアーカイブオプションを設定することもできます。Instant Messenger アーカイブ制御の機能は、Instant Messenger の 2 つのオプションモジュールによって提供されています。

Instant Messenger アーカイブ制御コンポーネントを有効にするには、アプレット記述子ファイル内の `archive_control` アプレットパラメータを設定します。

Instant Messaging LDAP 配備の変更すべきアプレット記述子ファイルは、次のとおりです。

- `im.jnlp`、`imssl.jnlp`、`jnlpLaunch.jsp` (ポータルのみ) (Java Web Start の場合)
- `im.html`、`imssl.html`、`pluginLaunch.jsp` (ポータルのみ) (Java プラグインの場合)

JNLP ファイルおよび `jnlpLaunch.jsp` ファイルの変更

Java Web Start を使って Instant Messenger を起動する場合、Instant Messenger の Instant Messenger アーカイブ制御機能を有効にするには、次の手順を実行します。

1. Instant Messenger のドキュメントルートディレクトリに移動し、`im.jnlp` ファイルと `imssl.jnlp` ファイルを見つけます。

`pluginLaunch.jsp` ファイルは、次の場所にあります。

```
/etc/opt/SUNWps/desktop/default/IMProvider
```

2. `html`、`jsp` のいずれかのファイルを開き、次の行を追加または編集します。


```
<argument>archive_control=true</argument>
```

html アプレットページおよび pluginLaunch.jsp ファイルの変更

Java プラグインを使って Instant Messenger を起動する場合、Instant Messenger の Instant Messenger アーカイブ制御機能を有効にするには、次の手順を実行します。

1. メッセンジャのドキュメントルートディレクトリに移動し、im.html ファイルと imssl.html ファイルを見つけます。

pluginLaunch.jsp ファイルは、次の場所にあります。

/etc/opt/SUNWps/desktop/default/IMProvider

2. html、jsp のいずれかのファイルを開き、次の行を追加または編集します。

```
<PARAM NAME="archive_control" VALUE="true" />  
<EMBED archive_control=true;/>
```

注 Instant Messaging Server の iim.conf ファイル内で iim_server.msg_archive.auto の値が true に設定されている場合は、Instant Messenger アーカイブ制御を有効にしないでください。エンドユーザーのメッセンジャ設定が、すべて無視されるからです。

アーカイブデータの表示の変更

アーカイブデータは、IMArchiveDisplay.jsp ファイルを使って配備されます。IMArchiveDisplay.jsp ファイルはデフォルトで、フォルダ /etc/opt/SUNWps/desktop/default/IMProvider 内にインストールされます。このファイルを編集すれば、アーカイブデータのスタイルやリソース文字列を変更できます。

たとえば、エンドユーザーの入室時に表示されるデフォルトのシステムメッセージ「joe has joined the room」を「joe has entered the room」で置き換えるには、次の手順を実行します。

1. 任意のエディタを使って IMArchiveDisplay.jsp ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi IMArchiveDisplay.jsp
```
2. ファイル IMArchiveDisplay.jsp 内のコード例 7-3 のコード行をコード例 7-4 のもので置き換えます。

コード例 7-3 デフォルトのシステムメッセージの変更

```
....  
ht.put("has_joined_the_room","<span class='user'> {0} </span>  
<span class='headervalue'> has joined the room.</span>");  
....
```

コード例 7-4 デフォルトのシステムメッセージを置換したあと

```
....  
ht.put("has_joined_the_room","<span class='user'> {0} </span>  
<span class='headervalue'> has entered the room.</span>");  
....
```

同様に、ほかのキーに対するリソース文字列やキー情報の表示スタイルも、変更可能です。

Portal Server 検索のデフォルトスキーマ内の Title と Full-Text の属性名が変更された場合、それらの変更内容を、IMArchiveDisplay.jsp ファイルにも反映する必要があります。

アーカイブプロバイダの配備シナリオ例

この配備シナリオ例では、関連する Instant Messaging データをまとめてアーカイブする方法を説明します。

▶ 関連する Instant Messaging データをまとめてアーカイブする

データの種類ごとにカテゴリを作成します。たとえば、すべての Instant Messaging アーカイブデータが格納される Archive カテゴリ内に、チャットメッセージ格納用のサブカテゴリ Chat を作成します。また、データを日時に基づいてアーカイブするようなサブカテゴリを作成することもできます。たとえば、2002 年 12 月のチャットデータをアーカイブするには、次のようなサブカテゴリを作成します。

```
Archive:Chat:2002:12
```

▶ すべてのチャットデータを日時に基づいてアーカイブする

1. config ディレクトリに移動します。たとえば、Solaris 上では次のように入力します。

```
cd /etc/opt/SUNWiim/default/config
```

2. iim.conf ファイルを編集します。たとえば、次のように入力します。

```
vi iim.conf
```

3. パラメータ iim_arch.chat.categoryname に対し、次の値を追加します。

```
iim_arch.chat.categoryname = Archive:Chat:%Y:%M
```

アーカイブプロバイダは、現在の年を %Y に、現在の月を %M に、それぞれ自動的に割り当てます。これらの値は、システム日付とシステム時刻から取得されます。

▶ サブカテゴリ 2002 年 12 月に対するチャットデータをアーカイブおよびバックアップする

1. 次のように入力します。

```
rdmgr -Q "classification=Archive:Chat:2002:12" > archive.soif
```

2. .soif ファイルをバックアップシステムに格納します。

▶ Portal Server 検索データベースから 2002 年 12 月分のアーカイブチャットデータを削除する

- 次のように入力します。

```
rdmgr -d "classification=Archive:Chat:2002:12"
```


Instant Messaging の障害追跡と監視

この章では、Instant Messaging のインストール中および配備中に発生する可能性の高い問題を列挙し、監視エージェントの概要について説明します。各種システムコンポーネントによってさまざまな処理実行時に生成されるログ情報は、問題の切り分けや障害追跡を行う際に、極めて重要な役割を果たします。また、監視エージェントを使用すると Instant Messaging プロセスの稼働状況を監視して問題を発生前に阻止すること、利用レベルを評価して配備の規模を決定すること、および停止時間を抑えることができます。この章に含まれる節は、次のとおりです。

- [Instant Messenger の実行時情報の取得](#)
- [Instant Messenger ログの取得](#)
- [問題と解決方法](#)
- [Instant Messaging と LDAP の障害追跡](#)
- [Instant Messaging の監視](#)
- [ウォッチドッグプロセスの管理](#)

サーバー、マルチプレクサ、ウォッチドッグ、カレンダーエージェント、およびクライアントロギングの管理と、デフォルトのログファイルの場所については、[47 ページの「ロギングの管理」](#)を参照してください。

Instant Messenger の実行時情報の取得

クライアントシステムに関する情報は、Instant Messenger クライアントから取得できます。

- ▶ 「バージョン情報」ダイアログから Instant Messenger の実行時情報を取得する
 1. Instant Messenger の「ヘルプ」メニューから「バージョン情報」を選択します。
「バージョン情報」ダイアログボックスが開きます。

2. 「詳細」タブを選択します。

「詳細」タブには、障害追跡時に利用できるクライアントシステムに関する情報が表示されます。

Instant Messenger ログの取得

Instant Messenger ログを取得するには、最初にクライアントホスト上でロギングを有効にしておく必要があります。その方法については、[51 ページの「クライアントのロギングの管理」](#)を参照してください。

問題と解決方法

問題のいくつかを以下に列挙します。また、それらの原因や解決に向けての手がかりについても説明します。

- [シングルサインオンが動作しない](#)
- [メッセンジャクライアントが読み込まれないか、起動されない](#)
- [接続が拒否され、タイムアウトが発生した](#)
- [認証エラー](#)
- [IM チャネルの表示エラー](#)
- [Instant Messaging のコンテンツがアーカイブされない](#)
- [サーバー間通信の開始に失敗した](#)
- [致命的なインストールの障害によってサーバーが不整合な状態に陥った](#)

シングルサインオンが動作しない

SSO と Sun Java System Access Manager を使用している場合、Access Manager Server と Instant Messaging Server が同じ Web コンテナを使用するように設定する必要があります。

メッセージクライアントが読み込まれないか、起動されない

この問題の原因となっている可能性のあるものを、以下に列挙します。

- アプレットページ内のコードベースが間違っている。
- MIME タイプ「Application/x-java-jnlp-file」が、Web コンテナ設定内に定義されていない。
- プラグインまたは Java Web Start がインストールされていないか、正常に機能していない。
- 互換性のあるバージョンの Java が利用できない状態にある。
- セキュリティの例外。 .jar ファイルの署名を検証できない。

必要な情報を得るには、次の場所を確認してください。

- Java Web Start またはプラグインのエラー情報 (例外スタックトレースや起動ページ)
- ブラウザ上のアプレットページソース

接続が拒否され、タイムアウトが発生した

この問題の原因となっている可能性のあるものを、以下に列挙します。

- Instant Messaging Server またはマルチプレクサが実行されていない。
- アプレット記述子ファイル (.jnlp または .html) 内に指定されているマルチプレクサのホスト名またはポート番号が正しくない。
- Instant Messenger とマルチプレクサの SSL 設定が食い違っている。
- クライアントとサーバーのバージョンが一致していない。

診断情報を得るには、次の場所を確認してください。

- Instant Messaging Server とマルチプレクサのログファイル。
- Instant Messenger ログ。

認証エラー

この問題の原因となっている可能性のあるものを、以下に列挙します。

- LDAP サーバーへのアクセス時に問題が発生した。たとえば、LDAP サーバーが停止している場合や、スキーマ違反などによってプロビジョニングエラーが発生した場合など。
- エンドユーザーが見つからない。
- 資格情報が無効である。
- Access Manager のセッションが無効である。

診断情報を得るには、次の場所を確認してください。

- Instant Messaging Server、アイデンティティ認証、および LDAP に関するログファイル。

また、Sun Java System Access Manager を使用した配備では、ディレクトリ内のユーザーエントリに `iplanet-am-managed-person` オブジェクトクラスが含まれることを確認してください。このオブジェクトクラスは、Instant Messaging Server が Access Manager の配備内で有効なユーザーを検索するときに使用されます。このオブジェクトクラスの詳細と、Access Manager による使用方法については、Sun Java System Access Manager のマニュアルを参照してください。

IM チャネルの表示エラー

この問題の原因となっている可能性のあるものを、以下に列挙します。

- サーバーによるセッショントークンの検証が失敗し、認証エラーが発生した。
- Instant Messaging チャネルが正しく設定されていない。たとえば、Instant Messaging Server のホストまたはポートが正しくない場合など。
- プラグインまたは Java Web Start がインストールされていないか、正常に機能していない。
- エンドユーザーが見つからない (Instant Messaging Server による LDAP 検索時にもエンドユーザーが見つからない)。

診断情報を得るには、次の場所を確認してください。

- Instant Messaging Server と Instant Messaging チャネルに関するログ。

Instant Messaging のコンテンツがアーカイブされない

この問題の原因となっている可能性のあるものを、以下に列挙します。

- コンテンツは実際にはアーカイブされているが、エンドユーザーの権限が不足しているために、そのコンテンツにアクセスできない。
- コンテンツがまだ **Compass** データベースにコミットされていない。
- **Instant Messaging Server** でアーカイブプロバイダが無効になっている。

診断情報を得るには、次の場所を確認してください。

- **Instant Messaging Server** ログファイルとアーカイブログファイル。

サーバー間通信の開始に失敗した

この問題の原因となっている可能性のあるものを、以下に列挙します。

- サーバーの識別が正しくない。
- SSL 設定の不一致。

診断情報を得るには、次の場所を確認してください。

必要な情報を得るには、**Instant Messaging Server** の 2 つのログファイルを確認してください。

致命的なインストールの障害によってサーバーが不整合な状態に陥った

Instant Messaging のインストールまたはアンインストール中に致命的なエラーが発生した場合、システムが不整合な状態に陥る可能性があります。そのような状態では、インストール、アンインストールのどちらも完了できなくなります。こうした場合、インストールを最初からやり直せるように、**Instant Messaging** のすべてのコンポーネントを手動で削除する必要があります。クリーンアップ手順は、パッケージの削除とレジストリ情報の削除から構成されます。

1. 次回のインストールで必要となる可能性のある情報のすべてを、バックアップします。[67 ページの「Instant Messaging データのバックアップ」](#)を参照してください。
2. 製品のレジストリ情報を手動で編集します。
Solaris 9 の場合、次のコマンドを実行します。

prodreg (1)

その他のすべてのシステムの場合は、次の手順に従ってください。

- a. productregistry.xml を編集し、このファイルから Instant Messaging の XML 要素をすべて削除します。デフォルトでは、この productregistry XML ファイルは次の場所に格納されています。
 - o Solaris の場合 :/var/sadm/install/productregistry
 - o Linux の場合 :/var/tmp/productregistry
- b. 次のパッケージまたは RPM が残っている場合は、それらを削除します。
 - o SUNWiim
 - o SUNWiimc
 - o SUNWiimd
 - o SUNWiimid
 - o SUNWiimin
 - o SUNWiimjd
 - o SUNWiimm

Instant Messaging と LDAP の障害追跡

LDAP に関する次のような問題が、特定の配備環境で発生する可能性があります。
iim.conf ファイル内の対応する LDAP パラメータを変更してください。

問題: ディレクトリを匿名でバインドできない。デフォルトでは、Instant Messaging Server は LDAP ディレクトリの匿名検索を実行する。しかし一般的なサイトでは、任意のユーザーがすべての情報を検索して取得してしまわないように、ディレクトリに対する匿名検索は禁止されている。

解決方法: サイトのディレクトリで匿名検索が禁止されている場合、バインドと検索を実行するため使用できるユーザー ID とパスワードを Instant Messaging Server に設定する必要があります。必要な資格情報を設定するには、iim_ldap.usergroupbinddn と iim_ldap.usergroupbindcred の各パラメータを使用します。

問題: サイトで、ユーザー認証のために uid 属性が使用されていない。

解決方法: iim_ldap.loginfilter パラメータを使用して、ディレクトリが認証で使用する属性を設定します。デフォルトでは、このパラメータは uid に設定されています。さらに、値に uid を含むすべての「filter」パラメータを変更します。

問題: Instant Messenger での連絡先の表示をデフォルトから変更したい。

解決方法: デフォルトでは、Instant Messenger は cn 属性を使用して、連絡先の名前を表示します。そのため、連絡先の名前は Frank Smith や Mary Jones のように表示されます。iim_ldap.userdisplay と iim_ldap.groupdisplay の各パラメータを、uid など別の属性になるよう編集してください。

問題: ディレクトリが、ワイルドカードを使用するようにインデックス設定されている。

解決方法: iim_ldap.allowwildcardinuid パラメータを True に設定します。このパラメータによって、ユーザー ID に対して、検索時にワイルドカードの使用を有効にするかどうかが決まります。大部分のディレクトリでは、ユーザー ID のインデックスはワイルドカードなしの検索専用として設定されているため、デフォルト値は False になっています。この値を True に設定した場合、ユーザー ID のインデックスを部分文字列検索用に設定しない限り、パフォーマンスが低下する可能性があります。

問題: ディレクトリで標準以外のオブジェクト / グループクラスが使用されている。

解決方法: 適切な iim_ldap.* パラメータの inetorgperson と groupofuniquenames を独自の値に置き換えます。

問題: ディレクトリで、電子メールアドレス用に mail 属性が使用されていない。この場合、Instant Messenger はオフラインのユーザーにインスタントメッセージを電子メールメッセージとして転送できない。

解決方法: デフォルトでは、iim_ldap.user.mailattr に mail という値が設定されています。この値をサイト独自の値に変更します。

問題: ディレクトリで、ユーザー ID 属性として uid 以外の属性が使用されている。

解決方法: ユーザー ID 属性として loginname 属性が使用されている場合は、次のように変更します。

```
iim_ldap.user.uidattr=loginname
```

次のインデックス指示を LDAP のインデックス規則に追加します。

```
index login name eq
```

Instant Messaging の監視

Instant Messaging には、監視活動に役立つエージェントが提供されています。このエージェントは、mfwk (monitoring framework management) エージェントと呼ばれます。mfwk エージェントは、CAC (Common Agent Container) に含まれます。CAC および mfwk エージェントは、Instant Messaging のインストール時にインストールされます。

mfwk エージェントを使用することで、XMPP モジュールの統計情報を JConsole (Java Monitoring and Management Console) で利用できるようになります。このエージェントによってステータスとパフォーマンスのメトリックスが公開される Instant Messaging サービスを表 8-1 に示します。

表 8-1 mfwk エージェントによって監視される Instant Messaging サービス

カテゴリ	サービス	説明
認証	auth	認証です。
検出	disco	検出の要求です。
メッセージ	message	2つのクライアント間のアラートおよび1対1のチャットセッションに関する情報です(メッセージの送信速度など)。
会議室	muc-presence、 muc-admin、および muc-message	会議室への入退室、会議室の管理要求、中継された会議室(グループチャット)のメッセージなど、会議室の統計情報です。
Presence	presence-subscribe、 presence-unsubscribe、 presence-probe、および presence-authorize	更新や登録など、Presence 情報です。
プライバシー	private-get、private-set、 privacy-get、および privacy-set	プライバシーの詳細です。
名簿	roster-get および roster-set	名簿情報です。
検索	search	検索の統計情報です。

この節では、mfwk エージェントと JConsole の管理と障害追跡、およびエージェントと JConsole を使用して Instant Messaging を監視する方法について、次の各項で説明します。

- [mfwk エージェントの管理](#)

- 監視データの表示
- mfwk エージェントの障害追跡

mfwk エージェントの管理

mfwk エージェントの管理には、mfwkadm コマンド行ユーティリティを使用します。たとえば、エージェントの起動、停止、および再起動や、エージェントが実行するパフォーマンス監視ジョブの新規セットアップと参照を行うことができます。このユーティリティの使用方法の詳細については、mfwkadm マニュアルページを参照してください。また、このエージェントは CAC の内部で実行されます。CAC の詳細については、cacaoadm と cacao のマニュアルページを参照してください。この節では、これらのマニュアルページの参照方法について説明します。

▶ mfwkadm と CAC のマニュアルページを表示する

1. コマンド行で、MANPATH 環境変数に正しいパスが指定されているかどうかを確認します。

表 8-2 に、マニュアルページのパスを示します。

表 8-2 mfwkadm と CAC のマニュアルページへのパス

コンポーネント	Solaris のパス	Linux のパス
mfwkadm	/opt/SUNWmfwk	/opt/sun/mfwk
CAC	/opt/SUNWcacao/man	/opt/sun/man

2. 正しいパスが指定されていない場合、mfwkadm ユーティリティと CAC のマニュアルページの場所を MANPATH 環境変数に追加します。たとえば、Solaris 上で C シェルを使用するのであれば、次のように入力します。

```
setenv
MANPATH=/usr/dt/man:/usr/man:/opt/SUNWmfwk:/opt/SUNWcacao/man
```

Linux では、/etc/man.config にマニュアルページのパスを追加します。

3. マニュアルページが表示されることを確認します。たとえば、次のように入力します。

```
man mfwkadm
```

監視データの表示

mfwk エージェントが公開する情報を表示するには、JConsole を使用します。JConsole は、ネットワーク内の Java アプリケーションと仮想マシンの監視と管理を行うことができるグラフィカルコンソールツールです。JConsole を使用すると、サーバー JVM を参照することや、表 8-1 に示される Instant Messaging サービスを監視することができます。

JConsole の使用方法の詳細については、次の場所にある JConsole のマニュアルを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/ja/docs/ja/tooldocs/share/jconsole.html>

<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/ja/docs/ja/guide/management/jconsole.html>

▶ JConsole を使用して Instant Messaging の監視情報を表示する

1. root としてログインします。
2. CLASSPATH に CAC、JConsole、および JMX jar ファイルの場所を指定します。

注 1 行で入力するようにしてください。

Solaris の場合：

```
/opt/SUNWcacao/lib/cacao_cacao.jar:/opt/SUNWjdmk/5.1/lib/jmxremote_optional.jar:/usr/jdk/entsys-j2se/lib/jconsole.jar
```

Linux の場合：

```
/opt/sun/cacao/share/lib/cacao_cacao.jar:/opt/sun/jdmk/5.1/lib/jmxremote_optional.jar:/usr/jdk/entsys-j2se/lib/jconsole.jar
```

3. JConsole を実行します。

注 コマンドは 1 行で入力するようにしてください。

Solaris の場合：

```
/usr/jdk/entsys-j2se/bin/java sun.tools.jconsole.JConsole "service:jmx:cacao-jmxml://localhost;wellknown=true;username=root"
```

Linux の場合：

```
/usr/jdk/entsys-j2se/bin/java sun.tools.jconsole.JConsole "service:jmx:cacao-jmxml://localhost;wellknown=true;username=root"
```

4. 「MBeans」タブで、「XMPP」ツリーをタブを展開します。

ツリーにサービス属性とその値が一覧表示されます。JConsole で表示されるすべての Instant Messaging サービスについては、表 8-1 を参照してください。

mfwk エージェントの障害追跡

mfwk エージェントを使用して Instant Messaging を監視しているときに問題が発生した場合、次の事項を確認してください。

- インストールの依存関係が保たれていること。特に、JDMK、CAC、および mfwk エージェントがインストールされていることを確認します。次のコマンドを使用して確認します。

Solaris の場合：

- mfwk エージェント：`pkginfo SUNWmfwk-agent`
- CAC：`pkginfo SUNWcacao`
- JDMK: CAC が実行中であれば、JDMK はインストール済みです。また、jar ファイルが `/opt/SUNWjdmk/version/lib` と `/opt/SUNWjdmk/version/bin` にインストールされていることも確認できます。`version` は JDMK のバージョン番号です (たとえば、5.1)。

Linux の場合：

- mfwk エージェント：`rpm -qi sun-mfwk-agent-1.0`
- CAC：`rpm -qi sun-cacao-1.0`
- JDMK: CAC が実行中であれば、JDMK はインストール済みです。また、jar ファイルが `/opt/sun/jdmk/version/lib` と `/opt/sun/jdmk/version/bin` にインストールされていることも確認できます。`version` は JDMK のバージョン番号です (たとえば、5.1)。さらに、次のコマンドを使用することもできます。

```
rpm -qi sun-jdmk-runtime-5.1
```

- CAC が実行中であること。CAC のステータスを取得するには、次のコマンドを使用します。

Solaris の場合：`/opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm status`

Linux の場合：`/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm status`

CAC が実行されていない場合、次のコマンドを使用して起動します。

Solaris の場合：`/opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm start`

Linux の場合：`/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm start`

- XMPP モジュールが CAC に読み込まれて、実行中であること。

```
/opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm status com.sun.im.service.xmpp
```

- mfwk エージェントが CAC に読み込まれていること。
Solaris の場合: /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm list-modules
Linux の場合: /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm list-modules
mfwk エージェントのモジュール名は com.sun.mfwk.mfwk_module です。
- mfwk エージェントが実行中であること。mfwk エージェントのステータスを取得するには、次のコマンドを使用します。
Solaris の場合: /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm status
com.sun.mfwk.mfwk_module
Linux の場合: /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm status com.sun.mfwk.mfwk_module
mfwk エージェントが実行されていない場合、次のコマンドを使用して起動します。
Solaris の場合: /opt/SUNWmfwk/bin/mfwkadm start
Linux の場合: /opt/sun/mfwk/bin/mfwkadm start

JConsole の障害追跡

JConsole を表示できない場合、次の事項を確認してください。

- JConsole へのパスが CLASSPATH に正しく入力されていること。
- JConsole を実行する前に root としてログインしていること。

ウォッチドッグプロセスの管理

ウォッチドッグプロセスはサーバーとマルチプレクサを監視し、コンポーネントが停止していることを判別した場合にコンポーネントの再起動を試みます。

ウォッチドッグは、サーバーに対して定期的に接続を確立することにより、サーバーが実行中であるかどうかを判別します。これには、サーバー上の設定に基づき、サーバーに直接接続する場合と、マルチプレクサを通じて接続する場合があります。

ウォッチドッグは、サーバーの動作ステータスの調査を試みます。ステータスを判別できない場合、サーバーへの接続を確立しようとします。動作ステータスの調査と接続確立のどちらの処理にも失敗した場合、ウォッチドッグはサーバーを停止および再起動します。

ウォッチドッグを使用する前に、`imadmin check` コマンドを使用してウォッチドッグが有効で実行中であることを確認してください。デフォルトでは、**Instant Messaging** のインストール時にウォッチドッグは有効に設定され、実行されています。

imadmin ユーティリティの詳細については、付録 B 「Instant Messaging imadmin ツールリファレンス」を参照してください。

ウォッチドッグのステータスの確認

ウォッチドッグのステータスを確認するには、imadmin コマンド行ユーティリティを使用します。

▶ ウォッチドッグのステータスを確認する

1. imadmin コマンド行ユーティリティが格納されているディレクトリに移動します。
`cd im_svr_base/sbin`
2. imadmin check を実行します。
`./imadmin check watchdog`
imadmin ユーティリティによって、ウォッチドッグの現在のステータスが返されます。

ウォッチドッグの有効化と無効化

デフォルトでは、Instant Messaging のインストール時にウォッチドッグは有効に設定されます。iim.conf 内の設定パラメータによってウォッチドッグの有効化と無効化を行うことができます。

▶ ウォッチドッグを有効または無効にする

1. iim.conf ファイルが格納されているディレクトリに移動します。
`cd im_cfg_base`
2. iim_wd.enable パラメータを次のように設定して、ウォッチドッグを有効または無効にします。
ウォッチドッグを有効にする : `iim_wd.enable=true`
ウォッチドッグを無効にする : `iim_wd.enable=false`
3. iim.conf ファイルを保存して閉じます。
4. Instant Messaging Server 設定を更新します。
`cd im_svr_base/sbin`
`./imadmin refresh`

ウォッチドッグのロギング管理

ウォッチドッグのロギング管理は、サーバー、マルチプレクサ、およびカレンダーエージェントのロギング管理と同じ方法で行うことができます。ウォッチドッグのログファイルは、`im_db_base/log/iim_wd.log` として保存されています。

ウォッチドッグを含むすべての **Instant Messaging** コンポーネントのロギングレベルを設定する方法については、[47 ページの「ロギングの管理」](#) を参照してください。

関連情報

[付録 A 「Instant Messaging の設定パラメータ」](#)

[付録 B 「Instant Messaging imadmin ツールリファレンス」](#)

[付録 C 「Instant Messaging API」](#)

Instant Messaging の設定パラメータ

この章では、Instant Messaging の設定パラメータについて、次の各節で説明します。

- [iim.conf ファイルの使用](#)
- [一般的な設定パラメータ](#)
- [ユーザーソース設定パラメータ](#)
- [ロギング設定パラメータ](#)
- [Instant Messaging Server 設定パラメータ](#)
- [複数サーバー設定パラメータ](#)
- [マルチプレクサ設定パラメータ](#)
- [ウォッチドッグパラメータ](#)
- [エージェントパラメータ](#)

iim.conf ファイルの使用

Instant Messaging の設定情報は、設定ディレクトリ (*im_cfg_base*) 内の *iim.conf* ファイルに格納されます。

- Solaris の場合：
`/etc/opt/SUNWiim/default/config/iim.conf`
- Linux の場合：
`/etc/opt/sun/im/default/config/iim.conf`

このファイルは ASCII 形式のプレーンテキストファイルであり、各行には次の規則に基づいて、特定のサーバーパラメータとその値が定義されます。

- パラメータとその値 (複数可) は、1 つの等号 (=) で区切られます。なお、等号の前後には、スペースまたはタブを挿入できます。

- 値は、二重引用符 (" ") で囲むことができます。複数の値を設定可能なパラメータの場合、値文字列の全体を二重引用符で囲む必要があります。
- コメント行の先頭文字は、感嘆符 (!) でなければなりません。コメント行は情報提供を目的とした行です。したがって、サーバーはコメント行を無視します。
- 同じパラメータが 2 回以上現れた場合、最後に現れたパラメータの値が有効になります。
- ¥ (円マーク) は、行の継続を示すための記号であり、値 (複数可) が 1 行に収まらないことを示します。
- 各行は、行終端記号 (¥n、¥r、または ¥r¥n) で終端されます。
- キーは、行内の、最初の非ホワイトスペース文字から最初の ASCII 等号 (=) またはセミコロン (;) の直前までの、すべての文字から構成されます。キーの末尾がセミコロンであった場合、そのあとに、文字列 lang- と、値の解釈に用いる言語を示すタグが続きます。その言語タグのあとには、等号 (=) が続きます。等号の前後に存在するすべてのホワイトスペース文字は、無視されます。行内の残りの文字はすべて、関連する値文字列の一部となります。
- 値文字列内の複数の値は、コンマ (,) で区切られます。
- 単一の値の内側に、コンマ、空白、改行、タブ、二重引用符、バックスラッシュなどの特殊文字が含まれている場合、その値全体を二重引用符で囲む必要があります。さらに、値内のすべてのキャリッジリターン、改行、タブ、バックスラッシュ、二重引用符には、¥ (円マーク) を付ける必要があります。
- iim.conf ファイルを変更した場合、その新しい設定が有効になるように、Instant Messaging Server を再起動する必要があります。

注 インストール時に初期化された iim.conf ファイルを変更する際には、本書で説明した手順に必ず従ってください。

一般的な設定パラメータ

表 A-1 は、一般的な設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-1 一般的な設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim.comm.modules</code>	<code>iim_server, iim_mux</code>	使用する通信モジュールです。有効値は <code>iim_server</code> と <code>iim_mux</code> です。デフォルト値は「 <code>iim_server, iim_mux</code> 」で、サーバーとマルチプレクサの両方を使用することを意味します。 <code>iim_mux</code> はマルチプレクサ用の値です。
<code>iim.smtpserver</code>	<code>localhost</code>	電子メールまたはポケットベルにメッセージを転送するオプションが設定されたエンドユーザーにメールを送信する際に用いる SMTP サーバーです。
<code>iim.instancedir</code>	<code>/opt</code>	インストールディレクトリのルートです。
<code>iim.instancevardir</code>	Solaris の場合： <code>/var/opt/SUNWiim</code> Linux の場合： <code>/var/opt/sun/im</code>	実行時のファイル（エンドユーザープロファイルデータベースやログなど、サーバーおよびマルチプレクサによって実行時に生成されるファイル）を格納するためのディレクトリを設定します。
<code>iim.user</code>	LDAP 配備の場合、 <code>inetuser</code> ポータル配備の場合、 <code>root</code>	サーバープロセスを実行するためのエンドユーザー名です。
<code>iim.group</code>	LDAP 配備の場合、 <code>inetgroup</code> ポータル配備の場合、 <code>root</code>	サーバープロセスの実行時に用いるグループです。
<code>iim.jvm.maxmemorysize</code>	<code>256</code>	サーバーの実行元 JVM が使用可能なヒープの最大サイズ (M バイト単位) です。Java コマンドの <code>-mx</code> 引数を構築する際に使用されます。

表 A-1 一般的な設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
iim.mail.charset	なし	このパラメータは、メールのヘッダを ASCII 形式にするかどうか、エンコードしないようにするかどうかを指定します。 オフラインのアラート用に送信するメールメッセージのヘッダをエンコードする際に用いる文字セットの名前を指定します。 例: iim.mail.charset=iso-2022-jp
iim.jvm.command	/usr/j2se/bin/java	JRE (Java Runtime Executable) の場所です。
iim.identity.basedir	/opt	Sun Java System Access Manager のデフォルトインストールディレクトリです。ベースディレクトリとも呼ばれます。
iim.identity.jre	/usr/java_1.3.1_04	Access Manager がすべてのプロセスを実行する際に使用する JRE の場所です。
iim.portal.deployuri	/portal	Portal Server の war ファイルを Access Manager 内に配備する際に用いられる URI です。
iim.portal.host	imhostname	Portal Server を実行しているサーバーのホスト名です。デフォルト以外のポート番号を使用する場合は、ポート番号を指定します。
iim.portal.protocol	http	Portal Server へのアクセス時に使用するプロトコルです。
iim.policy.resynctime	720	Instant Messaging Server は、古いエンドユーザー情報を消去する目的で、キャッシュされたすべてのエンドユーザー情報を定期的にクリアします。このパラメータには、キャッシュされたエンドユーザー情報のクリア頻度を分単位で指定します。

ユーザーソース設定パラメータ

表 A-2 は、ユーザーソース設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-2 ユーザーソース設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_ldap.host</code>	<code>localhost:389</code>	Instant Messaging Server がエンドユーザー認証時に使用する、LDAP サーバーの名前とポートです。
<code>iim_ldap.searchbase</code>	<code>o=internet</code>	LDAP サーバー上におけるエンドユーザーおよびグループの検索時に、ベースとして使用する文字列です。
<code>iim_ldap.usergroupbinddn</code>	なし (サーバーは匿名検索を実行する)	検索用 LDAP サーバーへのバインド時に使用する dn を指定します。
<code>iim_ldap.usergroupbindcred</code>	なし (サーバーは匿名検索を実行する)	LDAP 検索時に <code>iim_ldap.usergroupbinddn</code> の dn と組み合わせて使用するパスワードを指定します。
<code>iim_ldap.loginfilter</code>	<code>(&((objectclass=inetorgperson)(objectclass=webtopuser))(uid={0}))</code>	エンドユーザーのログイン時に使用する検索フィルタです。
<code>iim_ldap.usergroupbyidsearchfilter</code>	<code>((&(objectclass=groupofuniquenames)(uid={0}))(&((objectclass=inetorgperson)(objectclass=webtopuser))(uid={0})))</code>	ディレクトリ内で指定された ID でエンドユーザーおよびグループを検索する際に使用される、検索フィルタです。
<code>iim_ldap.usergroupbynamesearchfilter</code>	<code>((&(objectclass=groupofuniquenames)(cn={0}))(&((objectclass=inetorgperson)(objectclass=webtopuser))(cn={0})))</code>	ディレクトリ内で指定された名前でもエンドユーザーおよびグループを検索する際に使用される、検索フィルタです。

表 A-2 ユーザーソース設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_ldap.allowwildcardinuid</code>	False	検索実行時に UID のワイルドカードを有効にするかどうかを指定します。大部分のディレクトリでは、UID のインデックスはワイルドカードなしの検索専用として設定されているため、デフォルト値は False になっています。この値を True に設定した場合、UID のインデックスを部分文字列検索用に設定しない限り、パフォーマンスが低下する可能性があります。
<code>iim_ldap.userclass</code>	<code>inetOrgPerson, webtop user</code>	エントリが特定のエンドユーザーに属することを示す LDAP クラスです。
<code>iim_ldap.groupclass</code>	<code>groupOfUniqueNames</code>	エントリが特定のグループに属することを示す LDAP クラスです。
<code>iim_ldap.groupbrowsefilter</code>	<code>(objectclass=groupofuniquenames)</code>	ディレクトリ内の指定された検索ベースですべてのグループをブラウズする際に使用される検索フィルタです。
<code>iim_ldap.searchlimit</code>	40	検索結果として返すエントリの最大数です。値 -1 は、このサーバー上での検索を無効にすることを意味し、値 0 は、無制限の検索を示します。
<code>iim_ldap.userdisplay</code>	<code>cn</code>	エンドユーザーの表示名として使用する LDAP 属性です。
<code>iim_ldap.groupdisplay</code>	<code>cn</code>	グループの表示名として使用する LDAP 属性です。
<code>im_ldap.useruidattr</code>	<code>uid</code>	エンドユーザーの UID として使用する LDAP 属性です。
<code>im_ldap.groupmemberattr</code>	<code>uniquemember</code>	グループのメンバーリストを提供する LDAP 属性です。
<code>iim_ldap.usermailattr</code>	<code>mail</code>	エンドユーザーのプロビジョニングされた電子メールアドレスを格納するための LDAP 属性です。オフラインエンドユーザーに電子メールメッセージを送信する際に使用されます。

表 A-2 ユーザーソース設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_ldap.userattributes	なし	LDAP ユーザーエントリのカスタム属性リストを格納するための LDAP 属性です。
iim_ldap.groupattributes	なし	LDAP グループエントリのカスタム属性リストを格納するための LDAP 属性です。
iim_ldap.groupmemberurlattr	なし	ダイナミックグループのメンバーシップ属性です。LDAP フィルタまたは LDAP URL が格納されます。
iim_ldap.useidentityadmin	true (Access Manager Instant Messaging Service Definition コンポーネントがインストールされている場合のデフォルト値) false (Access Manager Instant Messaging Service Definition コンポーネントがインストールされていない場合のデフォルト値)	値が true の場合、Directory Server へのバインド時に Access Manager 管理者の資格情報が使用されます。

ロギング設定パラメータ

表 A-3 は、ロギング設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-3 ロギング設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
iim.log.iim_server.severity	INFO	サーバーモジュールに対するロギングレベルです。有効値は、レベルが高いものから低いものの順に、FATAL、ERROR、WARNING、INFO、DEBUG です。低いロギングレベルを選択すると、そのレベルよりも高いレベルのログもすべて記録されます。たとえば、WARNING を選択した場合、FATAL、ERROR、および WARNING のログが記録されます。

表 A-3 ロギング設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim.log.iim_server.url</code>	<code>iim_runtime_base/log/xmppd.log</code>	サーバーログファイルの場所です。ディスク領域がいっぱいにならないように、このファイルの中身を定期的に削除する必要があります。
<code>iim.log.iim_mux.severity</code>	INFO	マルチプレクサモジュールに対するロギングレベルです。有効値は、レベルが高いものから低いものの順に、FATAL、ERROR、WARNING、INFO、DEBUG です。低いロギングレベルを選択すると、そのレベルよりも高いレベルのログもすべて記録されます。たとえば、WARNING を選択した場合、FATAL、ERROR、および WARNING のログが記録されます。
<code>iim.log.iim_mux.url</code>	<code>iim_runtime_base/log/mux.log</code>	マルチプレクサログファイルの場所です。ディスク領域がいっぱいにならないように、このファイルの中身を定期的に削除する必要があります。
<code>iim.log.iim_server.maxlogsize</code>		このパラメータには、サーバーログファイルの最大サイズを指定します。ログファイルのサイズがこのパラメータに指定された値を超えると、サーバーによって新しいログファイルが作成されます。
<code>iim.log.iim_wd.severity</code>	INFO	ウォッチドッグに対するロギングレベルです。有効値は、レベルが高いものから低いものの順に、FATAL、ERROR、WARNING、INFO、DEBUG です。低いロギングレベルを選択すると、そのレベルよりも高いレベルのログもすべて記録されます。たとえば、WARNING を選択した場合、FATAL、ERROR、および WARNING のログが記録されます。

表 A-3 ログイン設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim.log.iim_calendar.severity</code>	INFO	カレンダーエージェントに対するログインレベルです。有効値は、レベルが高いものから低いものの順に、FATAL、ERROR、WARNING、INFO、DEBUG です。低いログインレベルを選択すると、そのレベルよりも高いレベルのログもすべて記録されます。たとえば、WARNING を選択した場合、FATAL、ERROR、および WARNING のログが記録されます。

Instant Messaging Server 設定パラメータ

表 A-4 は、Instant Messaging Server 設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.autosubscribe</code>	FALSE	サーバーによって登録が自動的に承認されるかどうかを示します。有効値は TRUE と FALSE です。TRUE の場合、登録の要求に続いて、サーバーによって自動的に登録済みの応答が生成されます。サーバーは変更された名簿を、登録者と、登録者が連絡先として追加したユーザーに送信します。この機能を使うためには、ユーザーと連絡先が同じドメイン内に存在する必要があります。

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.domainname</code>	ホストのドメイン名	<p>このサーバーがサポートする論理 Instant Messaging Server ドメイン名です。この名前は、ネットワーク上のほかのサーバーがこのサーバーを特定する際に使用されます。また、このサーバーが自身のエンドユーザーをほかのサーバーに通知する際にも使用されます。これは必ずしも、Instant Messaging Server を実行しているシステムの完全修飾ドメイン名である必要はありません。</p> <p>たとえば、システム <code>iim.xyz.com</code> が企業 <code>xyz.com</code> の唯一の Instant Messaging Server であった場合、このドメイン名として <code>xyz.com</code> が選択される可能性が高くなります。</p>
<code>iim_server.port</code>	5269	<p>サーバーのバインド先として使用する IP アドレスとポートです。サーバーはこのポート上で、ほかのサーバーからの接続を待機します。IP アドレス設定は、マルチホームのマシン上で特定の IP アドレスのみを使用したい場合に便利です。IP アドレスを指定しなかった場合、<code>localhost</code> の <code>INADDR_ANY</code> の値が使用されます。</p>
<code>iim_server.useport</code>	TRUE	<p>このサーバーがサーバー間通信ポート上で待機するかどうかを示します。有効値は TRUE と FALSE です。TRUE の場合、サーバーは、<code>iim_server.port</code> に定義されたポート上で待機します。ただし、ポートが明示的に定義されていない場合は、ポート 9919 上で待機します。</p>

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.sslport</code>	5223	セキュリティ保護されたサーバー間通信時に使用されるサーバーの SSL ポートです。 注: 値の形式は、 <code>IPaddress:port</code> です。IP アドレスを指定しなかった場合、 <code>localhost</code> の <code>INADDR_ANY</code> の値が使用されます。
<code>iim_server.usesslport</code>	FALSE	このサーバーがサーバー間 SSL 通信ポート上で待機するかどうかを示します。有効値は TRUE と FALSE です。TRUE の場合、サーバーは、 <code>iim_server.sslport</code> に定義されたポート上で待機します。ただし、ポートが明示的に定義されていない場合は、ポート 5223 上で待機します。
<code>iim_server.clienttimeout</code>	15	アクティブでないクライアント接続をサーバーが破棄するまでの時間 (分) を指定します。たとえば、マシンがシャットダウンされた場合などに適用されます。設定可能な最小値は、5 分です。

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.usesso</code>	0	<p>このパラメータは、認証時に SSO プロバイダを使用するかどうかをサーバーに指示します。SSO プロバイダは、サーバーが SSO サービスを使ってセッション ID を検証する際に使用されるモジュールです。</p> <p>ポータル配備の場合、Portal Server セッション API を使えば、IM サーバーは、クライアントから送信されてきたセッション ID を検証できます。</p> <p>このパラメータの値は、0、1、-1 のいずれかです。</p> <p>0: SSO プロバイダを使用しません (デフォルト)。</p> <p>1: SSO プロバイダを使用します。ただし、SSO 検証が失敗した場合には LDAP を使用します。</p> <p>-1: SSO プロバイダのみを使用します。SSO 検証が失敗しても、LDAP 認証を試みません。</p> <p><code>iim_server.usesso</code> パラメータは、<code>iim_server.ssoprovider</code> パラメータと組み合わせて使用します。</p>
<code>iim_server.ssoprovider</code>	なし	<p>このパラメータには、SSO プロバイダを実装しているクラスを指定します。<code>iim_server.usesso</code> の値が 0 以外であり、かつこのオプションが設定されていなかった場合、サーバーは、デフォルトの Portal Server ベースの SSO プロバイダを使用します。</p>
<code>iim_server.msg_archive</code>	false	<p>このパラメータは、アーカイブプロバイダを有効にするかどうかを指定します。</p>

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.msg_archive.provider</code>	なし	このパラメータには、カスタムアーカイブプロバイダのリストを設定します。このパラメータには複数の値を設定でき、個々の値はコンマ (,) で区切ります。
<code>iim_server.msg_archive.auto</code>	false	このパラメータは、エンドユーザーのアーカイブ制御設定を考慮するかどうかを、サーバーに指示します。 このパラメータの値が true の場合、ユーザー設定で「すべてをアーカイブ」オプションを選択したのと同じ効果を持ちます。
<code>iim_server.conversion</code>	false	このパラメータは、メッセージ変換を有効にするかどうかを指定します。メッセージ変換プロバイダの設定リストを使ってメッセージ変換を行うかどうかを指定します。
<code>iim_server.conversion.provider</code>	なし	このパラメータには、メッセージ変換時に使用するメッセージ変換プロバイダのリストを設定します。 このパラメータには複数の値を設定でき、個々の値はコンマ (,) で区切ります。

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.servertimeout</code>	-1	<p>リモートサーバーがアクティブ状態にない場合、リモートサーバーが開いた接続をこのサーバーが自動的に閉じるように設定することが可能です。これは、リモートサーバーからこのサーバーへ最後の要求が送られてきた時刻を定期的に測定することで実現されています。リモートサーバーから最後の要求が届いたあとの経過時間が、<code>iim_server.servertimeout</code> パラメータの値を超えた場合に、リモートサーバーへの接続が切断されます。</p> <p>このパラメータ値の単位は「分」です。</p>
<code>iim_server.enable</code>	true	<p>この値は、Instant Messaging Server を有効にするかどうかを示します。Instant Messaging マルチプレクサを有効にする場合、このパラメータを <code>false</code> に設定します。</p>
<code>iim_server.conversion.external.cmmmand</code>	なし	<p>このパラメータには、メッセージ変換時に使用する外部コマンドを指定します。</p>
<code>iim_server.stat_frequency</code>	1	<p>このパラメータには、サーバーが活動概要をログファイルに記録する頻度を指定します。ただし、サーバーが活動概要をログファイルに記録するのは、サーバーの最低ログ重要度が <code>INFO</code> 以下に設定された場合だけです。この値の単位は「分」です。</p>
<code>iim_server.secconfigdir</code>	<code>/etc/opt/SUNWiim/default/config</code>	<p>このディレクトリには鍵と証明書のデータベースが含まれます。また、通常はセキュリティモジュールデータベースも含まれます。</p>

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.keydbprefix</code>	なし	<p>この値には、鍵データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。鍵データベースのファイル名は、必ず <code>key3.db</code> で終わる必要があります。</p> <p>たとえば <code>This-Database-key3.db</code> のように、鍵データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>This-Database</code> になります。</p>
<code>iim_server.certdbprefix</code>	なし	<p>この値には、証明書データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。証明書データベースのファイル名は、必ず <code>cert7.db</code> で終わる必要があります。</p> <p>たとえば <code>Secret-stuff-cert7.db</code> のように、証明書データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>Secret-stuff</code> になります。</p>
<code>iim_server.secmodfile</code>	<code>secmod.db</code>	<p>この値には、セキュリティモジュールファイルの名前を設定します。</p>
<code>iim_server.certrnickname</code>	<code>Server-Cert</code>	<p>この値には、証明書のインストール時に入力した証明書の名前が必要です。</p> <p>この証明書の名前は、大文字と小文字が区別されます。</p>
<code>iim_server.keystorepasswordfile</code>	<code>sslpassword.conf</code>	<p>この値には、鍵データベースのパスワードが格納されたファイルの相対パスと名前が必要です。このファイルは次の行を含む必要があります。</p> <p>Internal (Software) Token:<i>password</i></p> <p><i>password</i> は、鍵データベースを保護するパスワードです。</p>

表 A-4 一般的な Instant Messaging Server 設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.trust_all_cert</code>	false	この値が true の場合、サーバーはすべての証明書を信頼するとともに、証明書の情報をログファイル内に追加します。

複数サーバー設定パラメータ

ネットワーク上の複数の Instant Messaging Server 間の通信を実現するには、このサーバーに接続する他のサーバーのリストと、それらの各協調サーバー (coserver) に関する情報を、サーバーに設定する必要があります。特定の協調サーバーを識別するには、Instant Messaging ドメイン名、ホスト名、ポート番号、サーバー ID、およびパスワードを指定します。

各協調サーバーに割り当てられるシンボリック名は、`coserver1` などのような、文字と数字から構成される文字列です。こうしたシンボリックな命名規則を用いることで、複数のサーバーを指定できます。

Instant Messaging Server をこのように設定すれば、より大きな Instant Messaging コミュニティを形成できます。その結果、次のようなことが可能になります。

- 各サーバー上のエンドユーザーは、ほかのすべてのサーバー上のエンドユーザーと通信できる
- ほかのサーバー上の会議室を使用できる
- ほかのサーバー上のニュースチャンネルに登録できる (ただし、与えられたアクセス権限の範囲内)

表 A-5 は、複数サーバー設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-5 複数サーバー設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.serverid</code>	なし	このサーバーが、ほかのすべてのサーバーに対して自身の識別子として使用する文字列です。
<code>iim_server.password</code>	なし	このサーバーが、ほかのすべてのサーバーに対して自身を認証する際に使用するパスワードです。

表 A-5 複数サーバー設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_server.coservers</code>	なし	<p>このサーバーへの接続を許可するサーバーのシンボリック名をコンマで区切って指定します。意味のある名前であれば、どのようなものでも指定できますが、<code>.serverid</code>、<code>.password</code>、<code>.host</code> の各パラメータで使用する名前に一致させる必要があります。</p> <p>例:</p> <pre>iim_server.coservers=coserver1,coserver2</pre> <p>または</p> <pre>iim_server.coservers=abc,xyz,ntc</pre>
<code>iim_server.coserver1.serverid</code>	なし	<p>このサーバーへの認証時に、名前 <code>coserver1</code> で表された協調サーバーを識別する文字列です。</p> <p>注: <code>iim_server.coservers</code> のリストに <code>abc</code> を設定した場合、対応する <code>serverid</code> 名は、<code>iim_server.abc.serverid</code> となります。</p>
<code>iim_server.coserver1.password</code>	なし	<p>このサーバーへの認証時に、名前 <code>coserver1</code> で表された協調サーバーが使用するパスワードです。</p> <p>注: <code>iim_server.coservers</code> のリストに <code>abc</code> を設定した場合、対応するパスワード名は、<code>iim_server.abc.password</code> となります。</p>
<code>iim_server.coserver1.host</code>	なし	<p>このサーバー上のエンドユーザーが、名前 <code>coserver1</code> で表されたサーバー上のエンドユーザーと通信する際の、接続先の IP アドレスとポートです。</p> <p>注: <code>iim_server.coservers</code> のリストに <code>abc</code> を設定した場合、対応するホスト名は、<code>iim_server.abc.host</code> となります。</p> <p>注: 値の形式は、<code>name:port</code>、<code>IPaddress:port</code> のいずれかです。</p>
<code>iim_server.coserver1.usessl</code>	False	<p>このサーバーが SSL を使ってサーバー <code>coserver1</code> と通信するかどうかを示します。有効値は TRUE と FALSE です。</p>

マルチプレクサ設定パラメータ

表 A-6 は、マルチプレクサ設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-6 マルチプレクサ設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_mux.listenport</code>	<code>multiplexorname</code> または <code>IP address:5222</code>	マルチプレクサが Instant Messenger から受信する要求を待機する際に使用する IP アドレスまたは FQDN および待機ポートです。値の形式は、 <code>IP_address:port</code> 、 <code>multiplexorname:port</code> のいずれかです。IP アドレスまたはドメイン名を指定しなかった場合、 <code>localhost</code> の <code>INADDR_ANY</code> の値が使用されます。 この値を変更した場合、ファイル <code>im.html</code> と <code>im.jnlp</code> 内のポート値も、同じ値に変更する必要があります。
<code>iim_mux.serverport</code>	45222	マルチプレクサが通信する相手の IM サーバーおよびポートです。値の形式は、 <code>servername:port</code> 、 <code>IP_address:port</code> のいずれかです。
<code>iim_mux.numinstances</code>	1	マルチプレクサのインスタンス数です。このパラメータは、Solaris プラットフォームに対してのみ有効です。
<code>iim_mux.maxthreads</code>	5	マルチプレクサの 1 インスタンス当たりの最大スレッド数です。
<code>iim_mux.maxsessions</code>	2000	1 マルチプレクサプロセス当たりの最大同時接続数です。
<code>iim_mux.usessl</code>	off	この値が on に設定された場合、マルチプレクサは、アプリケーションデータを交換する前に、受け入れた接続ごとに SSL ハンドシェイクを要求します。
<code>iim_mux.seconfigdir</code>	<code>/etc/opt/SUNWiim/default/config</code>	<code>/etc/opt/SUNWiim/default/config</code> は、 <code>iim_mux.seconfigdir</code> パラメータの値です。このディレクトリには鍵と証明書のデータベースが含まれます。また、通常はセキュリティモジュールデータベースも含まれます。

表 A-6 マルチプレクサ設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>iim_mux.keydbprefix</code>	なし	<p>この値には、鍵データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。鍵データベースのファイル名は、必ず <code>key3.db</code> で終わる必要があります。</p> <p>たとえば <code>This-Database-key3.db</code> のように、鍵データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>This-Database</code> になります。</p>
<code>iim_mux.certdbprefix</code>	なし	<p>この値には、証明書データベースのファイル名のプレフィックスが必要です。証明書データベースのファイル名は、必ず <code>cert7.db</code> で終わる必要があります。</p> <p>たとえば <code>Secret-stuff-cert7.db</code> のように、証明書データベース名にプレフィックスが含まれている場合、このパラメータの値は <code>Secret-stuff</code> になります。</p>
<code>iim_mux.secmofile</code>	<code>secmod.db</code>	この値には、セキュリティモジュールファイルの名前を設定します。
<code>iim_mux.cernickname</code>	<code>Server-Cert</code>	<p>この値には、証明書のインストール時に入力した証明書の名前が必要です。</p> <p>この証明書の名前は、大文字と小文字が区別されます。</p>
<code>iim_mux.keystorepasswordfile</code>	<code>/etc/opt/SUNWiim/default/config/sslpassword.conf</code>	<p>この値には、鍵データベースのパスワードが格納されたファイルの相対パスと名前が必要です。このファイルは次の行を含む必要があります。</p> <p><code>Internal (Software) Token:password</code></p> <p><code>password</code> は、鍵データベースを保護するパスワードです。</p>
<code>iim_mux.stat_frequency</code>	<code>600</code>	この値は、マルチプレクサが活動概要をログファイルに記録する頻度を表します。最小値は 10 秒です。
<code>iim_mux.enable</code>	<code>true</code>	値が <code>true</code> の場合、このインスタンスでマルチプレクサが実行されます。値が <code>false</code> の場合、このインスタンスでマルチプレクサは実行されません。

ウォッチドッグパラメータ

ウォッチドッグはサーバープロセスを監視し、サーバーが停止していることを判別した場合にサーバーの再起動を試みます。ウォッチドッグについては、[152 ページの「ウォッチドッグプロセスの管理」](#)を参照してください。

表 A-7 は、ウォッチドッグの設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-7 ウォッチドッグ設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
iim_wd.enable	true	ウォッチドッグ機能を有効にします。このパラメータをリセット、すなわちウォッチドッグを無効にするには、false に設定します。 オペレーティングシステムの管理コンソールを使用して Instant Messaging Server を監視している場合は、競合を回避するために、ウォッチドッグを無効にしてください。
iim_wd.period	300 (秒)	ウォッチドッグは定期的にサーバーを調査して、サーバーが実行中であるかどうかを確認します。このパラメータは、ステータス調査を行う間隔を設定します。
iim_wd.maxRetries	3 (再試行の回数)	ウォッチドッグが Instant Messaging Server のシャットダウンと再起動を行う前に、サーバーに接続を試みる回数を設定します。最大は 10 回です。

エージェントパラメータ

カレンダーエージェントなどのエージェントは、Instant Messaging Server 内で機能が有効になり、ほかの Sun Java™ System Server との相互運用性を高めます。

表 A-8 は、エージェントの設定パラメータの一覧とその説明です。

表 A-8 エージェント設定パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
jms.consumers	なし	カレンダーエージェントとともに使用されます。アラームの名前を含みます。このパラメータは、次の値に設定する必要があります。 cal_reminder

表 A-8 エージェント設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>.jms.consumer.cal_reminder.destination</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。アラームの宛先です。ics.conf ファイル内の <code>caldb.serveralarms.url</code> 設定パラメータと同じ値であることが必要です。たとえば、次のようになります。</p> <pre>enp:///ics/customalarm</pre>
<code>.jms.consumer.cal_reminder.provider</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。プロバイダの名前です。通常、ens に設定します。このパラメータの値は、<code>.jms.providers</code> と同じ名前にする必要があります。</p>
<code>.jms.consumer.cal_reminder.type</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。設定するアラームの種類です。このパラメータは、次の値に設定する必要があります。</p> <pre>topic</pre>
<code>.jms.consumer.cal_reminder.param</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。アラームパラメータです。このパラメータの値は、引用符を含めて次のように設定する必要があります。</p> <pre>"eventtype=calendar.alarm"</pre>
<code>.jms.consumer.cal_reminder.factory</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。新しいカレンダーリマインダーメッセージのリスナーです。自身を登録します。このパラメータは、次の値に設定する必要があります。</p> <pre>com.ipplanet.im.server.JMSCalendarMessageListener</pre>
<code>.jms.providers</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。プロバイダの名前です。通常、このパラメータの値は ens に設定します。<code>.jms.consumer.cal_reminder.provider</code> と同じ値であることが必要です。</p>
<code>.jms.provider.ens.broker</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。ENS のホスト名と、ENS が受信する要求を待機するポートの番号です。ics.conf ファイルのパラメータ <code>service.ens.port</code> で指定されるポートに設定します。デフォルト値は 57997 です。たとえば、次のようになります。</p> <pre>.jms.provider.ens.broker=cal.example.com:57997</pre>

表 A-8 エージェント設定パラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>jms.provider.ens.factory</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。トピック接続オブジェクトの作成に使用されるファクトリクラスです。このパラメータは、次の値に設定する必要があります。</p> <p><code>com.ipplanet.ens.jms.EnsTopicConnFactory</code></p>
<code>iim_agent.enable</code>	なし	<p>TRUE または <code>iim.conf</code> に存在しない場合、Instant Messaging エージェントが有効になります。値を FALSE に設定すると、すべてのエージェントが無効になります。</p>
<code>iim_agent.agent-calendar.enable</code>	なし	<p>カレンダーエージェントとともに使用されます。TRUE または <code>iim.conf</code> に存在しない場合、カレンダーエージェントを有効にするコンポーネントだけが読み込まれます。</p>
<code>agent-calendar.jid</code>	なし	<p>カレンダーエージェントの JID です。</p>
<code>agent-calendar.password</code>	なし	<p>カレンダーエージェントのパスワードです。</p>
<code>iim_server.components</code>	なし	<p>カレンダーエージェントを Instant Messaging Server のコンポーネントととして記述します。このパラメータは、次の値に設定する必要があります。</p> <p><code>agent-calendar</code></p>

Instant Messaging imadmin ツールリファレンス

この章では、Instant Messaging を管理するための imadmin コマンドについて説明します。

imadmin

imadmin ユーティリティを使うと、Instant Messaging Server およびマルチプレクサの起動、停止、および再起動を行うことができます。imadmin を、root または設定時に指定したエンドユーザーとして実行します。

要件:

imadmin ユーティリティは、Instant Messaging Server がインストールされているホスト上で起動する必要があります。

場所:

`im_svr_base/sbin`

表 B-1 は、imadmin 関連コマンドの一覧とその説明です。

表 B-1 各種 imadmin コマンドとその説明

コマンド	説明
<code>imadmin check</code>	コンポーネント (server、multiplexor、agent-calendar、および watchdog) が実行中であるかどうかを確認し、結果を表示します。コンポーネントを指定しないと、imadmin ユーティリティはすべてのコンポーネントに関する情報を返します。
<code>imadmin start</code>	有効になっているコンポーネント (サーバー、マルチプレクサのいずれかまたは両方) を起動します。

表 B-1 各種 imadmin コマンドとその説明 (続き)

コマンド	説明
imadmin stop	有効になっているコンポーネント (サーバー、マルチプレクサのいずれかまたは両方) を停止します。
imadmin refresh	有効になっているコンポーネント (サーバー、マルチプレクサのいずれかまたは両方) を更新します。
imadmin start server	サーバーのみを起動します。
imadmin stop server	サーバーのみを停止します。
imadmin refresh server	サーバーのみを更新します。
imadmin start multiplexor	マルチプレクサのみを起動します。
imadmin stop multiplexor	マルチプレクサのみを停止します。
imadmin refresh multiplexor	マルチプレクサのみを更新します。
imadmin start agent-calendar	カレンダーエージェントのみを起動します。
imadmin stop agent-calendar	カレンダーエージェントのみを停止します。
imadmin refresh agent-calendar	カレンダーエージェントのみを更新します。
imadmin start watchdog	ウォッチドッグのみを起動します。
imadmin stop watchdog	ウォッチドッグのみを停止します。
imadmin refresh watchdog	ウォッチドッグのみを更新します。
imadmin migrate	現在のポリシーアクセス制御ファイルに基づいて、 Sun Java System Access Manager のポリシーを生成します。次の場所にある『 Sun Java Enterprise System 2005Q1 アップグレードと移行 』を参照してください。 http://docs.sun.com/doc/819-2235?l=ja
imadmin version	バージョンを表示します。

形式

```
imadmin [Solaris_options] [action] [component]
```

オプション

表 B-2 は、imadmin コマンドに対するオプションの一覧とその説明です。

表 B-2 imadmin コマンドのオプション

オプション	説明
-c <i>alt-config-file</i>	アクション start、refresh とともに使用し、 /etc/opt/SUNWiim/config/iim.conf ファイルとは別の設定ファイル を指定します。
-h	imadmin コマンドに関するヘルプを表示します。

アクション

表 B-3 は、さまざまな imadmin コマンドで実行されるアクションの一覧とその説明です。

表 B-3 imadmin コマンドのアクション

オプション	説明
check	Instant Messaging コンポーネント (server、multiplexor、 agent-calendar、および watchdog) に関する情報を返します。 この操作では [<i>component</i>] を指定する必要はありません。
start	classpath と Java のヒープサイズを設定したあと、指定された すべてのコンポーネントを起動します。
stop	指定されたすべてのコンポーネントのデーモンを停止します。
refresh	指定されたコンポーネントを停止および起動します。設定変更時 に使うと便利です。

コンポーネント

表 B-4 は、imadmin コマンドに対するコンポーネントの一覧とその説明です。

表 B-4 imadmin コマンドのコンポーネント

オプション	説明
agent-calendar	カレンダーエージェント (agent-calendar) を示します。
multiplexor	マルチプレクサのみを示します。
server	Instant Messaging Server を示します。
watchdog	ウォッチドッグを示します。

Instant Messaging API

Instant Messaging によって使われる API について説明します。

Instant Messaging API の概要

Instant Messaging には、拡張モジュールや統合化モジュールの開発に役立つ Java API が各種用意されています。それらの API の詳細なマニュアルは、Javadoc によって生成された HTML ファイルとして、インストールされた Instant Messenger コンポーネントに付属しています。Javadoc ファイルは、`im_svr_base/html/apidocs/` ディレクトリ内にインストールされています。API マニュアルを参照するには、ブラウザで `imcodebase/apidocs` を表示します。codebase は、Instant Messenger リソースのコードベースを表します。

Instant Messaging API は、次のとおりです。

- [Instant Messaging サービス API](#)
- [メッセンジャ Bean](#)
- [サービスプロバイダインタフェース](#)
- [認証プロバイダ API](#)

Instant Messaging サービス API

Instant Messaging API は、同一ホスト上またはリモートホスト上に存在するアプリケーションが、プレゼンス、会議室、通知、調査、ニュースチャンネルなどといった Instant Messaging の各種サービスにアクセスする際に使用されます。

Instant Messaging サービス API を使うと、次のことが行えます。

- Java ベースまたは Web ベースのクライアント (ポータルチャンネルなど) を作成する

- 別のクラスのクライアントを利用可能にするブリッジ (ゲートウェイ) を作成する
- Instant Messenger 機能や在席確認機能を既存のアプリケーションに組み込む
- 外部のニュースソースを Instant Messenger のニュースとして表示する

メッセージ Bean

メッセージ Bean は、動的に読み込まれるモジュールであり、その目的は、メッセージの機能を拡張することにあります。メッセージ Bean を使うと、既存の Instant Messenger ウィンドウ内にボタンやメニュー項目などのアクションリスナーを追加したり、チェックボックスやトグルボタンなどのアイテムリスナーを追加したりできます。アイテムリスナーは、エンドユーザー入力の受信時に起動されます。また、Bean 固有のアクションは、エンドユーザーの入力に基づきます。これらの Bean は、独自の設定パネルを追加したり、Bean 固有のプロパティをサーバー上に保存したりする能力を備えています。これらの Bean には、Instant Messenger が受信する任意のイベント (新しいアラートメッセージなど) を通知できます。

メッセージ Bean を使用したアプリケーションでは、次のことが行えます。

- エンドユーザー間で、音声やビデオに加え、アプリケーションや会議を共有できる
- アーカイブ目的で、会議の記録 (送受信されたアラートの内容など) を抽出および処理できる

注 Instant Messenger のアーカイブ制御機能は、メッセージ Bean を使って提供されています。

サービスプロバイダインタフェース

サービスプロバイダインタフェース API を使うと、Instant Messaging のサーバー機能を拡張できます。サービスプロバイダインタフェースは、次の独立した API から構成されています。

- アーカイブプロバイダ API
- ドキュメントコンバータ API
- 認証プロバイダ API

アーカイブプロバイダ API

アーカイブプロバイダはソフトウェアモジュールの一種であり、通常、アーカイブシステムや監査システムとの統合化機能を提供します。特定のサーバー処理が実行されると、その処理用に設定されたアーカイブプロバイダが起動されます。

アーカイブプロバイダは、次のサーバー処理に対して起動されます。

- インスタントメッセージの送信時。インスタントメッセージとは、アラート、調査、チャット、ニュース、会議など。
- 認証イベント中 (ログイン時やログアウト時)。
- Presence ステータスの変更時。
- 登録イベント中 (あるユーザーが会議室に入退室する時や、新しいチャンネルに登録 / 登録解除する時など)。

アーカイブプロバイダ API を使用したアプリケーションとしては、次のものがあります。

- Instant Messaging アーカイブ

Instant Messaging のデフォルトの Instant Messaging アーカイブは、アーカイブプロバイダ API に基づいています。Instant Messaging アーカイブの詳細については、「[Instant Messaging アーカイブの管理](#)」を参照してください。

- リソースの使用量を制御する目的でその使用統計を記録するアプリケーション

メッセージ変換 API

メッセージコンバータは、個々のメッセージまたはその一部がサーバーを通過する際に起動されます。メッセージコンバータは、対象のメッセージ部分をまったく変更しない場合もありますし、それらのメッセージ部分を変更または削除する場合があります。テキスト部分は、Java の **String** オブジェクトとして処理されます。メッセージコンバータは、それ以外の添付ファイルをバイトストリームとして処理し、処理済みのバイトストリーム (オリジナルとは異なる可能性がある) を返します。ただし、削除する必要のある添付ファイルに対しては、何も返しません。

メッセージ変換 API を使用したアプリケーションでは、次のことが行えます。

- ウィルスのチェックと除去
- 変換エンジンの統合化
- メッセージ内容のフィルタリング

認証プロバイダ API

認証プロバイダ API を使えば、Access Manager のパスワードベースまたはトークンベースの認証サービスを使用しない環境下で、Instant Messaging を配備できます。この API はエンドユーザーが認証を要求するたびに起動されます。また、この API は LDAP 認証と組み合わせて使用できます。

Access Manager によるシングルサインオン (SSO) は、認証プロバイダ API を使って実現されています。また、この API を使えば、ほかの認証システムとの統合化を図ることも可能です。

用語集

このマニュアルセットで使用されている用語については、『Java Enterprise System 用語集』 (<http://docs.sun.com/doc/819-1933?l=ja>) を参照してください。

索引

A

Access Manager

ポリシー, 104, 109 ~ 119

B

BEA Web コンテナ

カスタム設定, 26

C

CAC、「Common Agent Container」を参照

Common Agent Container, 148

I

ID

状態ファイルの, 28

iim.conf パラメータの問題, 146

iim.conf ファイル, 37, 47, 54, 59, 66, 136, 139, 157

imadmin check

ウォッチドッグと, 152

imadmin コマンド, 43, 179

imres.jnlp ファイル, 79

index.html ファイルと im.html ファイルのカスタマイズ, 78

Instant Messaging

Web ブラウザと, 31

カスタムインストールの完了, 26

スタンドアロンアプリケーション, 32

設定, 26

Instant Messaging Server のドメイン名パラメータ, 20

Instant Messaging Server のポート番号パラメータ, 20

Instant Messaging Server のホスト名パラメータ, 20

Instant Messaging インストールディレクトリパラメータ, 20

Instant Messaging マルチプレクサのポート番号パラメータ, 20

Instant Messenger

起動, 31

J

Java Web Start, 71

JNLP MIME タイプ, 29

L

LDAP ディレクトリサーバー

IM が特定ユーザーとして検索できるようにする,
65

M

mfwkadm, 149

mfwk エージェント, 148

MIME タイプファイル, 29

S

SSL

設定, 55

設定パラメータ, 167

有効化, 61

SSL の有効化, 61

Sun Java System Instant Messaging Server

SSL, 55

アクセス制御, 101

サーバー間通信, 52

ディレクトリ構造, 35

バックアップ, 67

ログインの概要, 47

Sun Java System Instant Messaging Server のバック

アップ, 67

Sun Java System Instant Messaging サーバー

設定ファイル, 37

Sun Java System Instant Messenger

カスタマイズ, 75

プロキシ設定, 90

sysTopicsAdd.acl ファイル, 108

W

Web ブラウザ

Instant Messaging と, 31

あ

アクセス制御ファイル, 104, 106 ~ 109

形式, 107

サンプル, 108

デフォルトの権限, 108

アップグレード後

設定, 26

い

インストール後

設定, 26

う

ウォッチドッグ

imadmin check コマンド, 152

起動, 44

ステータス, 153

停止, 44

無効化, 153

有効化, 153

ログイン, 154

え

エージェント

common container, 148

mfwk, 148

カレンダー, 43

管理, 149

か

会議室

管理, 89

会議室およびニュースチャネルの作成権限のエンド
ユーザーへの付与, 90

カレンダーエージェント

起動, 43

停止, 43

管理

会議室, 89

ニュースチャネル, 89

ロギング, 47

き

既存のユーザーへの Instant Messaging サービスの
割り当てパラメータ, 21

起動

Instant Messenger, 31

カレンダーエージェント, 43

クライアント, 31

サーバーとマルチプレクサ, 43, 46

く

クライアント

Web ブラウザと, 31

起動, 31

システムの設定, 31

スタンドアロンアプリケーション, 32

設定, 29

け

権限, 101, 122

こ

コンテナ

エージェント, 148

さ

サーバー

ウォッチドッグによる起動, 44

ウォッチドッグによる停止, 44

設定パラメータの変更, 46

マルチプレクサとして有効化, 20

ロギングレベル, 50

サーバー間通信, 53

サーバーの無効化パラメータ, 20

サイレント設定, 28

し

状態ファイル

ID, 28

生成, 28

す

スタンドアロンアプリケーション

Instant Messaging と, 32

ステータス

ウォッチドッグ, 153

せ

設定

BEA Web コンテナ, 26

Instant Messaging, 26

SSL, 55

SSL パラメータ, 167

アップグレード後, 26
インストール後, 26
クライアント, 29
クライアントシステム, 31
サーバー間通信, 53
サイレント, 28
マルチプレクサインスタンス, 20

設定パラメータ

SSL, 167
一般, 165
複数サーバー, 172
マルチプレクサ, 174
ユーザーソース, 161
ログイン, 163

設定ファイル, 35

て

停止

カレンダーエージェント, 43
サーバーとマルチプレクサ, 44

ディレクトリ構造, 35

に

ニュースチャンネル

管理, 89

は

パス

cacao マニュアルページ, 149
mfwkadm マニュアルページ, 149

パラメータ

Instant Messaging Server のドメイン名, 20
Instant Messaging Server のポート番号, 20
Instant Messaging Server のホスト名, 20

Instant Messaging インストールディレクトリ, 20

InstantMessaging マルチプレクサのポート番号, 20

既存のユーザーへの Instant Messaging サービスの割り当て, 21

サーバーの無効化, 20

リモート Instant Messaging Server のホスト名, 21

ふ

ファイル

ウォッチドッグのログ, 154

プロキシ設定, 90

へ

変更

設定パラメータ, 46

ユーザーの権限, 109

ほ

ポート番号

サーバー, 20

サーバー間通信, 20

セキュリティ保護されたサーバー間通信, 20

マルチプレクサ, 20

ポリシー, 101 ~ 122

ま

マニュアル

概要, 13

マルチプレクサ

listenport パラメータ, 47, 80

- ウォッチドッグによる起動, 44
- ウォッチドッグによる停止, 44
- 設定, 20
- ログインレベル, 50

マルチプレクサのポート番号, 20

む

無効化

- ウォッチドッグ, 153

ゆ

有効化

- ウォッチドッグ, 153

ユーザー管理, 40

ユーザーの権限

- 会議室の作成, 90
- ニュースチャンネルの作成, 90
- 変更, 109

ユーザープロビジョニング, 40

り

リモート Instant Messaging Server のホスト名パラメータ, 21

ろ

ログイン

- ウォッチドッグ, 154
- 概要, 47
- レベルの設定, 51
- ログファイルの監視と内容の削除, 50

ログインレベル, 49

ログファイルのレベルの設定, 51

